

A decorative border of black floral and vine motifs surrounds the central text area.

クレオールのためごと
史遊会通信

諸橋 奏 著

クレオールのだわぐや

本冊子は新潟日報（夕刊）コラム「晴雨計」に掲載（一九九九年八月～二〇〇〇年一月）されたものに、手もとにある小文を序、後序にかえて付し、まとめたものである。

十八歳の時に離郷。以来五十年、「クレオール（現代流民）」の生活を過ごして来た。覚悟あつての筈であるが、折りに触れて幼少時代の「刷り込み」が私を戸惑わせた。そんな「雪国の故郷」への「思い」が伝えられればと思っている。

序にかえて

あの青春の日々を共に過ごした松韻寮生が還暦を迎えたとは夢の如くである。

顧みれば、我々が生をうけた昭和一桁後半は、「満洲事変」(六年)がおき、「海軍軍縮条約破棄」(九年)と、日本が戦争突入の準備を進めていた頃であった。昭和二十年の破局時は国民学校上級生乃至旧制中学低学年であった。続いての二十三年の「学制改革」をもろにうけつつ受験。仙台に来たのは、米国占領下から日本が独立を回復(二十七年四月、講和条約発効)した直後のことであった。それぞれに「アルトハイデルベルクの如き杜の学都」の面影を描いて……。

しかし、街はいまだ戦災の跡が残り、占領に続く「朝鮮戦争」(二十五年勃発、二十八年休戦協定)で、基地の町であった。衣・食・住なおままならず、寮生は「一汁または一菜に一膳めし」、何時も空腹であった。世界中が「何が本物か」を模索しており、日本は全体主義から一転しての民主主義で混沌としていた。

そんな中で「向山」に立地した寮は、市街地に出かけることを『下山』するぞお」と称し、時勢の大波に揺られながらも「文化派」の色濃い生活集団であった。今様に言えば、その文化史観は「全体を意識した個の確立」であり、これを実践していたと言える。幸いに寮生数が適数だったことが、自分史

（歴史）を見つめ直し、他人史（異文化）を理解し、吸収するに恰好であった。

この生活体験を力にして三十年以降の日本の復興と繁栄の先頭に立って努力、爾来、「昭和」が六十四年で終り、平成三年（一九九二）に起った世界の一大転機、「ソ連邦消滅」「欧州単一市場発足」「湾岸戦争」、国内では「バブル崩壊」等々、二〇世紀から二二世紀への動きが見えた時にリタイアという世代であった。

あとか 恰もパノラマの如き世界史を背景に、激動の日本という回り舞台で、寮で培った「精神的所産としての文化」をひっさげて、それぞれの持場で精一杯の舞人を務め、昭和の幕が降りるのを見届けて花道を退場……と正に昭和史が自分史であったと言えよう。

偶々、延四学年、三年間足らずの短期間、しかも全数百四十二人という小人数であった松韻寮、われわれの青春であり、われわれを育んだ母体松韻寮、もう一人たりとも増えることのない寮生、今は無き寮、ただわれわれ個々の寮生に、そしてその集団の中にしか残っていない存在である松韻寮。その意味だけでも、かけがえのない美的世界なのである。（仙台）

平成八年十月

寮史「松韻よ、永遠に」序文

目次

◎	隅田川対信濃川	1
◎	越後の細道	2
◎	異文化ショック	4
◎	味覚の源	5
◎	ビハクとガングロ	7
◎	方向オンチ	8
◎	衣食足りて	9
◎	故郷からの電話	11
◎	トキの遺言	12
◎	食糧問題と聖書	14
◎	辞典を眺める	15
◎	二〇世紀とは	17
◎	三つの一の宮	18

◎	謙信公は多忙	20
◎	サケのたわごと	21
◎	F Mの誕生	23
◎	お歳暮も加齢	25
◎	“アラ”さがし	26
◎	県の木“雪椿”	28
◎	ほろにがい話	29
◎	禁断の木の実	31
◎	伝統の大切さ	32
◎	縄文期のメツカ	34
◎	雪の教え	35
◎	現代流民考	37
◎	後序にかえて	38
◎	むすびに	40

墨田川対信濃川

梅雨が明けると、長岡市民は一樣に落ち着かなくなる。八月二日、三日の花火大会が待ちどおしいのだ。故郷を離れて久しい私にも、その思いは変わらない。

数年前、名古屋で行われた「夏といえばやつぱり何」というアンケートでは、かき氷、スイカ、そうめん、ビールを抑えて花火が第一位を占めたが、これは、時代、地域の別を超えて変わらない日本人の感情だろう。

今年も各地で大輪の花が夜空を華やかに彩っているようだ。演出も年々多彩になってきているが、伝統や職人技、立地や規模などからみると、やはり東京の「隅田川花火大会」と「長岡まつり花火大会」が双璧（そうへき）なのではないか。

「隅田川」は、享保十八（一七三三年）、八代將軍吉宗の時に始まった。前年の大凶作と疫病を払い、水神を祀（まつ）るためと伝えられている。戦後、両国を舞台に復活、途中十六年の中断をはさんで、昭和五十三年からは、桜橋―言問橋、駒形橋―厩橋で二万発が打ち上げられている。昨年の人出は八十万八千人だったという。

一方、「信濃川」は、ルーツを上杉謙信に求める説もあるが、これは少々乗りすぎで、天保十二（一八四一年）、藩主牧野忠雅の川越移封取りやめを祝って打ち上げたのが始まりのようだ。大正末年には早くも正三尺玉を上げていること、戦後の復活も早く継続していること、現在では全国から観光客を集

めていることなどからみて、両者に優劣はつけがたい。

そこで、身びいきを避けるうってつけの行司にご登場願おう。放浪の画家山下清氏である。「今年の花火見物はどこへ行こうかな」という辞世の言に、花火に魅せられた画伯の思いが集約されているように思うのだが、その代表作が「長岡の花火」。精緻(せいち)に描きこまれた美しさは類を見ない。展覧会では絵の前に列ができ、涙ぐんでいる人も。軍配は「信濃川」に上がった、と思うのは、やはり、長岡っ子の身びいきにすぎるだろうか。

一九九九年(平成十一年)八月六日

越後の細道

わが国を代表する文人として、芭蕉と漱石を挙げるのに、誰(だれ)も異論はないだろう。

松尾芭蕉が「奥の細道」の旅で越後の国を通ったのは、元禄二(一六八九)年、旧暦の七夕のころであった。現在の七夕祭りは陽暦の七月七日が一般的だが、地方によつてはひと月遅れのところもある。仙台七夕まつりもその一つで、新潟でも、月遅れのところが少なくない。

七夕祭りは、中国伝来の星祭りと日本古来の豊作祈願や土着信仰が習合したものだが、この風習は奈良時代から行われており、芭蕉のころには民間にもかなり広まっていたといわれる。私の場合、七夕と聞くと、天の川―芭蕉―奥の細道と連想が働く。「荒海や佐渡によこたふ天の川」の故である。「奥

の細道」中の最高傑作とされるこの句は、七月四日に^{出雲崎}で想を得、七夕に直江律で詠まれたという。

私が紀行文に初めて接したのは、長岡高校生のときであった。十六日間の越後滞在中の記述がいかにも少ないのがはなはだ不満だった。後年、機会を見つけては芭蕉の足跡を辿（たど）る旅を試みるようになったから、この思いは頭の隅にとどまりつづけていた。

今初夏、出羽三山を訪ねたが、その途中、持参した「奥の細道」をあらためて精読し、積年の疑問がようやく氷解した。彼の旅の目的を知り得たからである。奥・羽、つまり陸奥の国と出羽の国を見聞することが、芭蕉の旅のテーマだったのである。だからこそ、平泉ではさらに奥の南部に、また象潟では秋田へと思いを馳（は）せたのである。書名の「奥の細道」が「宮城野から松島にいたる間の地名」であることからその間の事情が分かる。北陸道（越路）は目的達成後の復路であり、いわば付録であった。それにしても、芭蕉がもう少し越後に関心を持っていてくれれば、日本の文学にさらに多くの名作が加わっただろうに、といささか残念だ。

ちなみに越の国成立は大化の改新後、越後の分割は持統天皇の時代という。

一九九九年（平成十一年）八月十三日

異文化ショック

阿刀田高氏の著書「恐怖コレクション」に収められているエッセー「めがね橋」には、終戦をはさむ数年間を長岡のはずれで過ごされた氏の体験が描かれている。

柿川と福島江という川が立体交差する世にも不思議なめがね橋一帯は、少年時代の私のシマであった。交差した二本の流れは二百メートルほど川下の関門でもう一度ドッキングして北と西に分かれていく。二つの川にはさまれた幅五十メートルほどの中州には、恰好(かつこう)の原っぱとかなりの大きさの池沼があった。そこはワルガキどものナワバリの遊び場で、晴れた日にはきまって仲間が顔をそろえた。

夏休みはもっと忙しかった。日の出前、前夜柿川に仕掛けたナマズ捕りを引き揚げにいく。川が交差する橋には羽化したばかりの「アサチヨウ」(カゲロウ)が信じがたいほどの群れになって飛び交い、目口もあけられない“これを餌(えさ)に福島江でハヤを釣る。日が高くなれば泳ぎ、飽きれば池沼で珍種の「チョウトンボ」を追う。夜が来ると、めがね橋の川下側の二メートルほどのコンクリートを登ってくるモクズガニを網ですくう。自然のことならなんでもござれの自然児をもって任じていたものだった。

後年、勤務の関係で箱根を越えて生活するようになって、まず驚いたのは、暖温帯地域の植生が雪国の新潟とはまったく違うことだった。クスノキ、カシ、モチノキ…すべてが珍しく、新鮮だった。

名古屋での最初の夏のことである。明け方、すさまじい音響にたたき起こされた。一瞬、なんの音かまったく分からなかった。それは「シャーシャー」と声高に鳴き立てるクマゼミの大合唱であった。生まれて初めて聞く鳴き声に包まれて、私はしばらく呆然（ぼうぜん）としていた。

この体験は、その後、動植物の分布や生態に興味を持つ契機になったが、北国の自然しか知らなかった当時の私には、あの朝の驚きは、まさにカルチャーショックそのものであった。ちなみにヒメハルゼミの北限は能生町で天然記念物指定。

一九九九年（平成十一年）八月二十日

味覚の源

八月は日本人にとって終生忘れがたい月である。終戦直前の昭和二十年八月一日に米軍の空襲で焦土と化した長岡の人たちにはなおさらだ。深刻な空腹の記憶がその思いをいっそう深めているようだ。まさに「命（めい）は食にあり」「飢えては食を択（えら）ばず」を痛感させられた時代だった。

その後の食の変遷を辿（たど）ると、昭和二十年代は量と生産がなにより優先した「腹」の時代、三十年代は味覚と技術が求められた「口」の時代、四十年代は視覚と開発の「目」の時代、そして五十年代以降は「頭」の時代であるという。

食物を頭で食べる、すなわち、食を健康や文化の視点でとらえた研究競争が国際的規模で激化して

きた。現在の食生活のテーマは、これらを総括して「美味」の追求に収斂（しゅうれん）されるようだ。

「おいしさ」の要素として、従来、五味―甘味、酸味、鹹（しお）から味、苦味、辛味―の調和ということがいわれていたが、現代ではそれに「旨味（うまみ）」が加えられる。「うまみ」は明治四十二（一九〇八）年、池田菊苗博士が昆布の旨味成分がグルタミン酸ナトリウムであることを発見して以来定着した言葉で、いまでは英語もUMAMIで通用する。

では「おいしさ」は五味と旨味だけで決定されるのだろうか。おいしいと感じる味が人によつてはさまざまなのはなぜだろうか。

話は変わるが、あのかわいらしいコアラはユーカリの葉、しかも限られた種類の葉以外は食べない。その独特な食性は、離乳期に母親の「半ば消化したユーカリからなる特殊な軟便」を食べることで決まる。

人間の味覚決定もこれに準じる。幼少年期に味覚の臨界期があつて、好き嫌いが決まるもののである。従つて、生活環境の違いによつて味覚にはかなりの差異が生じてくる。

つまり、食物のおいしさの半分は子どものころの「懐かしい味」であり、自分を産み育（はぐく）んだ「母なる故郷の味」なのである。

一九九九年（平成十一年）八月二十七日

ビハクとガングロ

最近、私は美人の定義が分からなくなった。「顔黒(ガングロ)」と「茶髪」はその最たるものだ。さらに日本一の美人は小渕首相、「三十六面美人」の異名をとっているに至って混乱も極に。しかしこの件については、辞書で、「美人」には「敬慕する君主・聖賢」の意味もあるのを知り、無理に自分を納得させることができた。

美人といえば中国の三大美人だ。越(えつ)の西施(せいし)、四面楚歌(そか)の虞(ぐ)美人、そして安祿山の乱の楊貴妃。西施はフグの異称「西施乳」で有名だ。美味なものには毒があるということ。私説では、西施の美しい乳房がフグの腹のように白くふくよかだったのも由来とされている。精神と肉体の両面から物事を見るべきもの。楊貴妃については、白楽天の長恨歌に「温泉の水は滑かにして凝脂に洗(そそ)ぐ」、すなわち白くつやのある肌の持ち主と詠まれている。三美人の二人は歴史的に色白が証されているわけで、傾城(けいせい)は色白ということ。

日本では「色の白いは七難隠す」「髪はからすのぬれ羽色、髪の長い七難隠す」といわれてきている。昨今「白過ぎる顔」で流行をつくっている先生は「白い肌こそ女性一生のテーマ」と唱え、アジア諸国も巻き込んだの美白ブームを起こしている。

越(こし)の国は古来美女の地として有名で、大国主命は噂(うわさ)を聞き、出雲の国から来て奴奈川姫を娶(めと)ったと伝える。姫は越後一宮の居多神社(上越市)に配神として祭られている。

越後女性は色白で美人が定説になっている。美白の理由については北方系人種との混血説など諸説がある。豪雪地育ちの私は、日本海型気候による降雪・高湿度・日照時間が少ないため低メラニン色素であるためだと肌で感じる。この「雪肌(せつき)」といわれる肌の美しさは雪国特有のものだ。加うるに労を厭(いと)わぬ働き者で、人情味あふれる「人柄」。この心身の美が「女房にするなら越後の女性」と評価されているゆえんであろう。

一九九九年(平成十一年)九月三日

方向オンチ

名古屋で六年間暮らした。単身赴任であった。夜の繁華街に足しげく通い、帰宅が深夜を過ぎるのも珍しくなかった。地下の店から地上に出る。まず周囲を眺め、方向を定めて帰途につくのだが、しばらく歩いてから方向違いに気づくという失敗を何度か繰り返した。

東国育ちの私は、地図上の観念的な知識から、東海道は東西に通っているものとなんとなく信じこんでいたのが原因だった。正しくは三河安城から名古屋經由岐阜までは南北に真っすぐなのだ。慣れるにつれて、さすがに普段はそんな間違いはしなくなったが、酔うとたちまち昔の思い込みに逆戻りしてしまう。

かつての新潟市も同様だった。信越本線からつづく羽越本線は南北に走っており、新潟はその線上

にあるとつい思ってしまう。実際は、新津から新潟まではこの本線とほぼ直角に西に向かっている。上越新幹線ができてからは、このような錯覚もなくなった。

終戦後、はじめて越後線に乗ったときのこと。新潟から柏崎方向へしばらく行ったあたりで、乗客が次々に窓から身を乗り出した。「日本でここだけ地平線が見える」という。私もあわてて外を眺めた。一面の青田のかたに、球形の地平線が見えた。「なぜか忘れぬ人故に」とだれかが口ずさむと、たちまち何人かが小さくそれに和した。「遠き前途(ゆくて)にほのぼのと緑うれしや地平線」。古い流行歌を聞きながら、ふと脈絡もなく「あっちが長岡だな」と考えたことを記憶している。

鳥類には「渡り」、魚類には「回遊」で知られる方向判定能力がある。なかでも伝書バトの帰巢性は驚異的だ。太陽の動きと体内時計から緯度のズレを測り、経度のズレは時差でよむのだという。

人間の五官は九歳までに発達し終わる。方向感覚もこの時期までにつくられるのだろう。私の帰巢性は幼少時に越後平野の一角で身についたものであるから、成人後に住んだ土地では何年たっても方向オンチはなおらないだろう。

一九九九年(平成十一年)九月十日

衣食足りて

人には、食体験への反応に二種類あるようだ。一つは「喉(のど)元過ぎれば熱さを忘れる」型であり、もう一つは「食べ物の恨みは怖い」型である。私は恨み型で、半世紀以上前に味わった餓鬼道体験

は、その後の私の人生を決定づけているように思う。

昭和一けた後半生まれは、仏教という死後の世界「六道」——天上・人間・修羅・地獄・餓鬼・畜生——を生きながら垣間見た特殊な世代である。昭和十二年の日中戦争にはじまり、太平洋戦争、敗戦と、幼少期は戦争一色の修羅の時代であった。二十年八月、アメリカ軍の長岡大空襲で生活は一変、焦土と化した町は、連日グラマン機の機銃掃射にさらされる地獄だった。そして、敗戦をはさんでの食糧難は、成長期の私たちにとって、まさに餓鬼道そのものといえた。

食は人間生活の基本であり、中国の古典にも名言が数多く残されている。いわく「人生は有道に帰す。衣食は固（もと）より其（そ）の端なり」、いわく「飢えたる者は、食を甘しとし、渴したる者は、飲を甘しとす」。前者は、人生の最終目的は道を守ることにあるが、最初は衣食を得ることから始まるという意味だし、後者は、飢渴が人の味覚を誤らせ、貧しさが人の本性を害することを教えている。いずれも「衣食足りて礼節を知る」ということだ。

この五十年、日本人の衣食、とくに食生活の変化ははなはだしい。厚生省が「成人病」を改称した行政用語「生活習慣病」もすっかり定着した。治療から予防に転換し、欧米化食チェックや飲酒量減などによる肥満防止も重点対策の一つらしい。人生の「端」である衣食はすでに必要以上に足りていることの証（あかし）なのだが、ひるがえって礼節は、と考えるとき、いささか暗然たる思いにとらわれるのは私だけではないだろう。かくいう私も次の名言には耳が痛い。いわく「言語を慎みて以（もつ）て其の徳を養い、飲食を節して以て其の体（たい）を養う」。私もしよせんは喉元過ぎれば型の人間なのであるうか。

一九九九年（平成十一年）九月十七日

故郷からの電話

その朝、一番の電話は故郷からだった。勤務先での私の昇進が報じられた日のことである。

“坊”つきで呼びかけられ、小学校の先輩と分かった。「よかったな、おめでとう」、率直な口調にこめられた喜びに、思わず臉(まぶた)が熱くなった。

私の小学校は長岡市のはずれで、雁木(がんぎ)続きではなかった。雪の日、下級生たちは上級生の標(かんじき)の跡を踏みながら、田中の道を一団となって登校する。吹雪の日は、学校の入り口で待っている六年生の看護当番が全身の雪を一人ひとり箒(ほうき)で払い、廊下に上げてくれる。雪国の普通の情景だった。上級生は自他ともに兄貴、姉貴をもって任じ、下級生はみな弟分、妹分だった。こうして順繰りに育ち、卒業していく。電話の先輩も、私を自分で育てた弟であると思つて疑わない。

新潟県民気質を、PHP文庫の「県民性」は次のように紹介している。「新潟県人は、雪国の厳しさに耐え、日本一の米作地帯を築き上げた辛抱強い努力家。女性は夫・家思いの従順な働き者、労多くも堅実な仕事を。男性は保守的で郷土意識は驚くほど強い。そして涙もろい人が多いともいわれている」と。

都会での職業は、朝早く労を厭(いと)わないう米屋。牛乳屋、女性では看護婦が多い。また離婚率最低、職安紹介就職率全国二位…なども県民性と無関係ではないだろう。

ただ、引用文中の「涙もろい人が多い」はいささか唐突で、筆者自身もなんとなく納得していない節

がうかがえる。それは、たぶん「情」の視点が欠けているからだろう。県の長期総合計画構想素案の県民アンケートによると「新潟ってどんなところ」に対して、その魅力は「人情味あふれる県民性」だという。人間の情緒能は十五歳までに決まるといわれるが、雪国の環境のなかで培われた人間同士の絆（きずな）に触れたとき、思わず涙がにじんでくる。それが新潟県民特有の人情味であり心なのだ。恥ずかしいほど涙もろい点、私も新潟県民の資格十分だ。

一九九九年（平成十一年）九月二十四日

トキの遺言

トキが、佐渡が、いま日本中から注目されている。日中を結ぶ明るい話題として、同時に絶滅の日が迫る日本産トキへの思いを交錯させてのことだ。

トキは、学名ニツポニア・ニツボンが示すとおり、日本を代表する動物で、新潟県は昭和四十年に県鳥に指定し県のシンボルの一つとしてきた。八月六日から中国産親子を中心に公開され、佐渡は一段とにぎにぎしさを増している。

私をはじめ佐渡を訪れたのは昭和十九年、サイパン陥落のころだ。おけさ丸では米軍の魚雷が心配だったが、たまたま本間雅晴中将が同乗されており、心強かった。非常時とはいえ、佐渡の旅はのどかだった。

思えば、私が生まれたころ、百羽前後いたという佐渡のトキは、そのころすでに三、四十羽にまで減っていたようだ。動物の種が生息するには、千の個体と適した環境が必要とか、佐渡の自然も、文明の波にさらされていたのだ。

能登産最後のトキが、保護増殖の夢を託して佐渡に送られてきたのが四十五年、この時点で「明白はわが身」と、徹底した保護策がとられていればと残念だ。環境庁が五羽を保護したのは五十六年、その増殖計画は完全に失敗した。

同年、中国では生息が確認された七羽を徹底的に保護し、現在百七十羽にまで増殖に成功。そのうちの二羽が日本に贈られ、五月に二世誕生となった。この間、国中がその動向に一喜一憂、その命名は国民的行事の観を呈した。

しかしそれが日本産絶滅の免罪符にはならない。「キン」の臨終に立ち合うとき、新潟県民は環境問題の意義をいや応なく実感させられるだろう。広島・長崎が「平和アピールの拠点の責務を負ったように、二十一世紀の人類史的テーマ「地球再生」の責務を。日本産トキ、種絶滅の悲劇を二度と繰り返さないための「環境再生・動物保護」という遺言の執行発信基地となり、その訴えを生かす努力を続けていくことこそが、トキを県鳥とした県民に残された義務なのではないか。

一九九九年（平成十一年）十月一日

食糧問題と聖書

日本農業は食糧自給率低下と輸入拡大との間で揺れている。自給率は先進国中最低である上、さらに先進諸国がこれを高めているのに反し、日本だけは低下させている。なぜ差が出るのだろうか。私は諸国と日本との文化の違いにあると思う。

例えば食糧について、彼らは幼時から、創世記の「ヨセフの物語」を繰り返し見聞する。

「エジプトに売られたヘブライ人ヨセフは、夢判断の予知能力で大飢饉(ききん)を予言し、エジプト王国と諸国を飢えから救う。ただ人々の生命である食糧は高価で、全財貨と引き換えであった」と。そしてこの砂漠の民の伝承物語を通して「食糧なしで人は生きられない。食糧はあらゆる財貨に勝る。人々はその前に奴隷にさえなる。食物は自然現象に左右される。為政者は食糧確保に百年の大計をたてるべきだ。しかも歴史は繰り返す」といったコンセンサスが欧米先進国にはあり、こと食糧問題については全国民が国粋主義者なのだ。

日本人の主食である稲作は日本文化そのものであり、米飯は神聖なものとされてきた。日本型稲の栽培は、一万年以上前の長江流域にはじまり、日本には六千年前に伝来した痕跡があるという。

核兵器をもたない日本にとっては、国際的発言力の最低条件が食糧自給力だ。食糧は最強の「戦略物資」。二十一世紀の世界の最大課題は「地球再生」、ともに農業と不可分だ。従って自給率向上は国益であると同時に最高の国際貢献でもあり得る。政府でも「新農基法」に続いて 景観などの価値を再定義

するという。ともに農業の公共性を重視、これを文化と評価し、環境産業を育て「地球と食糧問題」に対応しようというもの。

この流れに対し、新潟県は、銘柄良質米生産や水稲作付面積に実績をもつ上、県民は、勤労意欲・景観優先・精神的豊かさ重視などの意識が高い。時代が求めているものを具体化できる最短距離にいる。トキの遺言「自然再生」と相まって、食糧自給率向上の発信基地にと、さらなる前進を期待している。

一九九九年（平成十一年）十月八日

辞典を眺める

私は、昭和七年、長岡市東端の四郎丸で生まれた。当時は農家も多く「ざいご」だった。幼稚園は隣学区だった。園の砂場を囲む塀には木戸があり、避難口だったようだ。開けると互尊文庫の庭に通じていた。小学校のころ、私たちはこの図書館に行った。他学区に子どもだけで遠征するのは度胸のいる冒険だったが、私には通い慣れた道。そんなわけでひんばんに「本を見」に通った。

いま、そのころの「本を眺め見る」後遺症に悩まされている。やたら本棚に並べて楽しむ癖だ。この蔵書の中の圧巻は、越後の先哲諸橋轍次博士の「大漢和辞典」十三巻。私のような「めしこき」はページを読むのさえ「なんぎ」なのに、先生はこの世界最大の辞書を二回も作られたという。怠け心が出たとき、本棚に腰を据えている辞典の背文字を見るといかなる名画よりも感動を覚える。これを作

らせたエネルギーは豪雪地帯育ちの者ならではのと感じ、「根(こん)」の大切さを知る。そして思う。「越後にはすごい人がいたもんだ。おれもがんばらんけば」と。

ところで博士と同姓のよしみで、先生の生い立ち、なかんずく「諸橋」姓には関心がある。博士のご先祖は上杉景勝の功臣、与板城主直江兼続(かねつぐ)。天下に「智」勇の将」とうたわれた人。景勝の会津移封後、諸橋を称されたという。改姓の事由については何も記されていない。

日本には二十九万余りの名字があり、八割が地名に由来するそうだ。「諸橋」の地名は一カ所。昭和三十年、石川県鳳至(ふげし)郡穴水町に合併した諸橋村。初見は承久三(一二三二)年の「諸橋保(ほ)」(国司の統治下にある土地で「国郡郷保」)。諸橋古墳の縁山(えんやま)の杜(もり)モロから竜灯崎の端(ハシ)までから生じた地名がルーツのようだ。

「智」はともかく、幼少年期からの「姓」への疑問を追って能登の旧諸橋村までいく探究心は「大漢和」を眺め見ることから高じた「根氣」かも…と思っている。

一九九九年(平成十一年)十月十五日

20世紀とは

二十世紀梨(なし)の味をあらためて認識したのは五十歳の時。前夜食べた梨をまた食べたいと目覚めた。これにはわれながら驚いた。

單身暮らしになって、気がついたら五十歳。孔子の「知命」をもち出すまでもなく、半世紀は大きな節目だ。公私ともにすべてが自分の責任。酒の上のことでは通らない。ただ幸いなことに飲食とも無理がきかなくなる。食物の味が分かる年齢ということのようだ。水分が不足がちの幼年期、二十世紀梨は「甘露」だった。

そもそも新潟県は古来越後の牛面(ごめん)梨で知られ、その伝統を踏まえ、近代の栽培技術をリードした梨の名門。それまでの私は、おいしい果物とは、マザーフルーツといわれる東洋のモモ、西洋のリングオと思いこんでいた節がある。

二十世紀梨は千葉県で発見された偶発実生で、「二十世紀」の名で紹介されたのは、明治三十七(一九〇四)年といわれる。じらい、菊水・幸水をはじめ、最近では「ゴールド二十世紀」などの改良優良品種が相次いで作られた。しかし総合点で二十世紀はその品質、風格いまだに日本原産果物の王者だ。ただこの梨の欠点は黒斑(こくはん)病に弱いこと。

ところで十六世紀以来、科学は、物質文明優先のパラダイム(世界観)として発展をきわめた。その結果、現代のあらゆる社会的危機を招いたとの見方がある。一方、二十世紀に入って勃興(ぼっこう)した

ってわが新潟県は。

度津神社はその名、度(わた)がすべてを語っている。「わた」は朝鮮語と同源といわれ、「海」の意、従って海をつかさどる神の社ということ。祭神は国つ神の代表、素戔鳴尊(すさのおのみこと)の子、五十猛命(いたけるのみこと)。朝鮮と往来した航海の神だ。日本海を内海とした大陸・朝鮮半島との関係が、そして日本民族形成過程の一端が見えてくる。

弥彦神社は、神廟(しんびよう)が神体山である弥彦山にあることから分かるが、古代信仰の姿を色濃く残している。大和朝廷建国以前の日本民族は、自然を崇拝していた。社名が弥彦、祭神が天つ神の天香山命と異質なのは大和朝廷が旧勢力を征服し、融和していったことを示すものであろう。

居多神社はもと気多(けた)神社と呼ばれた。元宮は能登の気多大社。日本が大化の改新後、中央集権国家をめざして「越の国」を造り、さらに律令国家へ移行する折、国を前・中・後の三分したため分国に気多神社が分祀(ぶんし)されたようだ。

越佐の三つの「一の宮」を知ること、古代史がより身近なものとなった。地域を、地域からみつめることが、歴史を学ぶ上でいかに重要かをあらためて思い知らされた。

一九九九年(平成十一年)十月二十九日

謙信公は多忙

東京の百貨店では、各県の「大物産展」がさかんだ。不況打開の目玉なのだ。私の場合「知らない土地への小旅行」より、生活した土地の催しに足が向く。新潟県物産展に行くと、多くの味自慢が並んでいる。私が知る越後の手土産は「笹飴(あめ)。鯛(たい)の子の塩辛・大手まんじゅう」などに限られていたが。

そこで大活躍をしているのは、わが越後の戦国武将上杉謙信公だ。

商品名や説明文に、公の名前がまくらことばのように使われている。銘菓・銘酒、陣中食に特に多いようだ。「勇将謙信を育てた栃尾」には「不識庵最中」などがある。公が幼少期から約十二年を過ごされた地の特権。酒はズバリ「越乃景虎」が。糸魚川には「謙信」も。公は大酒豪、むべなるかなだ。兵糧の筆頭は「越後味噌(みそ)」。公が濃い味噌汁を好まれたとの伝承からも理解できる。次いで「笹団子・三角ちまき」。殺菌力があるというチマキザサ類が日本海側の多雪地帯特産であることを知れば納得。

興味深いのは「ナンバン(トウガラシ)」を原料にした「越後あらい・上杉謙信陣中糧秣(りょうまつ)かんずり」ははじめ一連の「赤べい(栃尾市)、ぴりっ子(上越市)」だ。

食の歴史では、植物栽培・農耕が始まったのは約一万年前という。西洋のムギ文化の場合、オリエントでの灌漑(かんがい)農業がやがてギリシャ、ローマの乾地農業に発展、さらにヨーロッパへ。ここ

で農耕と家畜が結合。畜肉加工は食生活の上で重要な地位を占め、スパイスが必需品となった。ところがイスラム教徒に流通を独占され、法外の価格に。この金銀なみのスパイスを求めて大航海時代が始まり、新大陸発見、ナンバンの伝播(でんぱ)となった。

その日本伝来については諸説がある。伝承はばかにできない。典型例がシュリーマンのトロイ遺跡発掘。謙信陣中糧秣伝承に歴史的事実を照らし、おそくもポルトガル船の種子島漂着をもってナンバンの日本伝来というのが私の説である。

一九九九年(平成十一年)十一月五日

サケのたわごと

両国の国技館隣にユニークな巨大構造物がある。「江戸東京博物館」だ。四本柱で地上三十メートル、高床式のイメージとか。常設の江戸・武士の暮らし展示は一見に値する。

一つは慶応元年の長岡藩江戸経費比率。七万石藩の金三万四千五百五十両は、年間支出総額の四分の三以上、諸藩中最高だ。もう一つ注目すべきは、文化七(一八一〇)年の幕府への献上物。律義に十二月全月は長岡藩のみ。ちなみに一月から列記すると「塩・鮭披(ひらき)・塩鴨・鯛細腸(わた)・干鯛・漬蕨・刺鯖・初鮭と二番鮭・鮭麴漬・子籠(ごもり)鮭・鮭筋子・鮭塩引と立駒(隔年)」。六力月は調理の異なるサケだ。いかにサケが特産物だったかが分かる。江戸時代までは、生ものの保存・貯蔵方

法は塩干、流通は人馬だった。北海道のサケ業は明治になってからのこと。江戸の人たちの食卓は、新鮮な江戸前の魚介類が中心で、サケは珍味だった。また長岡藩が献上品に意を用いたのは、藩主が九十一代までの三代にわたって老中職を務めたことと無関係ではないだろう。

サケはその名がアイヌ語に由来するといわれることでも分かるが、北日本の特産で、生まれた母川に帰る習性をもつ。「回帰性」だ。これについては従来「帰巢本能説」はじめ諸説があったが、近年「川によって異なるアミノ酸をかきわけて母川を識別する」ことが明らかになり、「嗅覚(きゅうかく)説」に落着いた。

古来サケは主産地では主食の地位を占め、アイヌ民族は「神魚」と尊称している。

村上市が昔から三面川のサケを大切にし、文化にまでしていることは有名だ。呼び名の「イヨ」も「ボヤ」もサカナを指す古語と方言。サケはマザーフィッシュなのだ。そのメニューは「サケの酒びたし」をはじめ百種以上になるとのこと。

余談だが、謙信公は酒のさかなにはサケの「楚割(すわやり)」と塩ザケを好んだとか。「越乃サケ(酒)には、越のサケ(鮭)料理」。新潟の味のアピールには二つの「サケ」を。飲んべいのたわごとか。

一九九九年(平成十一年)十一月十二日

FMの誕生

「FM」という言語は、昭和四十年ごろ、正体不明だった。新製品打ち合わせの席で、この語が出た。

現在新潟を含む全国三十六局ネットワークに、また「見えるラジオ」にまで発展のFMも、当時、民間はFM東海しかなかった。問い合わせると「FMは電波の型式記号で、品位の高い音声を送れる」のだという。高品質イメージと理解。

「名は体を表す」と早速採用することとした。数カ月後、新商品の育児用粉ミルク「FM」が誕生した。Fは母乳組成に近づけた「必須(ひつす)脂肪酸」、Mは添加物なしに母乳濃度と同等になる「単一調乳」の表現として。

企業生活四十余年中で、最も緊張したのが育児用ミルクを担当したときだ。赤ちゃんの生命を預かり、育ての親となることは大変なこと。安全性最優先、一瞬たりとも気が抜けない責務だった。

イザヤ・ベンダサンが「日本人は、安全と水は無料で手に入ると思いこんでいる」と指摘したのもそのころのことだ。

水についてはすでに飲料水は別コストの認識になりつつある。

「安全」については、バブル崩壊後、生活の根底を揺るがすような事件、事故が相次いで起きている。日本は安全を、周囲の海に任せてきた幸せな国家だった。世界や社会は安全のために目には見えない莫大(ばくだい)なエネルギーを費やして、今日に及んでいる。

食品製造で最も意を用い、経費をかけているのは安全の確保。ただ安全は目に見えない。要する労力、費用は無駄骨に終わることこそが最良。「労多くして功見えず」、従って評価もされないのが泣きどころだ。

古来日本民族は、自然に対する、目に見えない働きを力ミとして畏敬(いけい)してきた。現代合理主義は費用対効果を追い求めるあまり、大切なものを見失った。安全は労を厭(いと)わない心の働きと目に見えない費用支出から生まれる。

「労を厭わない働きの者」は新潟県人の特性として、美德として評価されてきた。この美德を「死語」にしたくないものである。

一九九九年(平成十一年)十一月十九日

お歳暮も加齢

歳暮の時節になると、床の間には鴨(かも)や鮭(さけ)が並んだ。夜なべに父がこれらを適当に捌(さ)ば(いていく。わが家の年末風景であり、わきからそれを見るのが子どものころの楽しみであった。見よう見まねで、小学校の上級生になったころは私も鳥や魚を捌けるようになった。切り出し一本で鳥の腸まで食べられるように始末するとか、出刃で鮭の水頭を刻むまで。

捌きながら贈答品にまつわる父の話も参考になった。「鳥は食うとも、どり」(肺臓食うな)、魚料理は「海魚腹から、川魚背から」。中元は仏前のお供物として野菜や果物などを七月十五日までに。歳暮は祝い事に準じ、生ぐさもの中心で、十二月二十五日ごろまでに。昔の「のし鮑(あわび)」の代わりだから「のし」はつけない、などのしきたりも教わった。

ところで中元は古代中国の星祭り行事と日本のお盆が結びついたもの。従って個人的な敬い心を供物で表すもの。歳暮は江戸時代の商人慣習の顧客への感謝の印が広がり、社会生活全般に及んだという。

自分が贈り物をする立場になって、この恒例行事に結構頭を悩ませられた。

若いころは、単純に相手の家族構成などを勘案しつつ、中元、歳暮は新潟の米菓、清酒と決めてすませていたのだが。

加齢とともに人生を振り返ると、節目ごとにお世話になった方が何人かおられることにあらためて

気がつく。既に先方は名を遂げた初老期の夫婦、何を差し上げても持て余されるはずだ。何か格好なもの。思い当たったのは昔から生家で重宝していた「村上木彫堆朱」。

日本で漆が使われ始めたのは約六千年前の縄文前期。漆芸は日本固有の文化だ。英語で漆器はジャパン。外国人来客に漆器を使ってもてなせば交流が深まる。

村上漆器は使い込むほど味が増し、六百年の伝統をもつ無形文化財でもある。何よりも茶、酒器はじめ大小物の種類が豊富で、収集癖も刺激する。先輩方には中元、歳暮とも、昨今はこれに決めている。

一九九九年(平成十一年)十一月二十六日

“アラ”さがし

鍋(なべ)・汁物の季節だ。記憶に残る冬の味覚は、鱒(はたはた)、鮭(さけ)の鍋、鰯(たら)や鯨の脂身の味噌(みそ)汁、鮭の粕(かす)汁。中でもスケトウダラは煮物にもよく冬の魚の大將格だ。露天市の雪の上に二匹一掛けで売られており経済的でもあったから。

友人から「アラさがし」の小冊子が届いた。「見聞するに鍋物はアラ(鱈)という魚が一番とか。ここ数年、こだわりつつ関西から九州までらしきものをごちそうになってきたが、どうも違うようだ。本物は日本海でとれ、本場は新潟らしい。出身者なら分かるだろう」との内容。実は私もアラについては全

く不知。調べると似て非なるものがあることが分かった。クエの老成魚のモロコ、マハタの老成魚のカ
ンナギ、スズキの大成魚などスズキ科の大物だ。さらに「新潟でとれたアラが、長野へ移入されて(や
や時がたつと)美味となるので、長野のアラ料理が有名」。また、昨今は新潟でもお目にかかれない。寺
泊沖から佐渡の深場でとれるが、ただちに東京の越後料亭へ行くのだという。

ところで沖縄に行くと県魚タカサゴ(グルクン)がメニューに出てくる。全国で県魚を決めているの
はほかに愛知など八県ほど。

もし新潟県で県魚を選ぶとすれば…。

例えばアラは学名にニッポンがつく日本を代表する魚だが、北海道からフィリピンまで分布してい
る。新潟が本場でも県独占は問題。スケトウダラは個人的思いは深いが、北太平洋から南限は山口県ま
で分布。江戸時代なら鮭も主張できるが、現在は北海道の専権になりつつある。私は「錦鯉」こそ新潟
県の「県魚」にふさわしいと思っている。

鯉は温帯性淡水魚で、出現地は古代中央アジアといわれ、古い地層から化石が出ている。大陸と陸つ
づきだった日本にも古代からいたようだ。錦鯉はマゴイの色彩が突然変異したのを、古志・魚沼両郡
の雪深い山村で飼育改良し、日本特産品種にまで磨きあげたもの。世界に誇るべき魚の宝石であり、新
潟県の宝物だ。

一九九九年(平成十一年)十二月三日

県の木 “雪椿”

私が新潟県を離れたのは昭和二十五年の春。その後は世事にうとい生活に明け暮れた。従って、四十年、国の後援で万博記念に「県木」が全国で選定され、四十一年、新潟県の木に “ユキツバキ” が指定されたことを知らなかった。

昭和五十年代、自然を通して日本文化の理解を、との目的で設立された団体と私の勤務先はかかわりができた。その運動の一つとして樹木のハンドブック作りに協力、これに「県木一覧表」をつけた。以来県木などに関心をもった。

地域の自然や文化を語る資格はその土地に年間を通して生活経験があることと、雪国育ちの私は決めている。転勤生活が多かった私の場合、新潟県はもちろん、宮城、東京、広島、愛知については有資格者だ。これら各県の木を列記すると、「宮城・ケヤキ、東京・イチヨウ、広島・モミジ（イロハカエデ）、愛知・ハナノキ」。この中で目新しいのはハナノキであろう。

ハナノキは世界的珍木で、日本にある自然木はほとんどが国の天然記念物に指定されている。学名に *Makino* がつくこのカエデ科の落葉高木は、事典にも「本州中部木曾川流域の高湿地にまれに生える」と記されている。県木に決めた愛知県にも自然樹は九本しかない。樹高二十五メートル。早春、小さな深紅色の花が枝先まで咲き、樹下からながめると、空は一面花がすみとなる。新葉は紅褐色からやがて深緑に、秋には紅（黄）葉、冬には紅褐色の冬芽に。愛知県のほかに長野、滋賀、岐阜の各県にも

自生地がある。その木に魅せられた私はそのほとんどの場所を訪れた。

新潟県のユキツバキについては小林幸子の歌や「ミス雪椿」で知るだけだ。ユキツバキは、日本の代表的植物で、学名にジャポニカがつくヤブツバキの近縁種。昭和二十二年、新潟で発見され、本田正次博士により、二十五年に命名された。日本海側の豪雪山地に分布。しなやかにしてたくましく、県民性を象徴しているという。近々にぜひ高山にある本物を見る機会を持ちたいと思っている。

一九九九年（平成十一年）十二月十日

ほろにがい話

日本人がにわかクリスマスちゃんに変身するのが、クリスマスとバレンタインデーだ。この行事に欠かさないのがチョココーティングのケーキとバレンタインの贈り物のチョコレート。

私が幼稚園に入ったのは昭和十二年、五歳。七月に日中戦争がはじまった。

幼稚園は市の中央部にあり、子どもの足で三十分はかかった。この道をガールフレンド二人と通った。幼稚園の近くに菓子屋があり、親の知人で、おばさんとは顔見知りだった。帰り道、「ここはただ（代金不要）」と称し、三人で板チョコを食べながら帰った。はじめ、おばさんは当然、家で承知のことと思っていたようだ。大人たちの間でどんな話があったのか、知らぬが仏の子どもたちはこうして一年間を過ごした。掛け売り、掛け買いを知らなかったのだ。長じて笑い話に親から聞かされた。菓子

屋のおばさんは両親に会うたびに「チョコのオッサマはどうしてます」と聞いておられたとのこと。
翌十三年、国家総動員法が公布され、日本は戦争の泥沼に突入、世の中はチョコどころではなくなつた。

ところで、チョコレートは、今では板チョコで代表されるが、もとは飲料。メキシコ先住民がカカウアトル(神の授け物||カカオの木)の果実の豆からチョコレートル(苦い水)を作り飲んでいたもの。これをスペインの総督コルテスが味わったのがはじまり。スペイン人が豆と同量の砂糖を混ぜて飲み物チョコレートを作り、一八七六年、スイスで板チョコが完成した。

現在のチョコレートはカカオ豆を炒(い)ってすりつぶし、どろどろの液体にしたものに、砂糖や牛乳(粉乳)を混ぜて練り上げたスイートミルクチョコが主流だ。

私は縁あってチョコ製造の関連会社に入社、数年間チョコ原料の粉乳を担当した。この間、のどを刺激する「えがらさ」を抑えた粉乳を開発し、おいしいチョコ作りに貢献できたと思っている。

人間の情緒能(歓喜、悲哀など)は五歳で八〇%発達するという。私の天職はあの五歳の時に決まったのだろうか。

一九九九年(平成十一年)十二月十七日

禁断の木の実

初雪のころ。待ちに待ったコタツ開き。仕切り畳をあげてヤグラを据え、炭かごや十能などを揃(そろ)える。ふとん類をかけ、コタツ板を置き準備OK。一家だんらんの場の出来上がりだ。わが家のコタツは一辺に二人はいれる八人用の大型だった。コタツにはもう一つ楽しみが。暖かいコタツに入って冷たい熟し柿を食べること。冬が来ると空き部屋の棚に弾丸形のミノガキが並び、順々に熟す。ミカンと違ってこれは一日一個ときめられていた。戦災で焼けるまでの毎冬の光景だった。

柿は雪国の重要な保存食だったのだろう。「越後の国雪の伝説」(鈴木直著)に、雪の谷底に落ちた旅人が持ち荷のくし柿で雪解けまで命をつないだ話が出てくる。

長岡周辺は戊辰戦争で焦土と化し、食うに事欠いていたこともあり、庭になりものの木を植える習慣がある。

なりものはワルガキどもの格好の標的だった。柿、クリを筆頭に、スモモ、アンズ、イチジク、ナツメ、ザクロ、梅と。人類には採取の原始時代があり、その中で質量の両面で果実は最高の食料だった。特に欠点の季節性と腐りやすさを乾燥させることで克服してから、文明は飛躍的に進歩したことは想像に難くない。

旧約聖書に、出エジプト後シナイの荒野で過ごしたモーゼ一団のカナン地方侵入が記されている。斥候はそこが乳と蜜(ナツメヤシ説も)流れる豊かな地で、ブドウ、イチジク、ザクロが実っていると報

告している。果実が食料、飲料としてこの時代でもいかに重要だったかが分かる。ところで、聖書の「禁断(善悪の知識Ⅱ知恵)の木の実」は何かで、二千年間論争が続いている。

現在、リンゴは俗説と否定され、アンス説が有力。私は原産地や伝承から、聖書には不思議にも全く出てこない万能の果実、スモモ(プラム)と思っている。知恵の果実とされるイチジク、ザクロ、アンズ、スモモを失敬してきた私はどの果実から知恵を授かったのだろうか。

一九九九年(平成十一年)十二月二十四日

伝統の大切さ

正月は日本人の伝統的美意識再発見のチャンス。門松、初もうで、お節料理など年中行事のことだ。日本古来のもう一つは人生行事。通過儀礼とも呼ばれ、人の一生の間に行われる食初め、命名、七五三、成人式などだ。

正月は元来祖先をカミとしてまつるための行事だが、その中に人生行事で唯一組み込まれているのが成人式。成人式は社会的行事になっているのだ。

成人式のルーツは縄文時代にある。当時、一人前の資格を得るには厳しい肉体的、精神的試練に打ち勝つことが必須(ひつす)だった。例えば「健康な歯を左右対称に抜く苦痛に耐える」など。これが武家社会では元服の儀式に。元服は事あるときは死を覚悟することであった。そして現在。成人になると、

親権を離れ、選挙権が与えられる。社会的に法治国家の権利と義務が生じる。

昨年、仙台市の成人式で、吉村作治教授(考古学)は、記念講演を騒々しさのあまり、途中で中止した。会場の若者は「旧友に会いに来たので、古くさい話を聞きに来たのではない」。識者は「陳腐で堅苦しい企画はやめ、成人祭で楽しめばいい」と語っていた。教授は「人生は、好きな道を、迷惑をかけず、目標をもって、ゆつくり楽しめ」が主義の国際派の第一人者。また、考古学は歴史学とともに未来学の最たるもの。話を聞かない成人側の主張、識者の論理には疑問が…。

自由で民主主義の世の中は大変だ。自分の生き方、真偽・善悪・美醜すべて自分の判断で決めねばならない。最近の日本は、自由とか個性とかの美名のもとに、無知やわがまままでが片付けられていやしないか。自由や個性以前の家庭でのしつけは？とあらためて見直す時に来ているようだ。二十一世紀は国際化の時代。先進国は、家庭のしつけは厳しい。また自国の文化教育には大変な力を注いでいる。日本が世界に伍(ご)すためにはまず日本の歴史と伝統文化をしっかりと身につけることが、最低条件だと思うのだが。

二〇〇〇年(平成十二年)一月七日

縄文期のメツカ

太平洋戦争も破局に傾いた正月、わが家の恒例の初春用掛け軸が変わった。「よべ（昨夜）よりの寒さに山は真白なり そを眺めつつ兵を送りぬ 相馬御風」に。時局柄、私はこの短歌をすぐに覚えた。父の話では良寛の書、数点をお貸ししたら、これを置いていかれた。先生は良寛の研究家で糸魚川の人とのこと。糸魚川についてはもう一つ、小児の頭ほどの姫川産の皮かぶりのヒスイ原石が飾ってあったこと。これが私の離郷前の糸魚川についての知識のすべてである。

糸魚川、西頸城郡周辺は何かと話題の多いところだ。例えば日本海側東北美人地帯の南限説はご愛きょうとして、ホッコクアカエビ（ナンバンエビ）の南限は糸魚川沖合であるし、シロザケの母川回歸も、能登半島東方のこのあたりが南限のようだ。逆に北限は能生町のヒメハルゼミが有名だ。食文化では東西の濃い口、薄口の境界だとか、地理的には日本列島のヘソに位置するとも。また、越中と越後の国は南北に走る飛驒山脈で二分されている。これが日本海に落ちるところが親不知、子不知の難所。これらの自然や文化の境界線はフォッサ・マグナ（糸魚川静岡構造線）のなせる業なのだろう。さらに、この地方をきわだたせるのが、わが国唯一のヒスイ（硬玉）の産出地であること。

縄文時代の代表的交易品はヒスイ、アスファルト、黒曜石だ。このうち黒曜石以外は越の国の特産だった。中でもヒスイはその色の不思議さと神秘性から畏敬（いけい）され、呪術（じゅじゅつ）的用具や魔除（よ）けとして重要性は特別だった。縄文時代中期初頭（約五千年前）「姫川下流の丘陵地、長者ヶ原

遺跡や青海町の寺地遺跡で大珠や勾玉(まがたま)に加工され、陸路で中部・関東地方に、海路で東北・北海道にまで運ばれた。それはヒスイの持つ心にしみ込むような美が縄文人の心をとらえたから。そしてこの心は弥生、古墳時代へ、あるいは神道へと受け継がれる。日本人の精神文化形成のルーツ、実はこれが新潟県の西南端糸魚川であった。

二〇〇〇年(平成十二年)一月十四日

雪の教え

「正月」は年のはじめの月の意味。ミレニアム(千年紀)の変わり目ともなうとも思いも深い。次なる二十一世紀。病める世界の目は東洋の精神世界に。

科学界は「現代の人類史的危機は物質万能の世界観から発したもので、打開には東洋の宗教的世界観に学ぶべきだ」と指摘。世界の宗教界は「欲望を抑え、簡素な生き方に喜びを見いだす」共通の倫理の布教なしには地球は救えないとの見解で一致してきた。これには雪の故郷十日町を愛した故庭野日敬氏が指導的役割を果たされた。

東洋の宗教といえば、私たちの世代、小学校は「神道」一色であった。中学校では漢文で「儒学や道教」を学んだ。「仏教」は日常生活に入っていたが葬式仏教で、本来の教え「彼岸性」を学ぶことはなかった。ただ私の場合、宗教的理由はないが仏像を二十数体持っている。長岡の父から引き継いだも

ので、中に微笑仏で知られる木食作の不動明王像がある。

木食五行（一七一八―一八一〇年）は九十三年の生涯中、新潟県には二度来ている。佐渡と中越である。木食とは米穀を断ち、木の実を食べて修行することで、自ら求めて中越に来た時は八十六歳。二冬を豪雪の中で過ごし、しかも現在でも二百五十体の作仏が残っているほどの彫刻をした。彼岸をめざしての厳しい実践であったことは想像に難くない。

日本は敗戦時、戦争の放棄とともに東洋的なものもすべて放棄した観がある。

西洋の宗教は人間以外は無視しているのに対し、東洋の宗教は自然と共生の深い倫理観がある。雪国の住人もまた教えられなくても、自然とともにでなければ生きていかなれないことを体験を通して知っている。

「歎異抄」で知られる親鸞も配流の雪の越後で、真宗の安心と他力本願の奥義を深めたであろうし、故郷に帰った良寛も雪に埋もれつ、その仏道心、人間愛、自然でシンプルな人生観を実践したのである。

雪を媒体として自然への畏敬（いけい）心を育ててきた越後人こそ二十一世紀の地球を救える素質が備わっていると思うのだが。

二〇〇〇年（平成十二年）一月二十一日

現代流民考

新潟県には独特の諺(ことわざ)があるようだ。例えば「四月の雪、女の腕まくり」。これは本来は「朝雨女の腕まくり」を雪国的にアレンジしたもので、それほど驚く必要はないということ。昨今では女性が本当に強いことと、セクハラ的使用語として死語の運命だと思うが。ついでにもう一つ。「オジゴンボウ猫の糞(くそ)」。この吐いて捨てるが如(ごと)き語に圧倒される。末っ子は何の役にも立たないということ。末っ子の私には耳の痛い言葉であるが、少子化の時代、しかも子どもはすべて法のもとで平等の今日では死語に…。

死語増加のなかで「三つ子の魂百まで」は今も生きている諺だ。「幼時に培われた性格や性向は年を取っても変わらない。人間の基礎は幼時につくられる」ということ。「孟母三遷の教え」は理にかなっていたということだ。

最近の生物学や心理学によると児童期は人間にとって最も大切な時期であることが指摘されている。児童期とは満三、四歳から十二、三歳ごろまでをいう。

生理学的に「教育、経験がある能力の成長にもっとも効果的な時期がある」のだという。例えば、視・聴・味・嗅(きゆう)・触などの感覚能力は一歳で八十パーセント発達する可能性があるにはじまり、運動能力は三歳で、情緒能は五歳で…のように。もっとも知識能は別とのことであるが。日本では古来「芸事は六歳(数え年)の六月六日から」といわれてきた。現代でも十分通る言葉だ。もっとも私な

どは小学生のころ、大声で軍歌をどなれば「元気よし、唱歌、甲」の時代だったわけで、何ともさびしい話ではある。

要するに人間の生来の能力を生かすも殺すも敏感期の児童期にかかっているもののようなのだ。私の児童期の終わりはちょうど敗戦の年に当たる。このころが能力発達の臨界期だったのだ。雪国を十八歳で脱出したクレオール（現代流民）の私は所詮（しよせん）、釈迦仏の手のひらの上を駆けている孫悟空のように、幼少期を過ごした雪国の故郷の上をさまよっていたことになるのであろうか。

二〇〇〇年（平成十二年）一月二十八日

後序にかえて 住みなれた地の川

郷里越後長岡の自然は信濃川と豪雪。ここでの体験から自然を語るには四季を通じてその地で生活することが最低の条件と思っている。振り返ってまずは学生時代を過ごした杜の都仙台である。仙台の川と言えば星間船一作詞青葉城恋唄「広瀬川流れる岸边思い出は帰らず……」に尽きる。次いでは広島。広島の川は凄い。市内が川であり、橋で、所謂広島の 3B = bridge・bar・branch の語には実感がある。正に水の都で市内デルタでは六本の川とこれに架かる六十八本の橋とで生活が営まれていた。私は暇をみてはこの橋の全てをわが足で渡ってみた。お陰で短期間に地理が分かり、地の人達と情が

通じ甚だ重宝であった。しかしこの都市は自然や文化よりも原爆と平和の声が優先する風であった。それほど原爆が強烈だったということであろう。名古屋には昭和六十年から六年間生活した。

木曾三川は濃尾平野を人々に与えてくれたが、古事記が書かれた時代(八世紀)、桑名・岐阜・熱田を結ぶ内側は伊勢湾につながる湾で、これが陸地になるまでの川との戦いについては輪中や杉本苑子の「孤愁の岸」に、治水の苛酷さの片鱗を窺うことが出来る。三川のスケールとは打って変わるが、名古屋には「ふるさとの川」山崎川がある。古くは川名川と呼ばれていたこの川は、市東北部台地(千種区)にその濫觴(起源)があり、昭和(瑞穂・南区と貫流して名古屋港に注いでいる準用河川で、起点本山交差点から河口までの長さは十三・六キロメートルである。この間稲舟一号橋から東築地橋まで無名も含めて大小六十六本の橋が架かっている。私は住居が日泰寺西門前、勤務先が瑞穂公園可和名橋の先きであったので三本の橋を渡って通った。ところで山崎川の水源は起点よりも更に上部に少くも四ヶ所がある。その一つは東山公園内の上池、その二は平和公園内の新池、その三は猫ヶ洞池、最後は城山と気象台の谷間 愛知学院周辺の溝川である。そしてこれらの水源地は夫々に遺跡・採集地・古墳・古窯跡として、縄文から鎌倉時代までの考古学上の貴重な地点になっているのに驚く。川を下った瑞穂橋付近には縄文前期から弥生に及ぶ複合遺跡大曲輪貝塚や古墳群の他、万葉集の「あゆちの水(伝承地)」等々がある。といったわけで山崎川をキツカケにして、日本文化の源流と愛知との数々の係り合い

- ① 伝承ヤマトタケルの文化と尾張名古屋
- ② 仏陀の御真骨発見と国際的寺院日泰寺
- ③ 日本の土器文化と猿投古窯発掘(瀬戸)
- ④ 近世のあけぼのと立役者三英傑の輩出

④ 世界無比の文芸俳諧と「蕉風」発祥地 ⑥ 木曾川水系の珍木愛知県々木ハナノキ

などについて一端の知識をもてたことは誠に楽しく又幸いなことであった。(名古屋)

「暮らしの造形」造美サロンVol.一五 一九九二

むすびに

当「晴雨計」執筆の機会をお与えいただいた新潟日報社東京支社報道部の武藤斌氏、武藤氏と共にいろいろな面でご指導を賜りました同社学芸部栗山勝博氏に、この項を借り感謝申し上げます。

又拙文に関し、読者の方々からお便りや励ましのお言葉をいただきました。ありがとうございました。

結びに、種々資料の蒐集やテーマにご協力頂いた多くの先輩、友人に心からお礼申し上げます。

筆者は「尾張国養老元年之図」という出所不明な図を持っている。何かに紹介しようと思っていたが、機会を得なかった。たまたま、今回の編集に際して「クリオールのたわごと」と「史遊会通信」の合間に、若干の余白ができそうなので、図の散逸を防ぐために載せることにした。折角なので、若干の説明も付ける。それにしても不思議な史料である。

「尾張国養老元年之図」に思う

大和朝廷が成立(四世紀?)時代の軍事的英雄、伝承日本武尊(景行天皇皇子)の「東征の帰路」最後の活躍が近江伊吹山(二三七七^{ミナト})の神との戦であった。尊は暫時滞在した尾張熱田から出立するのであるが……。

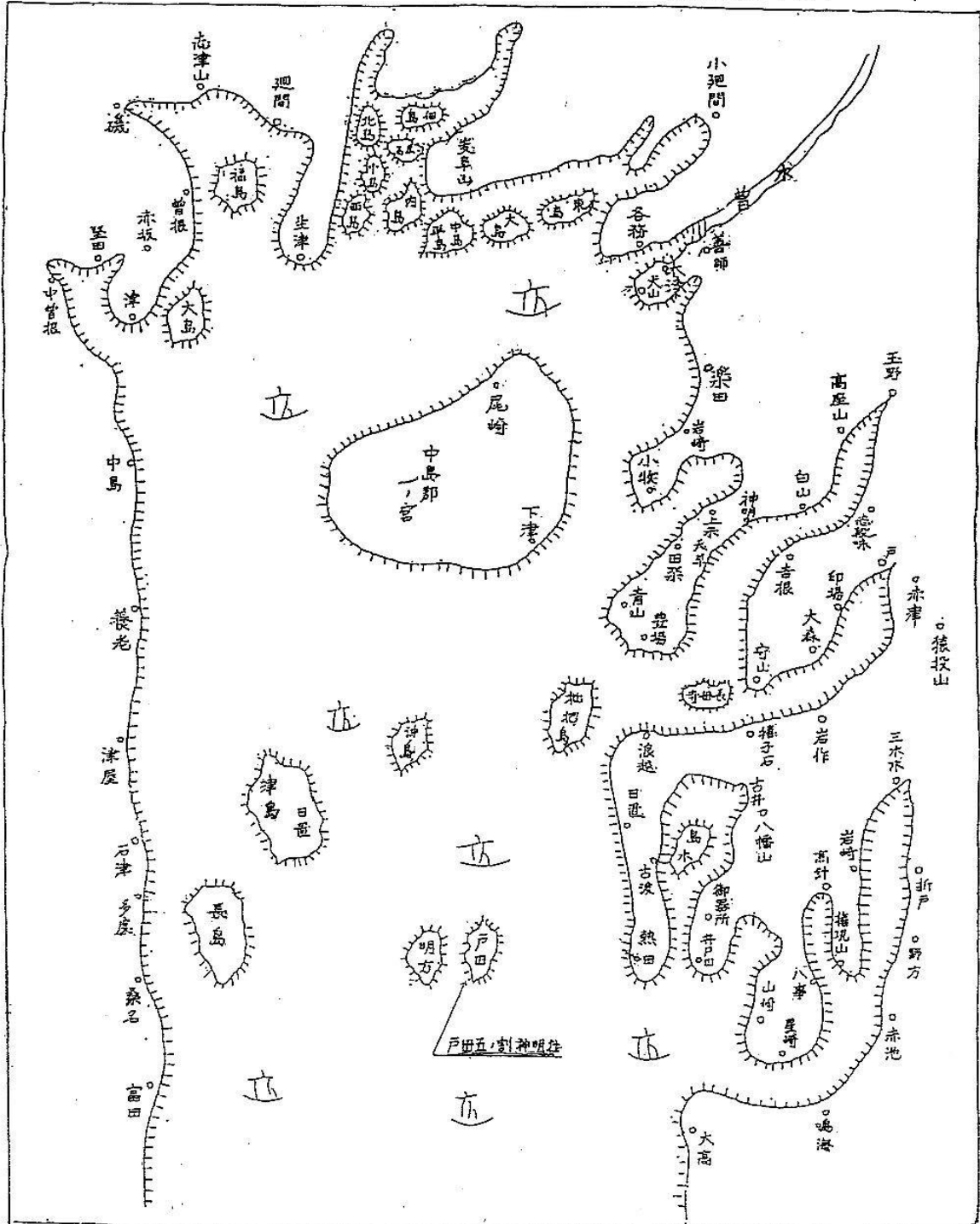
伝承によれば尊一行は、熱田(愛知)から船で伊吹山東麓の地池田(岐阜)まで行ったという。そして伊吹山で悪戦苦闘の末、尊は病を得て歩行困難となり、故郷大和を目指し、養老(岐阜)から船で、多度(三重)・桑名を経由し、四日市に上陸歩行するも足が萎え、能褒野(三重)鈴鹿川に没したという。「時に^{みとしみそじ}年三十」。

千数百年前は「尾張国養老元年(七二七)之図」(出所不詳)に見る如く、現濃美平野―熱田・守山・小牧・各務・岐阜・池田・養老・多度・桑名ライン―は伊勢湾に続く海だったのである。濃美平野三大河川(長良川・木曽川・揖斐川)の自然の偉力に脱帽。

尾張國 養老元年之圖

(原図 古事記・日本書紀の出来た頃のもの)

西歷七百十七年



史遊會通信

目次

◎ 「邪馬台」は「ヤマト」だ	平成十四年十一月十七日	1
◎ 「南北朝」と「ハナノキ」	平成十五年十一月十八日	3
◎ 外山脩造と生麦事件	平成十七年三月十四日	5
◎ 山本有三の『米百俵』と近衛文麿・山本五十六	平成十八年九月十五日	10
◎ 北越戊辰戦争と越後長岡藩「二人の虎三郎」	平成十九年二月十六日	15
◎ 智将直江山城守兼続と碩学諸橋轍次博士	平成十九年十月十三日	17
◎ 「牛乳」と「明治維新」	平成二十一年九月五日	19
◎ 『東京牛乳物語』——和田牧場の明治・大正・昭和	平成二十一年十二月二十日	22
◎ 「牛乳」と明治の二大文豪——鷗外・漱石	平成二十二年三月十五日	25
◎ 江戸幕府と「三方領知替・新潟上知」 ——幕政衰退と越後長岡藩財政打撃	平成二十二年四月十日	28
◎ 「小諸なる古城」	平成二十二年六月十四日	30
◎ もう一つの「五稜郭」——信濃国佐久・龍岡城五稜郭	平成二十二年九月六日	32
◎ 「風物詩」に想う	平成二十三年一月十三日	35
◎ おわり名古屋追想 すもう・相撲・角力	平成二十三年三月十三日	37
◎ 皇女和宮「替え玉説」考	平成二十三年七月十七日	39

◎	ロシアに眠る幕府の大砲	……………	(平成二十四年 三月十二日)	41
◎	版画「平家一門武者絵」を読む	……………	(平成二十四年 十月十五日)	43
◎	越後国・佐渡国「二宮」考	……………	(平成二十四年十一月十六日)	46
◎	古代日本海文化の再認識―潟湖連合勢力と邪馬台国	……………	(平成二十五年 四月 十日)	48
◎	丹後国一宮元伊勢籠神社―神社名の謎―	……………	(平成二十五年 十月十三日)	51
◎	「ハシからハシ」のはなし	……………	(平成二十五年 十月十三日)	54
◎	海舟の父・旗本勝小吉の出目と生涯	……………	(平成二十五年十一月十三日)	56
◎	中山道旧板橋宿歴史散策―幕末・維新の三題雑感	……………	(平成二十六年 一月十五日)	61
◎	(株)明治・創立者相馬半治翁留書	……………	(平成二十六年 四月 十日)	64
◎	「師・勝海舟と門弟・坂本龍馬」の幕末・維新	……………	(平成二十六年 六月 十日)	68
◎	古代日本海沿岸の神々と国宝『海部氏系図』	……………	(平成二十六年十一月 十日)	73
◎	生涯を「義」に生きた勝海舟	……………	(平成二十七年 三月 十日)	82
◎	幕末・維新期の主要人物と初代陸軍医務局長松本順	……………	(平成二十七年 十月 十日)	88
◎	釈尊・玄奘の御真骨発見と異聞	……………	(平成二十八年 三月 五日)	96
◎	「江戸本所」と勝海舟	……………	(平成二十八年 五月 五日)	104
◎	―勝海舟の実務の師―幕末遠国奉行 川村清兵衛修就	……………	(平成二十八年 七月 五日)	113
◎	―元官幣大社・正一位勲一等―	……………	(平成二十八年十一月 五日)	123
	越前国一の宮 氣比神宮の謎	……………	(平成二十八年十一月 五日)	123

「邪馬台」は「ヤマと」だ

一 名は体を現わす

「邪馬台国・卑弥呼」なる語をはじめて耳にしたのは、終戦直後、旧制中学二年の日本史の授業の時。何の疑念もなく邪馬台国は九州と思った。日本天皇家のルーツは天孫降臨に始まるとの国定教育による思い込み、その根底に古代のこと、先進文物は大陸に近い九州からが当然との思いがあつた。長じて、民族や国家の概念把握のため、改めて史学に接し、最近は畿内大和説に傾いている。

昨今、邪馬台国論議は国民的ロマンにまで拡がった。楽しいことだ。ただその論議が「魏志倭人伝」をバイブル視するあまりのミクロ論が多いのが気にかかる。

邪馬台国に関する図書は四百冊、四百説といわれ、江戸時代から今に続く。

かかる現状に至った元は何か。問題のおこりは漢字「邪馬台」を当初、日本では「ヤマタイ」と読んだこと。結論から言えば、私はこれは。「ヤマと」と読むべきであると考えからである。

漢字「臺」は中国における魏志倭人伝の用字（音標文字）では「と」（乙類）であるという。大森志郎氏が一九五四年に指摘している。また、橋本進吉氏の万葉仮名の用字法の研究から、「大和（ヤマと）」の「と」は奈良時代、乙類であることもわかった。このことから「邪馬台」は「ヤマタイ」でも、九州の「山門（ヤマトⅡ甲類）」でもなく「ヤマと」が符合するとされる。

かかる重要なことが何故。このことは国語学者間では以前から知られていたが、言語学者が史学の分野に介入するのを遠慮したためとみられる。

二 諸論点について

「邪馬台国」が畿内大和であるとなると諸論点もすっきりする。我田引水と九州説論者から反論が出るが。

方角について―邪馬台国に至る行程で「南は東」かで論争が。これについては中国宋代の「輿地図」(由良哲次氏指摘Ⅱ京都東福寺山内栗棘庵蔵)が雄弁に答える。

十三世紀、日本列島は南北に長く描かれている。

日数について―弥生後期中葉以降、北九連合は「鉄」の瀬戸内ルートを閉鎖する。瀬戸内、畿内、東海地域の首長連合は大陸と海続きの日本海ルートを活用、南北ルートを確立した。これにより日本海地域(出雲・但馬・丹波)と畿内地域は力をつけると共に安全ルートを構築。これが倭人伝の不弥国から投馬国、邪馬台国へのルートに使われた。

年代について―最近発掘調査が終了した纏向のホケノ山古墳は、築造時期が三世紀前半と発表された。さきの池上曾根遺跡が年輪年代測定法で古墳史を約百年早めることになったことと相まって古墳時代初頭と卑弥呼の活躍した時代とが重なってきた。

銅鏡について―柳本の黒塚発掘の結果、改めて画文帯神獸鏡が三角縁神獸鏡より上位であることが明らかに。

人口について―人口推計学の進歩で、当時の政経の中心地検証が行われ、大和説を裏付ける結果が得られた。論点は他多数。

漸く緒についた発掘や調査技術の日進月歩からの次々の新発見。ロマンは尽きない。

「南北朝」と「ハナノキ」

一 ハナノキ

一般に「花の木」というと、日本人はサクラを思い浮かべる。ところが、正真正銘「ハナノキ」の名をもつ木が存在する。

愛知県の県木（昭和四一年九月二三日選定）にもなっている。

ハナノキは世界的珍木で日本にある自然木はほとんどが国の天然記念物に指定されている。学名に *Makino* がつくこのカエデ科の落葉高木は、事典にも「本州中部（岐阜・長野・愛知）の高湿地にまれに生える」と記されている。県木に定めた愛知県にも自然樹の古木は九本しかない。樹高二五メートル。早春、小さな深紅色の花が枝先まで咲き、樹下から仰ぎ見ると、空一面が花がすみとなる。新葉は紅褐色。夏は深緑のミツバカエデに一変。秋には紅（黄）葉。冬、樹木の主幹は上まで貫かず、股枝が多数の小枝に分かれて鋭角に斜め上に天を突く。

更に、日本のハナノキ（別名ハナカエデ）と北米東岸の紅カエデ（通称アメリカハナノキ）は共通の祖先とか。日本が大陸の一部であった数千万年前の残存群。その隔離分布が専門家の興味を呼んでいる。

このような珍木故にハナノキは、古来、小木は鑑賞用として盗木の対象とされ、大木は建材に重用され、個体の発生条件の過酷と相まって、その樹数は激減した。

愛知県の九本が残っているのは、北設楽郡豊根村大字坂宇場字御所平の（旧）ゆきよし尹良神社（現在の川宇連神社）境内「川宇連のハナノキ自生地（国指定）」。

川宇連のハナノキが今に残ったのは、盗木すると、この木にゆかりの深い尹良親王の「崇り」があるとの言い伝えによるものと言われている。

二 尹良親王

尹良親王に関する文献には「浪合記」等がある。

親王は後醍醐天皇（在位一二三二～一二三九）の第八皇子宗良親王（征夷大將軍で「信濃の宮」とも）（一二三二～一二三八五？）の皇子で南朝勢力の挽回に力を注いだ。

尹良親王（一二三四～一二四四）と「川宇連のハナノキ」の因縁話は……。

親王が豊根村に滞在の折、足利氏の追討を逃れての隠れ生活で、思うところがあつて祠を建てられた。偶、地面に立てられた二本の箸にやがて枝葉が繁り、樹齢五百年の神木になったと。これが尹良神社の創建とハナノキのはじまり物語として、今も言い伝えられている。

その後、親王は信濃国に隠れ住まれたが、応永三十一年（一二四四）八月一五日、飯田から三州に向う途中、長野県下伊那郡浪合村で北朝方に襲われ、生涯を閉じた。

親王が服心の部下二五人と自害した場所である大河原の地を、人々は「宮の原」と言い伝えて「千人塚」をつくったという。

現在、長野県下伊那郡浪合村宮の原には尹良親王を大神として祀る「浪合神社」が建っている。また、山麓の丘には、宮内庁（明治一四年二月一四日より管轄）の「尹良親王御陵」と「尹良親王陪塚」（三堆の小塚）がある。「南北朝合一」が果たされた一二三九二年後も南北朝の「怨」が続いていたことが伺える事件として興味深い。

又ハナノキのゆかり話も、川宇連の人々が、異国で非業の死を遂げた尹良親王への追悼の情として語ったものと知り、首肯。

外山脩造と生麦事件

外山脩造は天保一三年新潟県栃尾市生。（現長岡市）

幼名寅太。その人物像について『長岡中学読本』は、戊辰戦争時長岡藩家老河井継之助「自負傷時至最期扈從者之一人寅太後年大阪財界巨頭外山脩造也」と簡潔に記す。

脩造は阪神電鉄の創立者で関西財界の立役者、梅田駅前広場に胸像が建っていた。

関東では、司馬遼太郎の『峠』の中で、継之助の知遇を受け、その最期の場にも居合わせた幼名「寅太」で知られるが、彼の青年時代は余り分かってはいなかった。ただ寅太の昌平黷時代的一大エピソードが巷間喧伝されている。

へ文久二年（一八六二）夏、外山が江ノ島方面に遊んだ折、生麦事件への関わり嫌疑を受け投獄され、放免後は帰国。また師河井も浪遊を終え、二年前の万延元年（一八六〇）に帰国していたと。

偶先般、寅太の生家から黷友達一二名の贈別文「送外山子良帰郷」が見つかった。

それによると寅太は黷中では「子良」、しかも「仙風道骨」の人柄から「仙子良」と呼ばれていたらしい。文書にはかの遊覧が

「今茲六月子良与諸友称金沢之勝云々」、贈書日「文久紀元辛酉（一八六一年）秋七月中澣」と記されている。またその帰郷は、遊覧帰途「藩侯命帰国」を受けての急拠だった。一方、継之助の帰国は「文久元年（一八六一）夏」と記す。（『河井継之助伝』本文）

従つて、寅太らの遊覧と彼の帰郷は、文久元年（一八六一）、生麦事件は翌文久二年（一八六二年八月二一日、と年月の異なる出来事で、全くの無関係。エピソードは遊覧帰途の「奇厄」遭遇と結びつけた推測ということになる。

また継之助は万延元年には遊浪の最後で、まだ江戸に留まつており、帰郷は翌文久元年であつた。継之助が帰郷すると藩の大役がまっていた。必要な人材として寅太を急ぎ呼び戻したのである。主従二人の帰国は同年の「文久紀元辛酉」であつた。

何故かかるその差を二年もの誤りが生じたのであろうか。原（もと）は二人の夫々の伝記にある。脩造を語つて最も信憑性が高い『軽雲外山翁伝』（昭和三年編輯者竹内義雄）年譜に「文久二年二十一歳、夏友人人数人ト共ニ江ノ島鎌倉ニ遊ブ、此時外人襲撃ノ疑ヲ以テ獄ニ投ゼラル、事十余日後放タレテ郷里ニ帰り、次デ里正トナル」とある。

また『河井継之助伝』（昭和六年著者今泉鐸次郎）略履歴には「萬延元年庚申夏帰郷（本文と異なる）と記されている。この二つの誤記に加えて、安政・万延・文久と改元が続いたことも更なる混乱を招いた一因であろう。が、その真因は脩造が己の若き日については語らなかつたところにある。

脩造は十七歳の時、小指と血書を残して江戸へ出奔したが、子の捨造は「父の小指がなかつたわけは、死後初めて知つた」。

小指、昌平黷、戊辰戦争、継之助のことは所詮「賊軍」の話になると考えてのことか。事実、脩造の不語については「薩長藩閥政府の大蔵省は朝敵の立場にあつた外山」の職場ではなかつた故明治一一年辞官（『阪神電鉄八十年史』）の如く、諸般「賊軍」を慮つてのこととみられている。

しかし、彼の頑までの不言不語は、継之助の「寅や、商人になれ」の一言にあった。

脩造（大正五年没）にとっては師の遺志を実現することのみが報恩の誠の道、生き様だったのである。外山脩造生家から平成十六年に発見された昌平黌の友人十二名の贈別文のうち、代表する二人の漢文を解読。

記

一 送外山子良（脩造）序

辱友 黄薇（吉備） 松山 東謙

二（前闕）文「文久紀元辛酉秋七月中澣」

辱知 姫路 多田機拝

（姫路藩主酒井雅楽頭家臣 多田幾弥 安政六年（一八五九）昌平黌入学 文久二年（一八

六二）退学）

漢文の解読については元国学院大学教授小林宏氏に多大なるご教示を頂いた。

送 外山子良序

外山子良越後長岡人也弱冠来於江戸遊於宕陰塩谷先生之門既而入昌平黌為人具道風仙骨毫不芥蓄於物以故黌中戲目之以仙子良亦以不為意余於是服其為人有得必告有疑必質其親厚無間者莫子良若也今茲六月子良与諸友称金沢之勝探江島之景遂人鎌倉歴覽源右

將之所開基公曉之所殺三世公及新田氏之所沈劍北條高時之所自殺與其阨塞當時所爭據以自保者煜然弔昔人於千歲之既而過小田原又觀北條氏之所城守豐太閤之所陣遂極函嶺之巔浮舟湖水仰視富岳俯瞰八洲之曠野遂歡入江戶歸途不幸面遇奇厄於是平藩侯命歸國子良瓢然來告別曰余之出國也學期於必成矣而今遇斯厄遂至于此且越之為地僻在北方其歸也莫賢師良友以輔翼已余學亦莫所成就是余之所以慷慨也請子為贈一言余乃告曰今子良蛋歸國何患學之不成大凡人之為學不在師友而在勉與不勉而已矣然則子良笛學於江戶徒消歲之碌々莫所勉強學之不成必矣今其歸國也不敢屈志日夜勉強若水之混々流而不已乃學之成可刻日面待也是則今日之不幸何知非他日之幸乎子良大喜曰子之言大善矣不敢勉乎於是臨其歸書以贈

辱友

黃薇松山

東謙

〔前闕〕

士路後

皆具仙風道骨贊中戲目以仙士路加州處

士為人磊々落々瓢然與世相忘性最嗜酒善飲善醇々必睡故人呼之為仙子良之為人亦類之子良初遊都門也荷衣弱笠不齎一卷瓢然來遊宕陰翁之門後亦入荅贊一見相識余乃知其為奇人矣莫逆相交日久然後始得其為人子良胸中磊落言語容貞悉出人意表超然脫平名利之外不以毀譽窮通而芥蒂其心琅々諷吟奇音驚人人呼為仙亦不評也余之與子良締交最熟夏秋之交常同枕席談或及忠臣孝子之事感極而淚下者屢矣殆亦一世之奇男子也今秋子良以

事將歸越瓢然辨旅裝告別於余且乞一言余□告曰人生如夢遊樂其幾與許況此萍蹤於值乍會而乍散者乎此余之所以不能無恨於此別也因滑然淚下子良恬然亦不以為意仰仙之為仙非一有仙於酒者有仙於睡者或又仙於老者有之若士路善飲又善睡殆此仙於酒與睡者矣至子良則不飲不睡而丰樞壯又不可謂之老然則子良果其何仙乎將坡仙乎仰又浪仙乎昔者事仙道不務寡欲貧婪無厭者謂之饕餮仙今也子良非學仙者而健啖庠人饗中無出其右者而其良亦類仙然則此亦謂之饕餮仙而可乎子良噤然笑而不答遂書之為贈文久紀元辛酉秋七月

中澣書於茗鬢小窓下

辱知

姬路

多田機攄

山本有三の『米百俵』と 近衛文麿・山本五十六

「米百俵」の故事が改めて脚光を浴びたのは、小泉純一郎首相の所信表明演説。

この話は越後長岡藩地縁者の語りであったが、昭和十八年、山本有三により周知におよんだ。

長岡は、慶応四年（一八六八）北越戊辰戦争で壊滅、藩士らは飢餓に喘いだ。偶支藩からの救援米百俵の分配を藩士が迫った時、大参事小林虎三郎は「人材育成は国家繁栄の礎、ひもじい今だからこそ」と説き、敗残窮餓の中より学校を建てた。

ところで、有三がこの故事を知った経緯についてはあまり知られていない。有三は『米・百俵』の初版本「はしがき」（昭和十八年六月新潮社同）に「小林虎三郎を知ったのは（略）星野慎一君のおかげ」で、彼が『真実一路』の独語訳の件で、昭和十四年来訪したのが端緒であり、従って「この人物を知るに至ったいんねんは『真実一路』にあるといへないこともありますまい」と記す。

これにつき星野（平成十年十二月没）は、郷里長岡の文芸誌「penac」（一九九三年八月）に『米百俵』と山本有三」を投稿。「有三が深く感動した出来事についての記述が全く欠落しているのが気掛かりで、後世の史家のために一文を」の前置で、有三が終生（昭和四十九年一月没）不言不語のエピソードを語っている。

……昭和十四年の或る日、有三を訪ねると、「昨日軽井沢の近衛のところへ行ったら、別荘に海軍次官の山本五十六が来ていた。あの人は偉いんだってね。三国同盟ができないですんでいるのは、あの人

のお蔭だそうだよ。まったく、偉い人だ。」

と有三は感にたえない様子であった：

これがきっかけで、五十六と同郷人の星野は、河井継之助のこと、小林虎三郎のことを話した。有三流にいえば『米百俵』を知るに至ったいんねんは、近衛文麿・山本五十六にある」といってよいであろう。

しかし、このことは伝えられていない。

昭和十四年から十八年頃の日本の国情は特異だった。十四年は近衛内閣総辞職・平沼内閣成立で年が明け、ノモンハン事件や要人暗殺計画（五十六は五月三十一日付の遺書を書いていた）などが明るみに出て、要人の行動は秘された。

星野が有三の意を慮ってか、あえて特定していない或る日とは、私見では、八月十五日。

その直後、二十三日の「独ソ不可侵條約調印」で五十六が命懸けで反対してきた三国同盟阻止は水泡に帰す（昭和十五年九月、日独伊三国同盟調印）。平沼内閣は「欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢を生じ」の言葉を残して二十六日に総辞職した。

三十日、阿部内閣成立。同日五十六は親補式・連合艦隊司令長官に就任。翌三十一日、東京駅より特急「かもめ」にて赴任の途につく。この状況一変で、有三の感動発言は口外不可となった。

理由はもう一つ。或る日から一年半あまりたつて（十六年春頃か）星野は有三に招かれた。有三は「河井継之助、戦争にふみ切ったところが、どうもひつかかる。おれだったらやらなかったと思うな、それよりもね、あの、食えないから学校を建てるという話、あれはすばらしい。あれをやってみたい」

という。作家が「ペンを折る」のは「切腹」に等しいがと、『路傍の石』を連載途中で中断（十五年六月）、軍部の圧力に抗した人の言葉であり、甚だ重い。

戯曲『米百俵』はこうして、奇しくも、山本五十六の戦死が公表された日の昭和十八年五月二十一日に書きあがった。しかしこの平和を願う名著も強い弾圧で絶版、自主回収となった。

付註 「山本有三の『米百俵』と近衛文麿・山本五十六」

一 「米百俵」の故事

『長岡中学読本』（新潟県立長岡中学編 目黒書店発行 昭和十一年十月）

病翁小林先生伝 高橋翠村

（前略）時承戦乱之餘、藩士窮乏甚。会支封三根山藩主唁之、饋米若干斛。藩士多望分與以救飢。先生不可、必欲資之以立学。衆嗷嗷迫詰曰、「吾輩索食之不暇、焉用学校。」先生正色曰、「諸子但不能自活。吾故欲興学、使以有所樹立耳」。衆不敢復言。乃首立国漢学校、次及洋学校、医学校。（後略）

二 長岡高等学校歷程（抜粋） 記念資料館

○明治二年（一八六九）五月

国漢学校 小林虎三郎により開校

○明治五年（一八七二）十一月二十三日

長岡洋学校 三島億二郎により開校

○明治二十五年（一八九二）十月

古志郡町村立長岡尋常中学校

（川上鏗太郎・二国万次郎ら設立）

○明治三十三年（一九〇〇）四月

新潟県立長岡中学校

○昭和二十三年（一九四八）四月

新潟県立長岡高等学校

三 山本有三と近衛文麿の関係

「近衛のところへ行ったら」と呼捨て

○一高の同級生

明治四十二年（一九〇九）一高英文科入学の同級生。他に豊島与志雄、山宮允、三井光弥ら（有三是一年落第）。

○第三次『新思潮』の出来事他

大正三年（一九一四）有三と山宮が中心になり『新思潮』創刊。

同人は豊島与志雄・芥川龍之介・久米正雄・佐野文夫・成瀬正一・土屋文明・菊池寛・松岡譲（長岡出身）の計十名。

当雑誌に文麿翻訳のオスカー・ワイルド「ソール・オブ・メン・アンダー・ソーシャリズム（社会主義下の人間の魂）」掲載。検閲に触れ、発売禁止。

○有三と文麿の書翰（昭和十六年頃）

杉並区西田町一丁目七四三

近衛文麿 様

府下三鷹町下連雀九一

山本有三

時節柄とはいえ、有三は自分宛新潮社封筒に文麿の宛名を貼り再使用。

一般書簡 「近衛文麿閣下」または「近衛文麿公閣下」 勿論新品封筒。二人の関係が滲み出ている。

○有三は文麿の公式「声明文の代筆」を、少なくとも三回以上頼まれている。

四 「ペンを折る」など有三の筆難

○（前述）有三ら創刊『新思潮』発禁。

○昭和八年（一九三三）四十六歳 「女の一生」連載時、共産党シンパとして官憲に検挙さる。

○「ペンを折る」『新篇路傍の石』を「主婦之友」に連載中、作品の内容に対する軍部の圧力が加わったため「筆を曲げて書く勇氣は、わたくしにはありません」との言と共に連載を中絶（昭和十五年六月二十日）。

○昭和十八年（一九四三）五十六歳 一月、二月に戯曲『米・百俵』を「主婦之友」に発表。六月、新潮社より『米・百俵』刊行。同月、東京劇場で「米百俵」上演。官憲から「反戦戯曲」と弾圧を受け、絶版。自主回収。

○山本有三『米百俵』新潮文庫 一七二頁 「終わりに、（略）長岡中学の岡本賢太郎氏ら……」は、岡本賢太郎氏の元本由来の誤り。人名故に一言。

北越戊辰戦争と

越後長岡藩「二人の虎三郎」

二人の虎三郎とは「謎・幻の軍目付二見虎三郎」と、周知の「米・百俵の大参事小林虎三郎」のことである。

二見は、開戦を決した官軍との「小千谷談判」の折、藩の存亡を賭けてことに臨む家老・軍事総督の河井継之助に唯一人随行した藩士として知られている。にも拘らず、彼については「慶応四年八月廿五日若松七日町口にて戦死」の藩記録以外に資料がなく、歴史家の間では「謎・幻の二見」といわれられていた。

たまたま平成三年四月、二見の曾孫にあたる斎藤久子宅（札幌市）から一二五年前の虎三郎の写真原板（ガラス板・「慶応二寅年八月二十三日 於大坂表写し 写真鏡二見虎三郎正直 行年三十一歳」の備忘書付）を含む遺品数点が発見され、またこれを機に曾孫の一人である佐藤幸三氏（埼玉県三郷市在住）により、労作『二見虎三郎・一人娘テツとその子孫』が纏められた。

これらにより「謎・幻の二見家」の正体がかなりはつきりしてきた。

二見家の出自は、三河国と伊勢湾を挟む対岸の二見かと思われるが、長岡二見家の初見は「高百式拾石 出所駿河大納言忠長公御家士」であり、その忠長は兄三代將軍家光とは不和で、寛永十年（一六三三）に自刃した。二見家はその後、牧野家の家臣となり長岡に住したのであろう。

長岡藩主牧野氏は、三河国牛久保（現豊川市）を本拠としていた永禄九年（一五六六）松平家康と主従関係を結び、元和四年（一六一八）に長岡移封となっていた。

二見家は代々居合「伯耆流」の使い手として名高く、砲術「武衛流」にも心得があり、戊辰戦争では虎三郎が鉄砲隊を指揮して奮戦したことなども判明した。

郷土史家が最も謎としていた二つの異なる命日「藩戦死者名簿の八月廿五日」と、墓誌（長岡市東神田栄涼寺）の「於羽州山形九月十四日死」の件は、遺品添え書きで明らかになった。それには「岩代国会津若松七日町ニ於テ銃創ヲ蒙リ 羽前国山形ニテ卒ス行年 三十二才 在職軍目附ヲ以テ 終リ 霊名 珠光院精（墓誌の「誠」が正しい） 譽忠雲居士 俗名 二見虎三郎正直」と記されている。

二見虎三郎は天保六年の生まれで、子供が二人いた。二見十七才の時の息子三男三とその十五才下の異母妹テツで、発見された添え書きはテツの筆によるものであり、墓は三男三の建立とみられる。伝承によるとテツは「虎三郎は首をくくって死んだ」といつていたという。これらのことから、負傷したのが八月廿五日、利き腕の銃創で切腹が叶わず縊死したのが九月十四日だったことが窺える。

次の謎、藩未曾有の大事で、しかも敵の本陣に乗り込むに随行藩士は二見だけであったこと。

これについては先ず、官軍に対して一切敵意をもっていない証を示すため、であったことは容易に察することができる。第二には、二見は軍目付け役であると同時に、相当な使い手だったことがあげられよう。加えて、テツは「河井家（一二〇石、継之助は八月十六日岩代塩沢村に於て没）」と二見家（本家一二〇石、斧右衛門は七月廿五日長岡城回復の際、城下に於て没。分家六五石、虎三郎）は親戚であった」と言っていた。河井はいざの時、二見が身を挺してくれる一騎当千の士と信頼していたことがわ

かる。

しかし河井継之助の真意は別のところにあったに違いない。「会談」は決死のもので、最悪の場合、全員討死を覚悟しており、味方を最少の犠牲にとどめたかった。かくして選んだのが、肝胆相照らす間柄で、仮にいかなる結果になろうとも許してもらえる二見虎三郎であったと、河井の日頃の言動が語っている。虎三郎も亦、継之助に准ずる風雲児であった。

ところで、この探索のなかで新たな“謎・幻”も出て来た。「虎三郎の藤川家よりの養子説」と「二見本家並びに嫡男三男三家の消息が長岡から全く跡切れたこと」だ。

さきの大戦中、米軍の空爆で長岡市は焦土と化し、戸籍原簿までもが焼失してしまい、これ以上の追跡は不可能になっている。

新情報に期待。

智将直江山城守兼続と碩学諸橋轍次博士

直江兼続（一五六〇～一六一九）は、安土桃山時代の武将で、上杉景勝（一五五五～一六二三）に仕え、主君景勝を大大名に押し上げた名家老として知られている。

兼続は幼名を樋口与六といい、坂戸（新潟県南魚沼市）城主長尾政景の子卯松（後の上杉景勝）の幼少時からの近習であった。

天正五年（一五七七）に能登を平定した上杉謙信（一五三〇～一五七八）が翌年急死。跡目争いの「御館の乱」での景勝の勝利には兼続が貢献したという。

天正九年、景勝の重臣与板（長岡巾与板町）城主直江信綱が殺害されるという事件が起こり兼続が直江家を嗣ぐことになった。

直江兼続の文武に秀でたエピソードは多々あるが、中でも慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦における徳川家康との戦火なき攻防は、リーダーたる者の決断とはいかなるものかを示した好事例として現代に語り継がれている。（藤沢周平『密謀』）

諸橋轍次博士（一八八三～一九八二）は、世界的偉業と謳われる『大漢和辞典』（大修館書店・昭和三五年全一三巻完結）編纂者として名高い。私の座右に、衝立仕立ての色紙がある。書は「天地無私春又歸 丁未春日 止軒」。「止軒」は博士の号で、『莊子』の「人莫鑑於流水 而鑑於止水」による。「丁未」は昭和四二年、八五歳になられた博士が一切の公職から退かれた年である。序でながら「轍次」は教育者の父安平氏が、北宋の文豪蘇轍にあやかっただけの命名という。

ところで、博士は出自について『諸橋轍次博士の生涯』（鎌田正監修）の中で、興味深いことを語っている。「本家の歴史をたどると、越後国主上杉景勝の功臣直江山城守兼続（与板城主）の後裔といわれ（中略）、慶長三年（一五九八）景勝の会津移封後、祖諸橋吉右衛門はゆえあって浪々の身となり、越後へ移り新発田領湯川村に住した」と。

日本には二九万余の名字があり、八割が地名由来とのこと。「諸橋」の地名は一カ所。昭和三〇年、石川県鳳至郡穴水町に合併した諸橋村。初見は承久三年（一二三二）の「諸橋保」（国司の統治下にあ

る土地で国郡郷保）。この能登七尾湾北部に位置する地にある諸橋稻荷神社とその背後にある標高一五メートル程の古墳三基をもつ通称縁山。山の杜（もり＝モロ）から前波漁港を形成している龍燈崎の端（ハシ）までの地形が生んだ地名が「モロハシ」のルーツのようだ。

先述の如く、上杉謙信は、天正五年の年明けから能登半島北部に侵攻し、穴水などの諸城を次々に攻略し、七尾湾に続く海岸線を領域とした。「諸橋六郷」も例外ではなかった。謙信は、九月には遂に念願の七尾城攻略を果たし、更に奥能登までも手中に納め、能登をほぼ平定した。そして十二月に春日山城（上越市中屋敷）へ帰陣するのであるが、この時七尾城に残されていた能登畠山義隆の後室（京の三条殿息女）らも一緒に連れて帰った。この戦いの時、諸橋六郷も越後勢に女子を差し出したとの伝承が残っている。越後諸橋姓の謎解きの鍵はこの辺りにありそうだ。

「牛乳」と「明治維新」

日本人と牛乳との出会いは、六世紀中葉欽明天皇（在位五四〇～五七二）の頃に、百済の国から伝来した時であるという。

五五三年に「易」や「暦」などと一緒に百済の博士が大部の医学書も持って来たが、この中には牛乳の薬用効果と共に乳牛の飼育方法も詳述されていた。並行して乳牛も渡来したのであろう。

その約百年後の、大化の改新の年（六四五）、日本に帰化した博士の子孫が、時の孝徳天皇（在位六

四五（六五四）に牛乳を献上したところ、「結構なもの」と賞味されたと伝えられる。これが日本人の牛乳摂取の最初とされる。続く平安時代（七九四～一一九二）、牛乳は朝廷や貴族社会で愛用されたが、武士階級が台頭し、戦乱が激しくなると、大動物の飼育は牛よりも戦力になる馬が中心となり、やがて鎌倉時代末期には牛乳の食文化は完全に消滅した。

日本に牛乳を利用する食文化が再登場するのは、幕末・明治の時代になってからであった。一八五四年の日米和親条約で、三百年に及んだ日本の鎖国が幕を閉じると共にやって来た。「文明開化」の風潮に乗ってのことといえよう。

日本は、慶応四年（一八六八）九月八日「明治」と改元した。誕生した明治新政府は近代国家創出のため、さまざまな改革をした。中でも生活文化、衣食住の欧風化は、人々に直結する改革の先兵であった。特に牛乳の飲用は、その栄養価値が欧米並みの体力・知力延いては国力増強につながるの思いから、酪農・乳業振興には真剣であった。牧場経営、搾乳処理技術、牛乳製造・販売事業については、横浜の前田留吉が文久年間（一八六一～一八六三）にオランダ人から学んだのが草分けという。維新前夜のこのこと。改元早々の明治三年、松本良順（翌四年順と改名）が旧旗本の坂川當晴と赤坂で「牛乳搾取業」を始めた。良順は同時期に早稲田で蘭疇舎病院を設立した著名な医師であった。良順（一八三二～一九〇七）は順天堂を創設した蘭方医佐藤泰然の次男（嘉永二年幕府医官松本良甫の養子となる）で、戊辰戦争では幕府軍医として転戦した。彼は翌四年に新政府の兵部省軍医頭となったのをはじめとして、六年には初代陸軍軍医総監に、後には貴族院議員、男爵になった。

この頃の牛乳飲用はかつての奈良時代の如くで、四年には「天皇（明治）は毎日二回づつ牛乳を飲ま

れる」旨、新聞掲載されるなど、一部の人のものであったことが分る。そして新政府の酪農・乳業発展のための努力もまた知ることが出来る。

かくて、六年には子爵榎本武揚が盟友の男爵大島圭介らと共同で牛乳搾取業をはじめている。これらの先覚者に続いて、後に政府の要人となった人々が次々に参入することとなる。十年頃までに同業に携わった人物を列記すると、

公爵松方正義（第四代内閣総理大臣）

公爵山縣有朋（第三代内閣総理大臣）

子爵由利公正（明治四年東京府知事）

桑名藩主松平定教（曾孫定純が子爵に）

伯爵副島種臣（参議・外務卿・内務大臣）

これらの事例から明治新政府の指導者達が、いかに新時代に向っての指針を示し、形振り構わず「隗なりより始めよ」と率先垂範、志の実現に邁進したかをみる事が出来る。

『東京牛乳物語』 黒川鍾信著新潮社

―和田牧場の明治・大正・昭和―

何故、敢えて「牛乳」と読者を絞る題名を選んだのか、著者の明大教授、英詩専門という黒川鍾信とは何者か。

和田家は、代々徳川將軍家に仕えた鷹匠（隱密）の家柄で、維新時は九代みきの婿養子半次郎の時代。和田半次郎は明治六年駿州から五十歳で上京、偶縁が出来た日本の近代乳業の草分け前田留吉の世話で、小川「牛乳搾取業」で実地修業し、八年独立。和田牛乳店の誕生である。十二年「牛乳搾取営業鑑札第拾四号」を取得。武士から転身をはかり「ハゲ半次郎」と称して家業に励み、忽ち東京市乳業界の十指に数えられるに至る。

十三年、大変な美人で才媛と語り継がれている一人娘ふくに、三国一の花婿東大薬学部専攻の該輔（旧姓久城）を迎えたのを機に、翌十四年店のすべてを譲り隠居、見事な経営者交代をする。二代目の誕生である。十七年の「高名牛乳一覽」（筆者所有）なる大相撲番付を模した序列表で、和田は「行司」欄に位している。事業は順調に発展し、明治三十年後半から大正にかけては全盛期で、東京市乳の五傑入りを果たす。

がしかし、三代目育てに失敗する。女子二人の次、十八年に産まれた嫡男輔を夫婦忙しさのあまり、他家で乳母に五年間育てさせた。乳幼児期の人間形成は重大で、三代目となるはずの輔は商人気質と

は乗離した人柄に育ち、結果、大正四年輔三十一歳の時に勘当する破目になる。この波紋は、二代目該輔の右腕となって三代目の代理を務めてきた長女あいの婿潤平一家の運命を狂わせ、三代目を維いだ二男重夫にも苦勞をかける。

三代目重夫は、大正四年二十四歳で本店を任せられるや東京市乳業界の王座を目指して健闘し、九年「日本均質株式会社」を設立、十五年には「日本最初の低温殺菌牛乳」を販売すると共に「東京第一ミルクプラント」を誕生させた。

昭和三年の「新庁令が許可した牛乳処理場で、低温殺菌処理を施した牛乳以外は販売してはならない」という「牛乳営業取締規則」改正は、莫大な資金、技術力、組織力を必要とし、維新以来「家業」であった「牛乳搾取業」は「企業」へと変貌せざるを得ない時代に突入する。

重夫は、個人経営プラントの組織作りに生き残りをかけるが、五年には「森永煉乳株式会社」が、八年には「明治製菓株式会社」がそれぞれ大手プラントを買収合併して、「森永牛乳株式会社」「朝日牛乳株式会社」を設立、市乳事業に進出してきた。

昭和十年、三代目が突然他界、この時、四代目敏子（養女）輔の四女は女学校に入学したばかりであった。

昭和十二年以降の日本は戦争一色、女所帯の和田牛乳は疎開、牧場閉鎖、本店の米軍による空爆焼失と日本と運命を共にする。

四代目敏子が登場するのは昭和二十九年神楽坂の名物旅館「和可菜」の経営者としてである。作家、脚本家、映画監督に愛された当館のオーナーは、四代目の実姉で輔の三女つま（女優木暮実千代）平成

方 之 東

行司

~ 24 ~

二年没)、また本書の著者黒田鍾信は、彼女らの長姉福枝の息子である。

ところでこの和田牛乳四代を知ることとはとりも直さず「日本牛乳史近代篇」を知ることであった。

「牛乳」と明治の二大文豪 — 鷗外・漱石

日本は、幕末の開国(一八五四年日米和親条約)、維新(一八六八年)を経て、欧米の文化の摂取、普及に懸命であつた。

明治新政府の政策は、政治・経済・社会をはじめ、全ての分野にわたつた。新聞や雑誌の発達もめざましく、近代文学も急速に花開いた。その代表は森鷗外と夏目漱石である。

鷗外(文久二年〜大正十一年)は、明治二十一年(一八八八)ドイツ留学(衛生学研究)から帰国、翌年男爵・赤松則良(夫人貞は順天堂創始者佐藤泰然孫)長女登志子と結婚した。二十三年に『舞姫』を発表し、作家としても才能を示した。四十年には第八代陸軍軍医総監に進んだが、「脚気病細菌説」の誤謬で、終生の汚点を残した。

しかし、こと牛乳に関しては、帰国早々の二十二年、創刊の「衛生新誌」に「牛乳は……母乳の不足を満たし、病人・老人に効果がある」と推奨している。また赤松家を介しての姻戚には、幕末、明治の医学界を担った人材が多数いる。当時は、牛乳は石薬であつた。泰然の次男松本順(男爵・初代陸軍軍医総監)は予防医学の先駆者で、健康増進に牛乳飲用を唱導、明治三年、伯父坂川當晴に東京初の牛乳

店（五番町）を開店させている。六年に「牛乳搾取業」北辰社（神田猿樂町・牧場は麴町区飯田橋）が出来るが、これは順の姪林多津と結婚した榎本武揚らが興したもので、共同経営者大鳥圭介は、順と姻戚の緒方洪庵門下であり、武揚とは箱館五稜郭での盟友でもあった。洪庵の緒方塾（大阪・蘭学）門下といえは福沢諭吉がいる。諭吉は牛乳について、腸チフスに罹った折の体験から「牛乳の効能は牛肉より尚更に大なり。…実に万病の一葉と称するも可なり」と絶讃している。ところで諭吉の子捨次郎は多津の姪林きくと結婚しており、諭吉は武揚、則良と姻戚関係にある。

夏目漱石（慶応五年〜大正三年）は、明治三十六年、イギリス留学（英語研究）から帰国し、東京帝国大学講師に就任した。三十八年「ホトトギス」に『吾輩は猫である』を連載し文名をあげた。四十一歳の時、朝日新聞に入社し『虞美人草』をはじめ、名作を発表したが、五十歳で胃潰瘍のため死去。「猫」の中で胃病によいと「一日牛乳計り飲んで暮らして見たが、此時は腸の中でどぼり／＼音がして大水でも出た様に思はれて終夜眠れなかった」と記している。乳糖不耐だったのであろう。現在なら、胃粘膜の改善とピロリ菌を減少させる効果がある「乳酸菌LG21」入りヨーグルトで、漱石の胃病人生も変わっていたのでは？ 漱石の親友正岡子規は牛乳と相性がよかったとみえ、「牛乳屋を保護して牛乳飲用倍、三倍増を」と病床で訴えている。

子規門下の伊藤左千夫は明治二十二年、本所区茅場町（現錦糸町駅辺）で牛乳搾取業を始め、これを生業としている。

漱石門下の芥川龍之介は明治二十五年、京橋区入船町（現中央区明石町）の牛乳販売店、新原敏三とふくの長男として生まれたが、偶母の病で、本所区小泉町（現墨田区両国）の母の実家で育てられ、十

二歳の時、芥川家の養子になった。

同門の久米正雄は「新思潮」（大正三年）に載せた『牛乳屋の兄弟』が好評を博し、新進作家人りを果した。

鷗外・漱石が明治の二大文豪と称される所以は、二人が文学作品を通して日本の近代文明を鋭く批判、それが現代に通じるところにあるといわれる。「牛乳」はこの二人の何分かの滋養になったのであるか。

江戸幕府と「三方領知替・新潟上知」

―幕勢衰退と越後長岡藩財政打撃

一六〇三年（慶長八）徳川家康が開いた江戸幕府は、三代将軍家光の時代（一六二三～五一年）に幕藩体制が出来上った。

四代家綱（就任一六五一年）から七代家継（一七一六年退任）までは、多少の問題はあったものの、大旨よき時代であった。

八代吉宗は三十年間（一七一六～四五年）将軍職にあり、「享保の改革」（機構・財政改革、農業・物価政策）でよく社会変化に対応、幕藩体制確立に努めた。大旨よき時代とはいえ、この間、災害は容赦なく、

一六四二年の「寛永の大飢饉」をはじめ、

一六五七年の「明暦大火」（振袖火事）、

一六六八年の江戸大火、

一六八二年の「八百屋お七の火事」等、

その復興費は幕府財政を窮乏に陥れた。

更には一七〇七年の史上最大といわれる「宝永地震・津波」「富士山の爆裂」、一七三二年の「享保の大飢饉」の如くである。

吉宗の子九代將軍家重（就任一七四五年）その子十代家治（一七八六年退任）の約四十年間も、列島は凶作、飢饉に見舞われた。

この時期に登場したのが田沼意次^{おきつぐ}。意次は家重の小姓から出世を重ね、一七七二年にはついに門地なき者としては初の老中、而も側用人役兼務の幕閣最高位の人となった。彼は財務に精通の人物で、諸政策を推進、幕府の財政強化を計ったが、役人の賄賂弊害や譜代門閥派の追い落とし、加えて浅間山の大噴火などによる「天明の大飢饉」（一七八三年）、極めは最大支柱の家治の死（一七八六年）で失脚した。代った老中松平定信は十一代家斉^{いえなり}を擁して緊縮政策をとる（寛政の改革）。有名な棄損令^{きえんれい}（一七八九年）発布などまでしたものの、いずれも効果をあげ得ないで終った。

家斉は一七八七年（天明七）、十五歳で將軍となり、一八三七年（天保八）に世子十二代家慶^{いえよし}に譲るまで五十年間將軍職にあり、更に一八四一年に没するまで大御所として君臨、奢侈な生活をした。晩年の一八四〇年十一月一日「三方領知替」——「武蔵川越藩松平家十五万石を出羽庄内に、庄内藩酒井家十四万石を越後長岡に、長岡藩牧野家七万四千石を川越に」を発令した。

表向きは酒井家は酒田港、牧野家は新潟港の抜荷取り締まり不行届きであったが、実体は川越松平家へ養子に出した家斉の五十二番目の子、斉省^{なりやす}の願いを聴いてのことであった。ところが庄内の大規模な反対運動、諸大名の批判、そもそもの発起者の家斉の死（一八四一年閏一月三十日）、次いで当事者斉省の病死（五月下旬）が重なるに及んで家慶は、幕政の重大事と反対する老中水野忠邦を説得、一八四一年七月十二日「国替令」を撤回した。幕府の発令撤回は前代未聞のことであった。しかし、その間八カ月、長岡藩領内は大混乱に陥り、多大な損害を蒙った。而も更なる追討「領知替事件」の余

震ともいふべき「新潟上知令」（「上地」とも書き、土地をお上「幕府」に返納すること）が一八四三年（天保十四年六月十一日）に発せられる。新潟港からの仲金^{すあいきん}の年約一万両は、長岡藩財政の二割に相当する金額であり、当上知は藩にとって致命的大事件であつた。

この件については幕府お庭番川村清兵衛修就^{ながたか}（初代新潟奉行）の抜荷調査報告「北越秘説」（一八四〇年九月提出）が重要な役割をしたというが、抜荷は口実で実情は利益召し上げにあつたともいう。新潟以外の上知は関係大名他の反対が厳しく、撤回となり、忠邦は失脚（一八四三年）。この二大事件で幕府は権力衰退を天下に露呈する結果となつた。戊辰戦争（維新）まであと二十五年の出来事である。

「小諸なる古城」

名にし負う「小諸なる古城」とは……。

全国に「こもろ」の地名は長野県の小諸一つである。古代地名で、モロはモリ「杜」（カミをマツる神域）あるいはムラ「村」（ヒトがムラがる所）の転化で、語源上、モロは朝鮮語の神社や古墳の石室（ムロ）を意味し、モロ・モリ・ムラ・ムレ・ムロは同源・同義語で、本来、山や丘のことであるという。小諸（室）名の初見は「養和元年「一一八一」木曾義仲の部将小室太郎光兼が現城址の東北、宇当坂に館を築いた」との故事である。

次いで小室氏に替わり佐久郡岩村田から大井氏が進出、長享元年（一四八七）大井光忠が鍋蓋城（現

大手門北側）を、その子光為が乙女城別名白鶴城（二の丸付近）を築いた。武田信玄はこの小室城（鍋蓋・乙女城）を攻略、山本勘助らに命じて、大凡現在の城の原型の小諸城（酔月城）を築城した。天正十年（一五八二）の武田氏滅亡以後は、織田、北條、徳川、豊臣と所領が移り、天正十八年には小田原征伐で戦功を立てた仙石秀久が入封（五万石）し、初代小諸城主となって、二の丸・黒門・大手門を、その子忠政が三の門・足柄門を建て城は完成した。その後、城主は六氏七代を経て、元禄十五年（一七〇二）越後与板より牧野周防守康重が入封（一万五千石）し、以後明治四年（一八七一）の廃藩まで約一七〇年十代にわたって牧野氏が在城した。

現在の小諸城址には、慶長十七年（一六一二）に仙石秀久が造営した二階建の大手門と、明和二年（一七六五）当時の藩主牧野康満（三代）が再建した三の門とが国指定重要文化財として残っている。また小諸城に纏わるエピソードとして、二の丸は、慶長五年（一六〇〇）徳川秀忠が関ヶ原の合戦に参戦の途次、上田の真田昌幸・幸村軍に挺摺り、大合戦に間に合わなかったという歴史上のあの時、滞在したところとして知られている。

牧野氏の祖は、源平時代（十一世紀末期から十二世紀末）には四国の讃岐に本拠地を置いたが、承久の乱（一二二一）のとき鎌倉方に参陣、その功により三河国宝飯郡牧野村（豊川市）に地頭職を得て牧野氏を名乗ったとされる。やがて牛久保城（豊川市）を築いて国人領主となった。

今川氏と松平（徳川）氏の二大勢力下、よく戦乱の世を生き抜き、牧野康成は家康家臣となり、やがて徳川十七将に数えられるようになる。天正十八年（一五九〇）家康の関東移封と共に牧野忠成は上州大胡二万石の大名に、更に越後長峰五万石を経て越後長岡六万四千石（後に一万石加増）の藩主となつ

た。以後十三代忠毅の幕末まで牧野家がこの地を治めた。

長岡藩初代藩主牧野忠成は、二男康成に一万石を与えて与板藩を立藩したが、二代康道の後継に五代將軍綱吉の母桂昌院の弟本庄宗資むねすけの子を養子に迎えて三代康重を名乗らせた。この康重が五千石加増されて小諸藩に入封したのである。

ところで、当「小諸なる古城」を周知させたのは島崎藤村であつた。藤村は明治三十二年から三十八年まで小諸義塾の教師を勤めた。三十四年刊行の『落梅集』の一篇「千曲川旅情の歌―小諸なる古城のほとり」が多くの人々の共感を呼び、人々は挙つてこの青春の詠歎と抒情の詩を口遊んだ。それは、藤村が二十一歳で明治女学校の教師をした折、愛し、夭折した教え子佐藤輔子への哀傷歌だつたからである。

もう一つの「五稜郭」―信濃国佐久・龍岡城五稜郭

「五稜郭」といえば、「箱館戦争Ⅱ五稜郭の戦い」で、一八六八―六九年（明治一―二）幕臣榎本武揚らがここに拠つて官軍に抵抗した戊辰戦争最後の戦場を思い浮べる。

この洋式城塞函館五稜郭は、江戸幕府が北方警備のため箱館奉行庁舎として七年をかけ一八六四年（元治二）に完成した。

函館（明治二年、蝦夷を北海道、箱館を函館と改む）の地名は、室町末期にあつた河野政通の館が箱

形をしていたことに由来するという。河野氏は伊予の豪族であったが、奥州征伐の功で陸奥国三迫に領地を得て土着、後に津軽の安東氏と南部氏との争いに絡んで、北海道に渡った。

室町中期にかけて構築された「道内十二館」に、「箱館 館主河野加賀右衛門尉政通」の名が記されている。

一六四一年（寛永一八）幕府は鎖国体制を完成した。そして一七一一年（正徳一）コザック軍が初めて千島列島へ遠征して来る。北方辺地問題の始まりである。

田沼時代、ロシヤの東進政策は激しく、老中意次は辺境政策にも意欲的で「蝦夷地開発計画」を作るが、志半ばの一七八六年（天明六）失脚。

一八世紀末からは欧米列強も加わって来るに及んで、幕府は一八二五年（文政八）「異国船打払令」を発するが、アヘン戦争（一八四〇～四二年）でこれを撤廃した。

とはいえ一方で「台場Ⅱ砲台」を沿岸線に構築する。

新潟港を例にみると、一八四〇年（天保一一）の「三方領地替令」の撤回につづく「上知令」の撤回（一八四三年）で、幕藩制の衰退は顕在化するが、長岡藩に命じた「新潟上知」だけは、六月一日「抜け荷摘発不十分」の廉で実行された。

六月一七日、老中水野忠邦から「北海防禦の台場づくり」の特命で、砲術家川村清兵衛修就が初代新潟奉行（異名大砲奉行）に任命される。

修就は、一八四七年（弘化四）には「台場と灯明台」、続いて「武器蔵と火薬蔵」を完成させ異国船の襲来に備えた。

幕末のかかる内憂外患急を告げる最中、海から最も遠い内陸の信濃国佐久郡田野口村（現在佐久市田口）に「五稜郭」が築城される。

築城者は、大給松平氏奥殿藩最後の藩主松平乗謨で、幕末に老中格・陸軍総裁を務めた人物、乗謨は一八三九年（天保一〇）生まれで、若くして蘭学・仏語・洋式兵学を学び、鎖国政策による国際法や軍備のおくれを痛感、国家存亡の危機を憂い、フランスのボーヴァン元帥が一七世紀に考案したあこがれの、星形稜堡を有する五稜郭の平野での築城を志したものである。

乗謨は一八六三年（文久三）正月、本領三河から信州領への移転を機に、「新陣屋五稜郭建設」を幕府に出願申請、併せて藩名を「田野口藩に改名。六月にご陣屋絵図」を公儀に提出して許可され、翌元治元年三月、龍岡の地に着工、一八六七年（慶応三）四月に竣工した。

ところが、竣工翌年に明治となり、乗謨は新政府から謹慎を申し渡されてしまった。

しかし「北越戊辰戦争出兵」の功により赦免され、その機に「田野口藩」を「龍岡藩」と改称し、乗謨自身も「明治」になるや、松平から大給恒と改姓している。

かかる数奇から「龍岡五稜郭」は函館とともに「わが国にただ二つ」という貴重な史蹟であるのみならず日本最後の城郭の名を忝にし、最近は「地上の星」とロマンを籠めて呼ばれているようである。

ただ二、三の疑問が残る、何故代々城持ち資格のない「陣屋格大名」に築城許可が下りたのか、而も沿岸防御と無縁の海岸線最遠隔地に築城の要があったのか（砲は北西向き）。また、出願の一八六三年は「下関事件・薩英戦争」の起った年、幕府は危急の際にあったことを思うと、不思議でさえある築城である。

「風物詩」に思う

秋・紅葉・高尾山の連想は東京人の普通の感性のようだ。越後長岡の豪雪地で育った私にはその発想は湧かない。秋の紅葉・冬の雪は遊山の対象ではなかった。在京五十有余年、初めて高尾山の紅葉狩りに出かけた。山は銀座並みの混みようであった。

ところで、春は日本中がさくら前線の虜になる。この「さくら」とは…

大辞典には、「サクラ：山櫻・里櫻に二大別し、古、櫻といへるは山櫻をいふ。…さくらは咲（サキ）麗（ウラ）の約なりとも木花開耶姫のさくやの轉なりともいふ」と、又、「植物名の由来」には「咲く羣（ムラ）の略でラは数あることを示す接尾語」とあるが、もう一つ説得力に欠けるように思われる。

私は、サクラを、「サ」は「山のカミ」、「クラ」は「坐す場所」^{おわ}にの意と理解している。生活の場を山に依存していた縄文人が、冬の燦んだ山面に、パツと出現する白い花「春山淡冶而如笑」の情景に、目に見えない「山のカミ」を見たことは想像に難くはない。そして弥生人はこの「山のカミ」を稲田の里に招いて、「里のカミ」として崇拜したのであろう。こう解してはじめて早苗饗のサ昇り^{サナフリ}、サ降り^{ノボ}をはじめ、サ乙女^{オトメ}、サ酒^ケ（古語キ）、サ界^{カイ}、サ外^ト（里）、五月雨^{サミダレ}（サ乱れ・水垂れ説も）、サ力菜^ナ、サ力木^キ（榊）、サ月等^{ツキ}の語に納得がいく。

郷里長岡の花見のメツカは昔も今も郊外の悠久山で、市民は「お山」の名で親しんでいる。太平洋戦争が始まって半年もたたない、まだ銃後にのどかさが残る昭和十七年（一九四三）四月十八日（土）、

我が家は親子五人とテリヤ犬雌のメリー、専門学校の下宿生数名とでお山に行き、満開の夜櫻を楽しんで一同帰宅した。実はこの日、日本ははじめての米軍の空襲を受けていた。

太平洋上の空母「ホーネット」を飛び立ったB25型爆撃機十六機により、東京・川崎・横浜・横須賀・名古屋・神戸が爆撃され、死者四五名、負傷者一六五名、全半焼家屋二九八戸の被害を出した。

空襲時に花見。純朴な田園地帯のこと、わが家は当然、時局を弁えない非国民と誹謗された。

敗戦も間近の昭和二十年八月一日夜の長岡大空襲は、オープンシティにも拘らず、B29一二五機による一時間四十分余の焼夷弾の絨毯爆撃であった。市街の大部分と共にわが家も罹災焼失した。愛犬は狂乱して火の海に向って走り、消えた。あの花見を共にした学生の何人かが戦死していた。

日本の夏は何といっても花火だ。毎夏八月二日、三日に催される「長岡まつり」の花火は「隅田川花火大会」と共に日本の双壁であろう。この長岡の花火のルーツは、江戸幕府がその権力衰退を天下に露呈した「三方領地替（転封）」の撤回（天保十二年七月）を祝って打ち上げた「合図」にあるようである。現在の「長岡まつり」の花火は、かの長岡大空襲で亡くなられた、四七〇余名の「鎮魂」と街の復興への「祈り」から、被災の翌年に始まった「長岡復興祭」をその起源とするもので、単なる夏の風物詩でないことも忘れてはなるまい。

櫻・花火・紅葉・雪の日本の風物詩、西行法師の「願はくは……」、梶井基次郎の「櫻の樹の下には……」の名言、やはり止めは櫻か。櫻という字はいつも気（木）掛りな存在だ。

おわり名古屋追想 すもう・相撲・角力

社命で六年間、名古屋で生活をした。住居は国際的寺院覚王山日泰寺普門閣の脇隣で、毎早朝、読經の大斉唱で目醒めた。

日泰寺は、明治三十一年（一八九八）英領インドで発見された釈尊の御骨の一部と、黄金釈迦像を暹羅（シヤム）国王家より寄贈された日本仏教界が、十万坪の敷地を用意して誘致した名古屋の地に、諸宗共同で、明治三十七年（一九〇四）創立、昭和十七年（一九四二）旧称日暹寺を日泰寺と改称した単立宗教法人（一九四二）の寺である。この日泰寺の建立を機に周辺に名刹が集まるようになった。宝亀山相応寺も、元の東区山口町から移転してきた。相応寺は徳川家康の九男で尾張藩祖義直が、母相応院おかめの方の菩提のため、寛永二〇年（一六四三）建立した寺である。

相応寺は、大相撲名古屋場所では九重部屋の宿舎になり、わが家からは数分の距離にあった。

ところで相撲について広辞苑は『すもうスマフ（相撲・角力）（動詞「すま（争）ふ」から。仮名遣スマウとも）……古代から宮廷で、相撲の節として秋に行われた…』と記す。スマイはスマフの連用形から。

相撲のルーツは大陸にある。モンゴルでは日本という「モンゴル相撲」は「ブフ」と呼ばれ、伝統の国技で、その起源は紀元前まで遡れるという。

中国でも古い歴史がある。『礼記』（周の末から漢時代までの礼に関する記録集）に「天子……力を角（きょ）

わしむ」とあるとか。

周の末といえは紀元前八世紀頃である。また『漢書』（九二年後漢の班固著）によれば、秦時代、相撲は角^{かく}とか角觥^{かくてい}（抵）などと書かれ始めたという。

日本では「角觥」の字は『古事記』（七十二年）にみられるとのことであるが、周知の物語は『日本書紀』（七二〇年）の記。「垂仁天皇六」に「當麻蹴速と野見宿禰とに^{すまひ}角力とらしむ」これが日本の相撲の発祥とされる。桜井市穴師の地でのことだ。

また「雄略天皇十四」には「采女を喚^めし集^{つど}へて、……相撲^{すまひと}らしむ」とある。垂仁天皇は四世紀、雄略天皇は五世紀頃の天皇とされる。

因みに「角」には「くらべる・あらそう」「撲」には「うつ・なぐる・うちたおす」の意味がある。角力と相撲のルーツは同一だろうか？

大相撲は江戸時代に始まるが、現在の大相撲興業は、財団法人日本相撲協会が主催している。協会設立は大正一四年（一九二五）で、その認可の行なうべき事業の一つに「相撲ヲ中心トスル体育ノ奨励指導」がある。

私は昭和二十年代、乳業会社に入社した。社は創立以来「食と健康への貢献」を使命としていた。当時国技の相撲は殆ど唯一の国民的スポーツで、体育と健康は密接な関係があった。そんな背景を引継ぎ、赴任した昭和六一年七月の名古屋場所から「LL（ロングライフ）牛乳」を九重部屋に提供することとした。時恰も元横綱北の富士親方率いる九重部屋の全盛時代で、六一年・六二年・六三年・平成元年と九重部屋が名古屋で連続優勝した。六三年は横綱千代の富士が全勝優勝であった。加えて六二年

には二度目の優勝を果した北勝海が横綱になり、部屋は二人横綱を擁するに至った。

巷で噂が流れ、九重部屋が強いのは、あの牛乳の験げんのせいということで、一度是非他の部屋へも提供して欲しいとの申し出が社内から出た。断る訳にもいかなかった。

結果、平成二年名古屋場所の優勝は大島部屋の旭富士であった。あれから二十年、今も八角部屋の陣幕親方の名で毎場所新番付が送られてくる。律儀に脱帽。

皇女和宮「替え玉説」考

和宮は弘化三年（一八四六）仁孝天皇の第八皇女として誕生、孝明天皇の妹である。嘉永四年（一八五一）、有栖川宮熾たるひと仁親王と婚約。

幕末の外圧下、朝・幕分裂の打開策「公武合体」の具体化として、文久二年（一八六二）十四代将軍徳川家茂に降嫁した。慶応二年（一八六六）家茂が大阪で病没後は、静寛院宮と号し、江戸城の無抵抗開城はじめ、国の大事に尽力した。政略の犠牲になった悲劇の女性と評されたが、その結婚生活は短かったものの仲睦まじかったという。

明治十年（一八七七）箱根塔ノ沢「元湯」（現環翠楼）で病没。三十二歳であった。

死後、その数奇な運命から様々な風説がながれた。遺骨改葬の折、左手首の骨が見当たらなかった「毛髪の色が異っていた」「副葬品は湿板写真とおぼしきガラス板の他はなにもなかった」「箱根山中

自殺説」など喧喧諤諤。極め付けは有吉佐和子著の小説『和宮様御留』。「あとがき」に高田村名主新倉家婦人による伝承話として「和宮様は私の家の蔵で縊死なすったのです。御身代りに立ったのは私の大伯母でした。増上寺のお墓に納っているのは和宮様ではありません。（中略）板橋本陣で入れかわったのです」と書いています。

和宮の江戸下向は、文久元年十月二十日京都出発、中山道を二十五日間の日程で十一月十五日江戸着、九段清水邸に入られた。

問題の替え玉説、中山道最後の板橋宿についてみると、本陣は中宿飯田新左衛門家、脇本陣は中宿飯田宇兵衛家、平尾宿豊田市右衛門家、上宿板橋市左衛門家が夫々勤めていた。

和宮下向の折は、江戸入府前日の文久元年十一月十四日、和宮の行列は縁切榎を避け、回り道をして中宿脇本陣に入った。本陣「飯田新左衛門家」と中宿脇本陣「飯田宇兵衛家」は本家と分家の関係であり、この時は由あって、一晚を中宿脇本陣を本陣と見立てて過ごしたのであった。

「和宮替玉説」の「板橋本陣で入れかわったのです」について知己の当宇兵衛家に問うたところ、一笑に付された。

平成十五年九月二日付け朝日新聞「秘中の秘」欄に、歴史学者氏家幹人氏が「明治四十一年、麴町坂川牛乳店（明治三年東京最初の牛乳搾取業）番頭から聴取」の大奥に奉公していた老女の話を書いている。

『將軍家茂が江戸城で初めて和宮様と対面されたとき、家茂はびっくり仰天された。宮様は万事「京都式」で、お顔に剃刀を当てたことがなく、「毛むくじゃら」に見えたから…』 氏家氏は「鳥肌が立

つほど面白い秘話」と言っている。

ところで、司馬遼太郎の『峠』には長岡藩家老河井継之助の最後に立会った寅太、後に阪神電鉄を設立した外山脩造とやましゅうぞうの話がしばしば出てくるが、その外山家には次のようなエピソードがある。

越州古志郡上北谷村大字小貫こつなぎ（現長岡市）の外山家の祖先は京都の「日野氏」であるとされ、寅太は十三代。現代に生きた十七代貞ただ（大正七年生れ、平成十六年没。）は日野家の京都風を継承し、嫁すまで「毛深い娘」で過ごしていたという。とするとこの老女の話は信憑性が高く、「替え玉」説は無理を物詰っている。

ロシアに眠る幕府の大砲

『ロシアに眠る幕府の大砲 江戸後期の紛争略奪品』平成二十二年九月六日付朝日新聞記事の見出しである。サント・ペテルブルクの砲兵博物館で大砲二門を確認、と。

そのうちの二門には、戦国時代九州で名を馳せた大友宗麟を示す「FRCO」（洗礼名フランシスコの图案化）の刻印があったという。この砲は宗麟がポルトガル人を通じ、天正四年（一五七六）に、日本で初めて輸入した二門の大砲のうちの一つ「フランキ（ヨーロッパ人の異称Ⅱ大砲）砲」。「国崩し」の異名で人々を震撼させた新兵器であった。

事実この大砲の威力で、宗麟は宿敵島津義久に追い詰められた大友最後の臼杵城籠城戦（天正十四

年）を耐え抜いたのである。

大砲のその後の所在については、諸説があったが、それがロシアにあったとは！

宗麟輸入のもう一門は、廃藩置県時に国に献上され、現在靖国神社の「遊就館」に展示されているという。

宗麟と大砲と言えば、横光利一の小説『旅愁』を思い出す。作者の分身、主人公八代は「九州の先祖の城はカソリックの大友宗麟に、日本で最初に用いられた国崩しと呼ばれた大砲のために滅ばされた」と記している。本人はこの言い伝えを信じていたようだが、史実は、利一の父の出目は宇佐市赤尾、当光岡城主の赤尾氏は大友方で戦っており、話は逆だったようだ。ことモチーフにかかわること、読者は作品の『旅愁』と相対すべきものであろう。

ロシア収蔵の他の一門は、日本の記録では「さはりの大ハラカン」と呼ばれた、豊臣秀吉の軍が朝鮮から大坂城に持ち帰ったと伝わるものとのこと。大坂夏の陣（元和元年）では城が焼失したことや、「さはり（胡銅器、銅を主とした黄白色の合金）の大ハラカン（子母炮）」のハラカンは広義ではフランキに含まれるものの、用語としては。江戸末期に外国から渡来した火砲」を指すことから、その足跡を知りたいもの。

また、「日本の記録」とは……。

文化元年（一八〇四）ロシア皇帝アレクサンドル一世の使節レザノフが長崎に来航、通商を求めたが幕府に拒否される。報復としてロシア船は文化三年に樺太の日本側拠点、更に翌年には択捉島・樺太・利尻島を襲撃した。この「文化露寇」の折、利尻で幕府船から砲が奪われたとの記録を指す。

日本は寛永十六年（一六二九）以降、鎖国体制下にあり、当事件は平和を楽しんでいた日本人への最初のゆさぶりであった。

一方、ロシアは、一六一三年にロマノフ朝が成立（一六一七）、ピョートル大帝（在位一六八二～一七二五）やエカテリーナ大帝（一七六二～九六）始め歴代皇帝は国勢伸長、領土拡大に努めた。東進南下である。中でも一六六一年中国全土を統一した清国との国境画定は大問題であった。主な条約として、一六八九年ネルチンスク条約、一七二七年キャフタ条約、一八五八年愛琿条約、八一年伊犁条約が挙げられる。

そして一九〇三年（明治三六）の満州占領である。日本とは先の露寇事件、一八五四年（安政元）日露和親条約、六一年（文化三）軍艦ポサドニツク号対馬基地強行建設事件、七五年（明治八）樺太・千島交換条約、九四年日清戦争、九五年の三国干渉、そして一九〇四年日露戦争へと続く。

ところで、一昨年ロシアは北朝鮮北東部の清津港使用权を取得した。「ロシアの南下は地政的本能」と『坂の上の雲』はいう。

版画「平家一門武者絵」を読む

「平家一門武者絵」と自称の版画（縦37センチ×横25センチ）を所蔵している。本刷り物で「五風亭貞虎画」銘がある。

貞虎は、江戸絵系歌川派、貞国（三代豊国）門下で、作画期は文政・天保（一八一八～四三）頃である。絵双紙挿絵・花鳥画・美人画―「東都七福詣」の美人画シリーズなどが知られている。版元は享保からの出版書肆「蔦屋吉蔵板」・「極」印がある。

「武者絵」は天保末頃から出現するが、「天保改革（天保一二）で演劇界の「役者絵」・遊里の「美人画」が制約されると、折からの旅行ブーム・読書ブームと相俟って、「風景画」と共に人気が集まった。

「平家一門武者絵」の人物は八名。

構図は、右列上から小松内大臣重盛・無三四守知章・新中納言知盛

中列―安德天皇・二位禪尼・建礼門院

左列―内大臣宗盛・能登守教経

平重盛（一二三八～七九）清盛の嫡男。一門随一の器量人で鹿ヶ谷事件の折、父を諫めた。健康を害し、清盛が薦めた医療も断り出家後没。画では烏帽子に鎧を脱いだ草摺姿で全開の日の丸鉄扇を持つ。

平知章（一一六九～八四）重盛の弟知盛の子。一の谷の合戦で父の窮地を教い、自らは討死。享年十六歳。画では甲冑に身を固め、左脇下に弓搔い込みの姿。

平知盛（一一五二～八五）清盛の四男。兄宗盛の片腕として一門を指揮、壇ノ浦の戦い（元暦二＝文治元～一一八五）年三月二十四日）では「見るべき程の事は見つ」と従容として入水。画では引立烏帽子に鎧姿で大長刀を抜く。

安德天皇（一一七八～八五）高倉天皇と清盛の娘徳子の皇子。言仁親王。一年三か月で即位。壇ノ浦で入水。享年八歳。画では垂纓姿で二位尼に捧げ抱かれている。

平時子（一一二六～八五）清盛の妻。二位尼。壇ノ浦で孫の安徳天皇を抱き、宝剣を持って入水と伝承。画は天皇を左手で高く抱き上げ、御高祖頭巾姿で微笑。

平徳子（一一五五～一二一三）清盛と時子の娘。建礼門院。十七歳の時、六歳年下の高倉天皇の後となる。壇ノ浦で入水したが源氏方に救われ、三十一歳で出家。寂光院で一門の菩提を弔いつつ没。画では中央で全開の扇を頭上に翳し、鳳凰柄の着物姿で帝を仰ぎ見て微笑。

平宗盛（一一四七～八五）清盛の三男。重盛没後平家の総領。壇ノ浦で子の清宗共々生捕られ、後日さらし首に。画では鍬形冑に大鎧、二、三分開きの鉄扇姿。

平教経（一一六〇～八五）壇ノ浦では義経を追い詰めたが逃げられ、源氏方の安芸兄弟を両脇に入水。享年二十六歳。画では引立烏帽子鉢巻姿で弓を立て見得を切る。

この集合画は平家一門の最絶頂時「安徳天皇の誕生」の喜びを描いたもの。二位尼と建礼門院の微笑がそれを物語っている。そして一方で天皇誕生の治承二年十一月から僅かの翌年五月に病を得て出家、七月に没した重盛も登場させている。以後一門は滅亡の道を辿ることとなる。短い華やかさの裏に隠された悲劇『平家物語』の主題「諸行無常・盛者^{しょうじや}必衰」が、一門から選ばれた八名の「生と死」に凝縮されている『平家一門武者絵』。

そこには更に江戸庶民の権力者への風刺心、惨死、憤死、夭死した平家の公達への哀憐の情（清盛を除く）などを感じるのである。 筆者所蔵の版画『平家一門武者絵』を表紙背景に使用。

越後国・佐渡国「一宮」考

新潟県には「一宮」が三杜ある。越後国の弥彦神社と居多神社^{こた}、佐渡国の度津神社^{わたつ}である。

昭和一桁世代は「一番始めは一宮」の数え歌を歌い、地城神社に詣でて、国家神道絶対の青少年期を過ごした。一宮は全国六十七方国、九十六杜。

弥彦神社は西蒲原郡弥彦村にあり、祭神は天香山命^{あまのかぐやまのみこと}。地元では「おやひこさん」と親しまれ、

神体山も万葉の昔から弥彦山と呼ばれていた。が、弥彦山の主峰は神剣峰^{みつるぎみね}（六三四^{トール}）。古来日本海を航行する船の目印で、海の守護神として崇敬された。諸説あるが、人々は神体山の人格神に海の神おやひこ（大屋彦命）を当てたのだろう。

大屋彦命（別^{いたけるのみこと}名五十猛命）は素盞鳴尊と櫛稲田姫の子で、新羅から樹木をもたらし、造船技術を教えた海上安全の海神^{わたつみ}。天香山命（別^{たかくらじ}名高倉下）は五十猛命の弟饒速日命（別^{にぎはやひのみこと}名天火明命）と天道日女^{あまじひめのみこと}命の子で、越後国の開拓神。野積の浜（現長岡市）に上陸し、地元民に漁労、稲作などを教え、弥彦山に祀られたという。この社祭神の社撰については、江戸初期の神道家橋三喜（一六三五～一七〇四）が係っている可能性が高い。神体山の神剣峰と高倉下の靈剣^{ふつのみたま}部^{ふつのみたま}（神武天皇はこの靈剣で国土を平定したという神話）とが継がったことだろう。当時の弥彦神社は橘家神道を信奉していたことから十分考えられる。

祭神の社撰といえ、度津神社祭神の五十猛命、配祀として妹の大屋津姫命と抓津姫命^{つまつ}を決定したのは橘三喜といわれている。

度津神社は佐渡市羽茂町にあるが、かつては海岸寄りにあったという。当社はその名「度」^{わた}が全てを語っている。「わたし」は朝鮮語のPATAと同源で、「海」^{わたつみ}の意。海神や山祇^{やまつみ}は、日本民族の自然に対する目に見えない神の働きへの崇拜を示す原形であり、佐渡の他にも要所に海神が祀られている。日本列島は海流に囲まれている。黒潮は南西諸島の北で太平洋側の本流と東シナ海北上の支流に分れ、その支流は更に五島列島附近で東鮮暖流と対馬海流に分かれる。この対馬海流は対馬海峡、隠岐海峡、能登半島、佐渡ヶ島^{わたつみ}を通じて津軽海峡にいたる。その道筋に^{わたつみ}対馬海神社、隠岐国一宮由良比女神社（元名・和多須神^{わたすかみ}）が鎮座している。

又列島の日本海側は古代日本の表玄関で、佐渡島には「^{みしはせのひと}肅慎人」の漂着（欽明紀）、「渤海国使の来島」（聖武紀）などが珍しくなかった。日本海は沿海州、中国東北地区、朝鮮半島、日本列島の人物・文化的交流の共通の内海で、海路であった。

居多神社は上越市五智にあるが、慶応二年の地変までは居多ヶ浜にあった。当社の本来の社名は氣多で、本宮は羽咋市の能登一宮氣多大社。その主祭神は大己貴命である。

上代「越の国」は一国であったが、畿内勢力が及ぶと、前・中・後に分割され、更に養老二年（七一八）に越中国を割って能登国を分国、氣多大社は能登一宮になった。各国は大社から勧請、氣多神社を称するものは越中国をはじめ数社に及ぶことになる。抑々氣多大社は大国主命が出雲を出て因幡の氣

多岬經由で能登に渡ったので氣多の杜名になったという。かくの如く日本海側、山陰道八ヶ国、北陸道七ヶ国の祭神は出雲を元とする国つ神系と更に付言すれば朝鮮からの渡来神とで占められている。今後の発掘への期待も籠め、日本海文化は古代史の宝庫である。

古代日本海文化の再認識

― 潟湖連合勢力と邪馬台国

日本海は大陸・朝鮮半島と日本列島の間の内海で、日本海沿岸は往古から日本の表玄関であった。大陸の先進文化に接しつつ大和朝廷は四世紀半ばまでに成立したといわれるが「壹与、西晋へ遣使（二六六年）」以後の百年余は日本史の空白とされている。

戦後多くの歴史家が、日本海地域にもしも記紀などが語る壮大な物語が存在したとすれば、相應の遺跡があつて然るべきとしてきた。

ところが島根県で、昭和五九年（一九八四）荒神谷（斐川町）から多数の銅剣などが、平成八年（一九九六）加茂町岩倉（雲南市）から多数の銅鐸が発見され、古代日本海文化の再評価が改めて迫られることとなった。

また前後して弥生中期末遺跡妻木晩田（大山町）、むきばんだ青谷上寺地（鳥取市）あおやかみじちの山陰二大弥生集落の発掘も進んだ。この両集落はともに交易上重要な潟湖（古代の天然の良港）として繁栄したことも分かつ

た。これらの新発見を機に、山陰地方特異の「四隅突出型墳丘墓」が政治勢力の存在と結びつけて論じられることとなった。「西谷墳墓群」(出雲市)や「荒島墳墓群」(安来市)などにみられるこの墓制は、越の国まで拡がっていた。

さらに、平成一二年(二〇〇〇)の出雲大杜境内での「古代大杜御本殿心御柱」発見は謎の空中神殿の实在を証明するものであった。

相次ぐ諸発見から浮上したのが、日本海沿岸に続く潟湖の存在であった。潟湖は沿岸を西から東上する対馬海流と冬期のシベリア風の手食作用により造り出された潟で、古代の潟湖は航海安全の守護神の座す聖地で、その跡地は神社や古墳などの形で多数現存している。潟湖跡の神社などを西から列記すると、

出雲国Ⅱ 稲佐の浜・出雲大杜(出雲市)

千酌湾・爾佐神社(松江市)

伯耆・因幡国Ⅱ 妻木晩田遺跡・妻木壹宮神社

波波伎(伯耆)神社(倉吉市)

青谷上寺地遺跡(鳥取市青谷町)

白兔神社(鳥取市白兔)

現鳥取港(千代川河口)・山陰海岸国立公園

但馬国Ⅱ 現津居山港(円山川河口)、上流に城崎町・豊岡市・但馬一宮出石神社(兵庫県出石郡出石町宮内)

丹後・丹波国Ⅱ現久美浜湾、

網野町（古浅茂川湖）・網野銚子山古墳

丹後町（古竹野湖）・神明山古墳

奥丹後半島を回り若狭湾へ。

宮津港・丹後国一宮籠神社（宮津市）

栗田湾・由良川河口

舞鶴湾

若狭・越前国Ⅱ日本海の海岸線は若狭国定公園を経て、能登半島の根元の敦賀で、東西性から南北性に急変する。これは古代の渡来人や海人にとって重要な地勢であった。古代敦賀には角鹿津（潟湖）があり海上交通の要所で、航海の守護神氣比大神が鎮座していた。

後世、軍神・国家の守護神、保食神うけもちのかみの神霊も加わった元官幣大社氣比神宮である。

ところで、改めて『魏志倭人伝』をみると、はじめに、「倭に至るには、海岸に循って水行し」とある。文中「投馬国に至る水行二十日」「女王の都する所、水行十日陸行一月」の水行は、北九州を発ち、日本海沿岸を潟湖に循って但馬国円山川河口に寄港し、若狭湾に至り、上陸したことを物語っていると解釈出来る。

弥生時代、日本海沿岸部に連なる潟湖集落同士が連合して一大勢力となり、王国を形成、さらにこの強大な勢力が大和地方に及んでいた。そしてその中心が丹後の籠神社であった。

その歴史は籠神社の神社名「元国幣中杜・丹後国一宮元伊勢籠神社」、主祭神「天火明命・諡号天照

国照彦天火明櫛甕玉饒速日命」社宝『海部氏系図（昭和五一年国宝指定）』附『海部氏勘注系図』を精査することにより隠された真実に迫ることが出来る。

丹後国一宮元伊勢籠神社^{この}

― 神社名の謎 ―

籠神社は京都府宮津市大垣。日本海側の若狭湾西南部奥に天橋立を控えて座している。戦前の神社数は大神宮から鎮守の杜まで日本全国一一万社を数えた。現在の神社本庁傘下は約七万九千社という。

その中で社の呼称最多なのが籠神社。「籠^{この}大神御由緒」に記された社名を列記すると「丹後一宮元伊勢籠神社―日本三景天橋立―」をはじめとして―お伊勢さまのふるさと―元伊勢籠神社。本宮籠神社「別称」籠宮大社・元伊勢大神宮・伊勢根本丹後一宮・一宮大神宮。奥宮真名井神社「別称」豊受大神宮・比沼真名井・外宮元宮・元伊勢大元宮。更にヨサの宮（吉佐宮）、山陰道一之大社、元伊勢、籠宮、元伊勢の社、丹後国一之宮、籠名神社、元伊勢宮、元伊勢丹後国吉佐宮がある。

この他にも、こもり神社、内宮元宮、籠宮大明神、籠宮大権現、丹後国総社、匏^{よさのみや}宮、与佐宮、与謝宮、伊勢の外宮元宮の呼称がある。当社が古代からいかに変遷する歴史の荒波を乗り切って来たかを窺い知る証左であろう。

その社歴を神社名から探ると、まず「丹後国」。往古、丹後（たにはのみちのしり）は丹波の一部であった。「丹波―タンバ」は「タニハ―田庭」の転で、水稻の渡来（弥生時代のはじまり）を偲ばせる言葉である。大陸に日本海という内海で繋がる山陰地方は地政学的に伝来の大陸文化を吸収し、稲作による農耕社会の発展と潟湖による連携力で、古代日本の最強勢力になっていった。一方、四世紀前半までに政治・軍事力をもった大和朝廷は丹波を取り込もうと手段をつくした。伝承によれば武力では崇神天皇の時に四道將軍（丹波道主命）の派遣、次いで懷柔策として開化天皇や垂仁天皇の妃は丹波の国からとの婚姻政策、更には「神頼み」と丹波の五穀農耕の祖神である豊受大神を天皇家祭神天照大神の相手神として雄略天皇の二二年（四七八）伊勢に移し外宮とした。それでもなお不安が残るとして元明天皇の和銅六年（七二三）大丹波国から五郡を分けて丹後国をつくらせ、強大国を二分し、漸く弱体化の目的を果たした。

「二宮」は旧丹波国を二分、丹後国が出来たことから、後世各々の国に一宮が出来た。丹波国一宮出雲大神宮（亀岡市千歳町無番地）と丹後国一宮籠神社である。序でながら出雲大神宮は和銅年中（七〇八―七一四年）出雲国杵築（出雲大社）に大国主を遷したので俗称「元出雲」と言われている。

「一宮」とは「各国の由緒があり、信仰の篤いその国第一の神社」のことで、日本全国六七ヶ国、九六社あるといわれる。尚一宮制が何時、何のために、どのように成立したかは不明であるが、初見は康和五年（一一〇三）伯耆国一宮倭文神社の出土品に、である。

「元伊勢」については改めて丹波の地名由来話を記す必要がある。

『丹後国風土記』（残欠）によれば、豊受大神（食物を主宰する神）が伊去奈子嶽、現磯砂山に天降り、

真名井を掘り、水田を拓き稲作をしたところ、大變立派に稔ったので「あなにえし田庭―タニハ」といったのが丹波に。当地に豊受大神を祀ったのが奥宮・与佐宮である。この丹波の土地神の豊受大神を大和の地に遷するため、三輪山麓に祀られていた皇室祖先神の神霊を杖に宿らせ倭姫命が、此地に四年間遷座するなどの末、御饌津神^{みけつかみ}として伊勢度会郡^{わたらい}の山田原に祭祀し外宮とした。かくして天照大神が主祭神の内宮と併せて神宮が誕生する。籠神社が元伊勢といわれる所以である。

「籠神社」^{こもり}の社名は天照・豊受両大神が伊勢に遷した後、天孫彦火^{ひこほあかり}明命^{みこと}を主祭神として「与佐宮」を改めたもので、大化改新（六四五年）後のことという。与佐宮（匏宮よさのみや）の社名の由来は奥宮に偶生育していた天ノヨサヅラ（瓢箪の誉め言葉）に御神水を入れてお供えをしたとの説話によるものという。又籠神社の名称起源については、『御由緒』に御祭神彦火明命が籠船^{かごふね}（飾り船）に乗って龍宮に行った故事に由来するとあるが、このお伽話は預りおくことと致したい。しからば、「籠神社」^{こもり}とは。

参籠^{さんろう}「（オ）コモリ」は神社に止宿して祈願することで、「コムル」は精進（心身を浄め行いを慎むこと）の形である。「コムルコト」は「まつりの本体」なのである。勿論祈願は自然（風・雨・旱魃）に弱い稲に対する目に見えないカミの働きへの崇拜であった。

米（コメ）の語源は稲の神のまつりに関係してコムル・コムル（コムから派生の自動詞）の意だという。こもり神社は米の神社。丹波・元伊勢・籠の総てが稲作のことであった。

尚稲作の丹波への伝来は、弥生中期初頭、朝鮮半島南部からの渡来人によって齎されたと推測しているのであるが……。

「ハシからハシ」のはなし

物心がついて以来二六時中世話になり、気にかかっていた「名字」。

日本の名字は約三〇万あり、平安末期・一二世紀末頃、武士が領地名を名乗ったのに起源があると言
い、多くが地名に係りがあるようだ。

改めて「諸橋（もろはし）」をみると、「諸橋（モロハシ）」の地名は全国に一ヶ所しかない。能登半島、
七尾湾の北側に位置する石川県鳳至（ふげし）郡穴水（あなみず）町に、昭和三〇年三月一〇日編入の「諸
橋村」である。

諸文書によると、「諸橋」の地名の由来については、「諸恥（モロハジ）」説、「二橋（モロハシ）」説等
があるが、定説は「諸橋川河口左岸の諸橋稻荷社背後の縁山（えんやま）先端上の三基の諸橋（前波）古
墳（六世紀中葉から七世紀初頭の首長墓）から海岸の龍燈崎まで「モロ」（古代地名でモロは朝鮮語の
モリ（杜）の転化で神を祭る神域や古墳の石室の意とも）から崎の先端「ハシ」までから生じた「モロハ
シ」としている。

「モロ」が神の依代としての「杜」に由来することに異論はないが「ハシ」については？

漢字「ハシ」を列挙すると「端」はじめ（端緒）、はじ（辺端）。「橋」橋架。「階」きざはし。「梯」は
しご（梯子）。「箸」（筴）食と口の間（ハシ）を渡す意、或は食物などを挟むからの意か。「觜」（嘴）。「間」
ハシからハジの間。「柱」らは助詞。

また「ハシ」に係りがある言語としては「崖」（ハケ）谷田の縁の丘の端、「稻架」（ハサ）稻かけ、挟む意、「挟間」（ハザマ）峡谷、「鋏」（ハサミ）挟むの名詞化、「舳」（ハシケ）端舟の意、「始・初」（ハジメ）始めるの名詞化、「走る」（ハシル）はじまるの語頭音、「筈」（ハズ）弓の両端、弓筈（ゆはず）・矢の端の矢筈（やはず）などがあるようだ。

「ハシ」の中で日本人の生活に密着しているのは、「箸」アイヌ語はパスイである。箸食文化は米飯を主食とする日本、中国、台湾、朝鮮半島、ベトナムなど東アジアであるが、その中で日本人は箸だけで食事をするという独自の日本型箸食文化をつくりあげた。

箸文化の源流は中国の殷（前一六〇〇～前一〇二〇年）で、殷墟から儀式用に使われた青銅器の二本箸が発掘されている。

日本では古事記の「箸其の河より流れ下りき。是に須佐之男命（略）女の名は櫛名田比売と謂（まを）すと答言（まを）す。」が初見。「櫛」は「奇」「稲と箸」・「神霊に供食のための礼器としての箸をお供えすると共に願いごとをこめて川の神に供した」ことなどが分る。箸は神聖なものであった。「天の橋立」「箸立」（生れて百日目の「食い初め・箸ぎめ」など）に片鱗（一端・かたはし）が残っている。

「諸橋」の初見は、承久三年（一二二二）九月六日「能登国公田々数目論」の鳳至郡の「諸橋保」で、次いで『吾妻鏡』建長二年（一二五二）五月廿七日条に、鎌倉幕府執権北条時頼の嫡男時宗出産に際し、祈祷の賞として北条氏から鶴岡八幡宮若宮別当隆弁に「諸橋保」が与えられた旨記されている。初見から諸端（モロハシ）、諸間（モロハシ）でなく「諸橋」であった。

ところで、沖縄と日本本土は民族構成要素の言語・生活文化・信仰・人種など根元は全く同一である

が、言語についてみると今から一五〇〇年前頃、首里方言と京都方言は分離したという。大和朝廷成立の前後である。

『日本人の魂の原郷沖縄久高島』の大祭、「イザイホー」に「七ツ橋渡り」という儀式がある。「あの世とこの世が接する場所として七ツ橋」と称する生木で作った梯子のような形の橋が地表に置く形で架けられている」とのこと。祭祀は四日続くが、三日目の「朱つけとスジつけ」儀式が終った喜びを神歌（テイルル）と円舞で表現するが、その神歌のなかに「イティティバシラ（五ツ橋）ナナティバシラ（七ツ橋）」の歌詞があり「五ツ、七ツ橋」の「橋」は「バシラ」と歌われている。本土方言「柱」（ハシラ）の「ラ」は助辞、または接尾語として「神や貴人などを敬って数える時にいう語」である。首里方言に残る「橋Ⅱ柱（はしら）」の使い方古人は古墳の地名を「諸橋」とつけたのではないであろうか。

海舟の父・旗本勝小吉の出目と生涯

幕末・明治の大政治家、勝義邦（通称麟太郎・号海舟）の人物・業績については今更記すこともない程周知されている。

前坂俊之『世界が尊敬した日本人』によれば、山本七平は「日本最大の英雄で、全世界を通じて百年に一人も出ない天才」と激賞。明治四年に来日の米国人E・W・クラークは『カツ・アワー日本のビスマルク』のなかで「海舟の忍耐、勇氣、覚悟、指導者の注意深さは神に近い」とまで絶賛しているとい

う。

一方、その父小吉については「本所の旗本勝小吉は貧しい極道者」と紹介している。本人もまた自叙伝『夢酔独言』『幼少年のころ』で「おれほどの馬鹿な者は世の中にあんまり有るまいとおもう（中略）^{よくよく}能々不法もの、馬鹿者……。おれは妾の子で……。」「さらに「生涯をかえりみて」で「無法の馬鹿な事をして（中略）四十二になって、始めて人輪（倫）の道（中略）仁愛の道を少ししたら、是れ迄の所行がおそろしくなった。」と結語している。

小吉について、勝海舟生誕の地（現両国公園内・所在地墨田区両国四丁目二十五番）の区教育委員会記文は「勝海舟は、文政六年（一八一三）正月三十日、ここにあつた男谷精一郎の屋敷で生まれました。

父惟寅（小吉）は男谷忠恕（幕府勘定組頭）の三男で、文化五年（一八〇八）七歳のとき勝元良に養子入りし、文政二年に元良の娘のぶと結婚、男谷邸内に新居を構えました」と記す。補足すると、男谷精一郎は小吉の長兄旗本男谷彦四郎^{ひろたか}思孝の養子。旗本勝甚三郎元良（禄高四一石）没後勝家は祖母と孫娘（信・のぶ）だけだったので旗本男谷平蔵忠恕^{ただひろ}が二人を引き取っていた。海舟の父「勝小吉」は男谷忠恕の三男であつた男谷惟寅の養子後の名前。

ところで小吉の父男谷忠恕は、盲人では最上級の官名「検校」をもつ男谷検校の九男で、忠恕は父の検校に安永五年（一七七六）頃、直参の株を買ってもらつたようである。男谷家、勝家の繁栄の元は男谷検校にありといつて過言ではあるまい。

男谷検校は勝小吉の祖父・海舟の曾祖父で、本名山上銀一。元禄一四年（一七〇一）越後国刈羽郡長島村平沢（現柏崎市東長島）山上徳左衛門の七男に生まれた。一二、三歳の頃盲目となり、按摩の修業に励んだが、その秀才ぶりを同輩に妬まれ、些細な事件で盗人扱いされて父に勘当され、一本の杖を頼

りに江戸に出府した。江戸で更に鍼術を修業し、元文四年（一七三九）三八歳で七三段階があつた盲目最高官位の「検校」となつた。当初は米山検校といったが、後に男谷検校と改めた。優秀な鍼術と卓越した人柄で大名や上流階層に信頼を得て、金貸業で財をなした。而も本人は質素、儉約を守り、社会福祉、困窮者対策にも積極的な生涯を送り、故郷でも尊敬され、明和八年（一七七二）七〇歳で没した。小吉については前述の如く無頼の徒との世評が定着しているようであるが『夢酔独言』を精読すると若干修正すべきかと思う。

確かに小吉の幼少時から半生の行状は凄まじい。五歳で喧嘩相手に傷害を負わせ、七歳で喧嘩に負けて切腹騒ぎを起したのを始めとして、親父（男谷忠恕）と長兄（男谷彦四郎）以外に恐いものなしの我儘放題。幼少年期は家庭環境の成せる業があつたのであろう。ついには家人の金を盗んで上方へ向けて出奔する。一四歳の時であつた。約四ヶ月乞食をして食いつなぎ、途中大病をして人の情に救われたりの放浪生活の末に帰宅している。その後も乱れた生活は止まらなかった。

一七、八の頃、ふとしたきっかけで剣術を学び、喧嘩が他流試合に変わったことは、世間にはルールやマナーがあることを知ったはじまりだったようだ。

文政二年（一八一九）一八歳で、信のぶと所帯を持つが又々借金が増え、人生の壁に突き当たり、再度江戸を出奔、帰府するや父に座敷牢に入れられて反省、手習や読書に励む。

文政六年、長男麟太郎（海舟）が生まれ、小吉も人の子の親になる。自分勝手が通じないこの世の為しきた来りが分つてきた頃、老師から「怨を恩で返す人間になれ」との訓を得て実行に移す生活に変わる。二四歳の時であつた。以後、世間、家族の信頼を徐々に得るようになった。

文政一〇年の父平蔵の急逝にも大いに感ずるところがあつたのであろう。

ところで、小吉の人生での最大事件は、天保二年（一八三一）小吉三〇、海舟九歳の時。海舟が野犬に辜丸を噛まれ、重傷を負ったことである。小吉は息子海舟の平癒を祈り、金比羅（地元の語り伝えでは能勢妙見）に毎日水垢離みずごりをしたとのエピソードが今に伝わっている。とはいえ、小吉の三〇代は善悪交々の「三つ児の魂百まで」だったようで、相変らずの借金、喧嘩、放浪と不行跡は絶えず、兄彦四郎に厳しく諫められ、天保一〇年（一八三九）小吉三八歳（海舟一七歳）で隠居、夢酔を号とした。この年祖母が没し、翌年には兄彦四郎も病没。四〇歳になった小吉も大病を患う。四二歳、鶯谷に庵を結び、『夢酔独言』を著した。嘉永三年（一八五〇）小吉四九歳、波乱の生涯を閉じ、牛込赤城下清隆寺に葬らる。ときに海舟二八歳、蘭学と西洋兵学の私塾を開いた年であった。

翻って小吉の生涯をみると「子を見れば親がわかる」の譬喩に依るとすれば、海舟を知るクランクをして「彼以上にキリストの人格を備えた人を見たことがない」とまで言わしめた子の親小吉は「此の父有りて斯に此の子有り」だったと言えるのではあるまいか？

海舟が野犬にかまれ危篤になったのは、九歳の時である。

人間の能力形成には臨界期があるといわれる。能力別形成年齢は九歳で「感覚能力（五感）視・聴・味・嗅・触」は一〇〇パーセント、「運動能力」「情緒能力（喜怒哀楽の情）」「社会能力（対人関係）」「自主能力」は九〇パーセント【刷り込み】が出来上がるという。とすると海舟が犬にかまれた事件と小吉のその時の行動などは海舟の人間形成にかなりの影響を及ぼしたと窺い知るのである。それとも父小吉の存在そのものが、海舟の反面教師だったのであろうか。

中山道旧板橋宿歴史散策

―幕末・維新の三題雑感―

徳川家康（一五四二～一六一六）は、開府の一六〇三年（慶長八）に先立つ一六〇一年、軍事対応並びに政治目的から五街道の整備に着手した。日本橋を基点として、一定間隔ごとに宿場も設置された。最初に東海道、次に日光街道、三番目に奥州街道、四番目が古代からの東山道とうさんを整備した中山道で、その完成は一六九四年（元禄七）、全長約五四〇キロメートル、宿場数六十九。日本橋から第一の宿場が板橋宿で平尾宿・中宿・上宿に三分され、長さは約一・七キロメートル、三宿合せて本陣一・脇本陣三・旅籠四十五軒であった。

一、近藤勇・土方歳三之墓と松本順いさみ

旧板橋宿入口、現ＪＲ板橋駅東口に「新選組局長近藤勇昌宜・土方歳三義豊之墓と隊士供養塔」がある。近藤（一八三四～六八）は慶応四年、官軍に捕えられてここ板橋で斬首処刑され、土方（一八三五～六九）は明治二年箱館五稜郭で戦死した。（戊辰戦争終結）。

この墓碑は明治九年、隊士の一人永倉新八（本名長倉）が発起人となり、旧幕府の御典医であった松本順の協力を得て、造立された。

松本順（一八三二～一九〇七）は幕末・明治の著名な医師で、幕府と新政府両方の要人をつとめた。幕

府では奥医師・西洋医学所頭取・海陸軍医総長を、新政府では軍医監・初代軍医総監、後には貴族院議員・男爵になった人物である。その松本と新選組の取合せは一見奇異であるが、因縁があった。松本の人柄に心酔し「義兄弟になりたい」という近藤の申出を快諾し、これを機に松本は新選組の面倒見を惜しまなかった。更には戊辰戦争では幕府軍軍医として転戦、最後の仙台に至った時、土方に「勝算のない戦い、君は前途有用な人、ここより江戸へ帰れ」と助言されて松本は横浜へ戻った。松本は土方を恩人と感じていたのであろう。

ところで、松本順は日本の予防医学の先覚者としても知られている。幕府が長崎に設立した「海軍伝習所」に軍医として入所の折、オランダの軍医ポンペ（一八二九～一九〇八）に学んだものであろう。日本人がなすべき健康法として「牛乳の飲用と海水浴」を推奨した。明治三年、東京で最初の「牛乳搾取業」（牛乳販売店）をはじめた元旗本の坂川當晴は松本の伯父であつたし、日本最初の海水浴場が明治十八年、大磯に開設されたのも松本の尽力によるものである。

一、加賀藩下屋敷と由利公正きみまさ

参勤交代制度で、江戸に大名とその家族・家臣一統が集まることとなり、諸大名に將軍から屋敷が下賜された。

加賀藩前田家（百二万五千石）の場合、一六七九年（延宝七）、四代將軍家綱から五代藩主綱紀に板橋宿平尾六万坪を賜った。藩は一六八三年（天和三）、ここ別邸（平尾邸）を下屋敷（別荘）とした。その後敷地は二十一万七千坪となり、中に石神井川が流れ、池泉回遊式庭園（金沢兼六園の約七倍）が造られた。

維新後の明治九年、下屋敷跡地（現加賀町一帯）に由利公正が牧場を開いた。由利は消費地都市部での「牛乳搾取業」（乳牛飼育）は衛生上問題があるとして「下板橋宿金沢藩上地[・]の内開墾地を除く外当分拝借」を申し出て府から約十萬坪を借用し、乳牛牧場にした。この由利牧場を見習い石神井川流域には多くの牧場が出来、昭和五十年頃まで続いていた。

由利公正（一八二九～一九〇九）は福井藩士。藩主松平春岳（松平慶永^{よしなが}の号、一八二八～九〇）を支えた人で、明治四年、京橋木挽町で牛乳搾取業をはじめた酪農乳業の先駆者の一人である。また東京府知事として火災に強い銀座の礎を築いたことでも知られ、明治政府の参与となつて財政をつかさどった他さまざまな分野で活躍した。子爵。

一、皇女和宮の下向と板橋宿での献立

和宮（一八四六～七七）は仁孝天皇の第八皇女で孝明天皇の妹、幕末の外圧下、公武合体のため、一八六二年（文久二十四代將軍家茂^{いえもち}（一八四六～六六）に降嫁した。花嫁行列は一八六一年（文久元）十月二十日朝に京都を出発した。警固十二藩の武士など約八千人・馬三百頭、「この世はじまつて以来の大行列」であつたと記されている。

一行は江戸入府前日の十一月十四日板橋宿中宿脇本陣（名主飯田本家Ⅱ現飯田侃家）に宿泊した。またま平成九年に飯田家古文書（板橋区登録有形文化財）多数が発見され、その中に和宮宿泊当日と翌日の献立書も含まれていた。「御間ノ物用・御夜食用・明朝御膳用・御弁当用・御次献立」などである。和宮下向最後の食事であつた十一月十五日の「御弁当用」献立を列記すると

一、鯛(目下壺尺二寸)二枚 一、同(同尺)壺枚(大) 一、鱸(六十目程七本 一、諸子(大)百疋 一、
烏賊(六寸)拾盃 一、蠟 壺升 一、玉子 六十 一、房大根 三房 一、若め(大)貳把 一、小梅
干 百 一、黄芋(大)七本 一、河茸(大)三拾本 一、松露 百 一、菓子昆布 五枚 一、粒椎茸
六合 一、紅はしかみ 拾本 一、菜 四百目 一、栗(大)五ツ 一、酢 壺斗 一、木割 貳枚 一、
花瓜 貳本 一、糠漬大根 壺本

右御膳所入用品々

の如くで、牛乳・乳製品類は皆無である。

日本人がはじめて牛乳を知ったのは六世紀中葉で欽明天皇のとき、百濟からである。また牛乳を最初に飲用した人は孝徳天皇で、大化の改新(六四五年)頃であったと伝承されている。飛鳥時代のことである。爾来、奈良・平安時代は、朝廷や貴族社会では牛乳や乳製品「酥」などが食されたが、平安末期の戦乱以降、乳食の文化は消滅していった。

日本に牛乳利用の食文化が再興するのは幕末・明治維新からであった。

徳川將軍家は一七九二年(寛政四)に安房嶺岡(現千葉県丸山町)の所領牧場から白牛を江戸雉子橋外(現竹橋)御厩に移した。將軍家では八代吉宗の時から牛乳を飲用していたという。朝廷ではこの風は途絶えていたが將軍家に嫁した和宮は牛乳を飲用したと思われる。幕末の江戸城大奥に奉仕していた老女が後日、坂川牛乳店の番頭に語ったという和宮についての逸話にそれとなく窺うことができる。また朝廷では明治四年の新聞に「(明治)天皇は毎日二回ずつ牛乳を飲まれる」旨の記事が掲載されたという。新政府挙げての文明開化の先兵、酪農乳業発展への期待と振興努力が偲ばれるのである。

(女子学生の社会進出・少子化・老齡化)

「就活生をもつ親」のセミナー資料

(株)明治・創立者相馬半治翁留書

慶応三年(一八六七)十月十四日十五代將軍徳川慶喜は「大政奉還」を上表、徳川家康が慶長八年(一六〇三)幕府を江戸に開いて二百六十五年間続いた徳川幕府による政治制度は消滅した。十二月九日朝廷は「王政復古」を宣言する。

翌四年七月江戸を「東京」と改称、九月八日一世一代年号「明治」と改元した。「聖人南面而聴天下、嚮明而治」の意であるという。

明治二年(一八六九)三月京都から東京へ「遷都」、この年は「戊辰戦争終結」、「版籍(版図戸籍)奉還」明治維新真つ只中であつた。

(株)明治の創立者相馬半治翁は明治二年七月八日(一八六九年八月十五日)尾張国丹羽郡犬山町で生まれた。

相馬半治翁ご子息故相馬成朗氏提供の「田中家(相馬家)累代譜」によれば「田中家八代々成瀬家(犬山城主)ニ仕へ犬山市出来町ニ住ミタリ 成瀬家方尾州藩ノ附家老タル関係上多クハ名古家城詰トナリ柳原中家敷(現二葉町)ニ住ミタリシモ廃藩後比米町、隅田町(現西区幅下)、下広井町(現中村区)等ニ転住セリ」とある。

続く「過去帳」(抜粋)は

初代 清林院春嶽光景居士 寛保三年(一七四三)三月二十二日没 物足父 名古屋市普光寺ニ葬ル
二代 心明院實参了性居士 宝暦十二年(一七六二)九月八日没 田中物足ハ藩主ノ信用厚ク公私ニ
ツキ活動シタル人ノ如シ 普光寺ニ葬ル 弟某出家シテ大龍寺五百羅漢ヲ作りタリトノ説アルモ詳
ナラズ

昭和十四年十月同寺住職多々良大機師ノ調書ニヨリ指月和尚ハ田中家出ニ確定ス

五代 孝徳院義庵道居士 明治三十二年(一八九九)二月二十八日没 眞左エ門長男いおり菴ノ三男半治
出テ盛岡藩相馬家(前下斗米家)ヲ相続ス

と記す。

福寿山大龍寺について補足すると、名古屋の「五百羅漢の寺」として有名で、千種区史跡散策路のポイントの一つの名刹である。黄檗宗で、三代藩主徳川綱誠つななりの命を受け享保十年(一七二五)喝伝和尚が建立、五百羅漢像は名古屋城築城時の犠牲者供養のために造られた。これらの由緒を語る小冊子『大龍寺略史―五百羅漢』は昭和十年相馬半治翁が来寺し「羅漢像造立の発願主で當山第四代の指月桂大和尚の生家田中家にゆかりがある」との申し出を佛縁として調査整理し発行(昭和十四年)したものと記されている。

翁の略歴についてはご自身の記述がある。「明治二年、(尾張)犬山藩士田中菴三男として生まれた私は、維新草創の際家庭不如意のうちに名古屋に育ち、明治十六年小学校教育を卒えず齡十五年にして小学校の助手となり、後、学力検定試験により小学校教師となり、十八年東京陸軍教団に入り下士官と

なった。ついで大将にでもならん希望を以て士官学校入学を願出しも、何故にや志願を拒否せられしため工業立身を決意、爾来独学自習に努め、兵役満期後において知人の好意により蔵前工業学校（東京高等工業学校Ⅱ現東京工業大学）に入学した。併し、学修中更に日清戦役に応召軍務に服したため除隊後卒業、同校助教教授拝命、後南部藩士相馬家を相続、越えて三十三年文部省より糖業研究のため欧米留学を命ぜられ、帰朝後同校教授となり、台湾総督府技師兼教授に転じ、三十九年官を辞して……」と。

翁の業績・略年譜

明治三十九年（一九〇六）十二月 明治製糖(株)創立（本社台南州曾文郡麻豆街麻豆四二九）専務取締役就任（大正四年社長 昭和十五年会長 十八年相談役）

大正五年（一九一六）十二月 大正製菓(株)設立（十三年九月明治製菓(株)と商号変更）

大正六年四月 房総煉乳(株)資本参加、昭和十年十二月極東煉乳(株)資本参加（十五年十二月明治乳業(株)設立）

大正八年六月 北海道製糖(株)設立（昭和十九年九月北海道興農工業(株)と商号変更 二十二年九月日本甜菜製糖(株)と商号変更）

大正九年十一月 (株)明治商店創立（昭和十七年六月明治商事(株)と商号変更）

昭和八年（一九三三） 明治護謨工業(有)設立（十二年六月昭和護謨(株)創立）

昭和十年 神津牧場（神津邦太郎氏明治二十年日本初の洋式牧場開設）所有二十年八月まで経営（群馬県甘楽郡下仁田町）

昭和十三年十月 山越鉄工場経営（二十三年三月明治機械(株)と改称）

昭和十六年 特殊製油(有)資本参加(二十一年九月明治油脂(株)と改称)

この他、外地では

製菓業―昭和十四年満州明治製菓(株)、十八年華北明治産業(株)・上海明治産業(株)設立

甜菜糖業―十一年樺太製糖(株)設立

乳業―十三年満州明治乳業(株)設立 他

特記事項

昭和十八年七月 財団法人相馬(犬山)郷土育英会設立

昭和二十年五月 米軍の空襲により芝伊皿子町(現港区三田)相馬本邸焼失

昭和二十一年一月七日 膵臓癌のため逝去 七十七才 一月十日明治製菓ビル講堂にて社葬 横浜

市鶴見区総持寺に葬らる。戒名興明院大鑑照徹大居士

昭和二十年の敗戦以降、政治・経済・社会は大混乱、激動のうちに昭和を駆け抜けて平成と移り変わるが、この間、日本の企業は中国の古典名言「創業は易く守成は難し」の七十年であつた。相馬翁創業の明治各社もまた栄枯盛衰例外ではなかった。

そして、平成二十一年(二〇〇九)明治の代表的企業である明治製菓(株)と明治乳業(株)は経営統合し、明治ホールディングス(株)として新出発、更に二十三年四月食品事業会社「(株)明治」と薬品事業会社「MeijiSeika ファルマ(株)」に再編成され経営統合効果を目指している。たまたま、菓子・乳製品の生産を統合した新工場は尾張(愛知県稲沢市)に建設の運びという。「明治」と「尾張」の奇しき絆は相馬翁の縁であろうか。

ところで、平成二十三年・二十四年の就活人気企業を昨今注目の理系女子でみるとトップは明治グループである。不況に強い食品大手のイメージからの選択と評価されている。

「食」を「腹」で選んだ戦後の二十世紀後半から、「口(舌)」で選んでいる現代であるが、「命は食にあり(中国古典『管子』)」の生命科学の中心に「食」が近未来の夢としてクローズアップされる前触れと感ずるのである。

「師・勝海舟と門弟・坂本龍馬」の幕末・維新

「幕末」を文字通りに「江戸(徳川)幕府の末期」と捉えると、広義には天保十二年(一八四二)に老中水野忠邦が始めた「天保の改革」からとみることも出来る。「天保の飢饉」(天保四・七年)や「大塩の乱」(天保八年)などの社会不安に対し幕府をはじめとして、諸藩も藩政改革に着手、藩政立て直しに成功した薩摩・長州・土佐藩は幕末の政局を動かすまでの力をつけた。一方幕府の改革は悉く失敗し、忠邦は天保十四年に失脚した。その結果、幕府の基本的権力である領知権・転封権の衰退を天下に露呈することとなった。

狭義では嘉永六年(一八五三)六月三日のペリー浦賀来航後を言い、開港などの外圧についての幕府の対応をめぐるおきた開国・開港論と鎖国・攘夷論の対立が、公武合体論や尊王攘夷論、更には佐幕派对尊皇倒幕派と国を二分しての大事に至った。そしてこの難局の終止符が「明治維新」であった。

維新を極く狭義に捉えれば、江戸幕府が崩壊して天皇中心の新政府が成立した慶応三年（一八六七）十月十四日、第十五代將軍徳川慶喜が倒幕を避けるため朝廷に「大政奉還」を申し出て受理された日ということであろう。この日を画期として日本は近代国家をめざして突き進むこととなった。

この国家的大業に大きく貢献したのが、勝海舟と坂本龍馬の師弟であった。

坂本龍馬は天保六年（一八三五）十一月十五日、土佐藩郷士（下級武士）とはいえ、裕福であった坂本八平直足と妻・幸の次男として誕生した。長男権平は龍馬より二十一歳年上、それに姉三人（長女千鶴の夫高松順蔵は二十八歳年長）家族の末子であった。幼少時は気弱だったが、十二歳の時生母が死去、以後は三歳年上の姉・乙女が武芸・学問をスパルタ式に教えたという。また十四歳で入門した日根野弁治剣術道場での勉強は嘉永六年（一八五三）、十九歳で剣術修業のため江戸に出るきっかけとなった。

人間の社会能力（対人関係・自主能力）の臨界期は十五歳といわれるが、人間龍馬の最大財産「卓越した愛される人柄」はこの環境で育はぐくまれたものといつてよいであろう。

はじめて江戸に出て、千葉定吉道場（小千葉道場）に入門した直後の六月に、黒船来航の大事件があり、龍馬は六月から九月頃まで品川の土佐藩下屋敷警護にあたった。龍馬が直に「世界」と向合った最初で、家族宛手紙に「戦いになったら異国人の首を打ち取って帰国します」と語っている。この頃の龍馬は純朴で血気者の攘夷派青年であった。

文久二年（一八六二）龍馬二十八歳の時、前年加盟した土佐勤王党の首領武市半平太の密使として長州藩の久坂玄瑞と面談するが、その直後の三月二十四日、土佐藩を脱藩。八月に三度目の江戸入りを果し、千葉道場に身を寄せた。道場主・定吉の長男重太郎は十二月五日、自分が剣術師範をしている越前

藩藩主で幕府の政事総裁の要職にあった松平春嶽に龍馬を引合せた。初対面で龍馬を気に入った春嶽は、その才能を活かせる人物として、幕府軍艦奉行並の職にあった勝海舟に紹介状を認^{した}めてくれた。春嶽・海舟・土佐藩主山内容堂は「公儀政体論派」の仲間であった。十二月九日頃この紹介状をもち龍馬は勝を訪ねたという。

勝海舟は偶万延元年（一八六〇）二、三月に幕府により咸臨丸で渡米、三週間余サンフランシスコに滞在し、西洋文明を体験して来ていた。その説得力ある世界観を聴くに及び、龍馬は「黒船」以来の心の痼が霧散し、攘夷主義者から「日本の焦眉の急は、欧米列強の先進技術文明の摂取、そのためにはまず国が一丸となること」との開明主義者に変身する。師・勝海舟四十歳、門弟・坂本龍馬二十八歳であった。

師弟が第一に着手したのは、日本海軍創設のための「神戸海軍操練所」と海舟の私塾「神戸海軍塾」の設立であった。

文久三年（一八六三）四月二十三日、將軍徳川家茂より設立許可が下り、同時に私塾の開設も認められて幕府から年三千両の経費支給も承認されたが、運営にはなお不足であった。そのため五月、龍馬は福井藩に出向き、初対面からまだ半年も経っていない松平春嶽から千両の借入れをした。勿論背後には海舟がいてのことではあるが、龍馬の人柄を感じさせるエピソードである。春嶽は文政十一年（一八二八）生れ、龍馬より七歳年上であった。

龍馬は年長者との人間関係について、その頃姉乙女への手紙に「この頃は軍学者勝麟太郎大先生の門人になり、ことの外かわいがられ候……すこしエヘンに顔をし、ひそかにおり申し候」と自ら記して

いる。海舟は文政六年生れで龍馬より十二歳年上であつた。十月、龍馬は二十九歳で海軍塾塾頭となる。

ところが、その直前に「八月十八日の政変」があり、政情は一変していた。会津藩と薩摩藩が組み、倒幕派の長州勢を京都から追い落した事件である。更に翌元治元年（一八六四）五月に操練所が創設されるが、直後の六月におきた「池田屋事件」、続く七月の「禁門の変」に塾生が係っていたことで操練所は反体制派の拠点とみなされた。海舟には十月江戸帰還命令、十一月軍艦奉行罷免の沙汰が下り、元治二年三月十八日、海軍操練所は廃止となった。

海舟・龍馬の師弟はこの時点で、幕府要人と倒幕志士として別々に行動することとなった。この年の四月七日、年号は慶応と改まる。

しかし別れて以降の二人の関係こそが逆に幕末・維新を進展させたといえる。幕府の重臣の立場上その行動には自ら制約がある海舟に対し、自由に活動出来る龍馬は以心伝心、師の意を体して彼の知力を存分に発揮した。

幕末日本の最大出来事「薩長盟約」が慶応二年（一八六六）一月二十二日、龍馬の仲介で結ばれたのである。

対立していた薩摩と長州の両藩が、幕府の長州再征の直前に「幕府に対抗して協力すること」を約束したのであった。誰もが不可能としていた犬猿の仲の両藩のまさかの倒幕連合の成功は、龍馬の知恵と奔走に、幸運が重なったことであつた。

海舟の失脚で活躍の場を失っていた龍馬は海軍強化を策していた薩摩藩の小松帶刀や西郷隆盛ら首

脳の資金援助を受けて慶応元年（一八六五）五月、長崎に商業活動を主とする貿易会社「亀山社中」を立ち上げていたが、この組織を使って倒幕急先鋒の長州藩に幕府禁止の兵器を薩摩藩名義で調達、転売する放れ業で両藩を結び、信頼を深めていった。

偶薩長両藩は共々、列強の武力の脅威をさきの「戦争」で思い知らされていた。文久三年（一八六三）七月の「薩英戦争」と、元治元年（一八六四）八月の四国（英・仏・米・蘭）艦隊下関砲撃事件「下関戦争」である。

しかし、この「盟約」成立の陰には海舟の布石があった。元治元年八月の中旬頃、かの騒乱の最中に龍馬は海舟の改めての紹介で西郷隆盛に面会している。この時の印象を龍馬は海舟に「（隆盛は）少し叩けば少し響き、大きく叩けば大きく響く」との名評を残している。隆盛もまた「度量の大、龍馬に如くもの、未だかつて見ず。龍馬の度量や到底測るべからず」と評したという。この二人の相互信頼こそが、実は同盟成功を決めた最大要因であったといわれている。隆盛は文政十年（一八二七）生れ、龍馬の八歳年上であった。

「盟約」の一方の長州代表・桂小五郎（木戸孝允）は盟約成立後も薩摩への不信感が強く、二月五日仲介者龍馬に盟約履行の裏書を求め、竜馬は朱書した。難事の程が窺える話である。

龍馬が係った大業はもうひとつある。それは土佐藩の後藤象二郎を背後から動かして、武力倒幕路線の薩長勢に対し、内乱による列強介入の口実を与えない方策として考え出した、「船中八策」を原案とする「大政奉還」の奇策を実現させたことである。

龍馬から、象二郎、山内容堂を繋いで、徳川最後の將軍慶喜は慶応三年（一八六七）十月十四日明治天

皇に「大政奉還」を上奏、翌十五日勅許が下されたのであった。ここに徳川家康が慶長八年（一六〇三）江戸に開いた幕府は、無血で二百六十余年の幕を閉じた。

そして立役者坂本龍馬は「大政奉還」から一ヶ月後の十一月十五日、京都の近江屋で、陸援隊の中岡慎太郎と共に幕府付属の見廻組隊士らに暗殺された。享年三十三歳。

勝海舟の偉業「江戸城無血開城」は翌年の慶応四年四月十一日である。龍馬の「大政奉還」はその半年前であった。「常に列強を意識し、内戦を極力回避しつつ、幕藩体制を出来る限り穏便に終熄させ、国を一つにして近代化を急ぐこと」を理想とした海舟の「意を体した」行動に龍馬がいかに忠実に終始したかに驚くばかりである。「此の師有りて斯に此の門弟あり」であった。

幕末・維新の日本の進路は、師・勝海舟の知徳と門弟・坂本龍馬の知力（知恵と行動力）との結合の賜物であったといっても過言ではないであろう。

講演要旨

古代日本海沿岸の神々と 国宝『海部氏系図』

一 縄文のカミ

日本民族（言語・文化・宗教・人種）が形成されたのは、列島周辺を流れる潮流の賜物といっても過言ではない。

ベーリング海に発して南下する「親潮（千島海流）」や「東カラフト寒流」。南のフィリピン諸島から北上する太平洋最大の潮流「黒潮（日本海流）」。

日本海側では、日本海北隅に発する「リマン海流」、それに続く「沿海州寒流・北鮮寒流」。黒潮支流の「対馬海流」、「東鮮暖流」。

対馬暖流は更に「津軽暖流」、「宗谷暖流」に分岐した後、カラフト西岸に達する。

古代の小舟では大河の如き潮流の流れのままの人類であった。そんな古代の長い時間をかけて形成された民族の言語「日本語」は大陸北方系のウラル・アルタイ語族、南方系のマライ・ポリネシア語族、西方系のドラヴィダ語（タミル語）族などそれぞれのかかわりが云々される類をみない独自の言語となった。

そして「信仰」もまたである。「惟神（かむながら）の道」である。「自然に対する独自の感受性をもとに見えないカミの働きへの崇拜を育てた、素朴な儀礼に基づく民族宗教」で「自然はカミ」であった。古代の自然崇拜を今日に継承している「磐座・磐境・磯城・神奈備・神籬・禁足地」などに、自然の中に神をみて、これを祀った精神風土、日本文化の源流を知ることができる。

二 弥生の神々

紀元前四百年頃、数千年の文明をもつ中国は、春秋・戦国時代にあり、国々の興亡が繰り返られていた。春秋時代の前四七三年には呉が滅亡し、戦国時代半ばの前三三四年に粵（越）が滅亡する。越は中国東南部に広く分布した南方系少数民族から出た水田稲作とのかかわりの深い民族であった。隣国呉を滅ぼし、会稽（琅琊）に都し、浙江・江蘇・山東に覇を唱えたが楚に滅ぼされた。

この頃に江南の水田稲作（ジャポニカ米）と鉄器文化をもった人々が、山東半島―朝鮮半島南西部―北部九州に渡来したと思われる。

しかしその頃の朝鮮半島は北方騎馬民族の南下の最中で多部族割拠の時代であった。古代朝鮮半島に伝播した稲作、鉄器の文化が本格的に日本とかかわってくるのは古代朝鮮の南半部の多部族が三国に収斂されてきた前二〇〇年頃の前三韓の時代になってからであろう。

そしてこの文化は生産の神を伴って渡来してきた。日本海沿岸は自然の縄文から生産の弥生時代へと一変する。

石見と出雲の国境にある佐（狹）比売山（三瓶山）にまつわる大宜都比売神と娘の乙子狭姫の穀物発生の伝説や丹波国の伊去奈子嶽（磯砂山）に天降った豊受大神（のちの外宮祭神）の水田稲作についての丹波国伝承「あなにえし田庭（タニハ）が転じてタンバ＝丹波に」などに、朝鮮半島南部から日本海沿岸に生産神を奉じた集団が渡来した原初の姿が見える。

「豊受（トヨウケ）大神」「大宜都（オオゲツ）比売神」の「ケ・ゲ」は「食」の意味で食は稲であり、稲の精霊の「稲魂」が神様。「宇迦之御魂神、倉稲魂（うかのみたま）、物忌神、宇賀神、御食津神、御饌津神、保食（うけもち）神、氣比神」更には「稻荷（稲生る）、田の神」など全て同義語。日本人にとっていかに「稲」は特別なモノであるかが解る。

「古代日本海の神々」の「表」にみる如く神々の中心は素戔鳴尊と火明命（饒速日命）であるが、その諡号は「神祖熊野大神櫛御氣野命」「天照国照彦火明櫛甕玉饒速日命」「櫛御氣野命」は「奇御食主命」、「饒速」は「豊穰」でともに食―穀物―稲をつかさどる神に通ずる。

ところで、諡号のない神は生体を感じられない。例えば大国主命。

「記紀」の編纂に当り、持統女帝（六八六～六九六年在位）は「中央集権国家の確立と天皇家の由緒正統化のため」に不都合な大神神社・石上神社の古文書と春日氏・大伴氏など一六豪族の系図とを六九一年に没収、抹消してしまっている。同時に作成した神話は、部族の最高神素戔鳴尊とその子火明命（饒速日命）を抹殺、代って出雲神話の最高神として大己貴（おおなむち）神を登場させた。かかる強行策にも拘らず饒速日は「記」に一カ所、「紀」では三カ所にエピソードが記されている。当時、饒速日がかつて原大和の支配者であったことは周知のことだったことが判る。

出雲大社の社名は明治以降の正式社名で、以前は杵築大社。丹波国一宮（亀岡市）出雲大神宮（おおかみのみや）の小引きでは、明治になり神社制度に定められた祭神が大国主命、三穗津姫命（「表」参照）。『丹波国風土記』には「和同年中（七〇八～七一五年）出雲国杵築に大国主神（またの名、大己貴命、御蔭大神、三穗津彦大神其の他）を遷す。出雲大社は是れ也」によるものという。尚、大神宮社殿内「空ノ間」にはかつては国常立命が祀ってあったとのこと、大八洲国祖神社の社名、俗称の元出雲と併せ、大神宮が古代では格別の社だったことが窺える。

また、天平五年（七三三）出雲国造広嶋撰録『出雲国風土記』では朝廷創作「記紀」に従い出雲国最高神「所造天下大穴持命」で多数ある大国主命の名を統一している。

これらのことは「記紀」が勝者の歴史書であり、牽強付会（こじつけ）の書である一端を示している。

三 国宝『海部氏系図』の紹介

古代日本海沿岸の神社やクニを潟湖連合として纏め、その中心にあったのが、丹後一宮籠神社・海部氏であった。

籠神社は天の橋立の聖地にあり、海部氏は現在第八十二代の歴史をもつ。主祭神は丹後海部氏始祖彦火明命。境内には彦火火出見命・倭宿禰命が、奥宮真名井神社（古名、吉佐宮）には豊受大神（外宮）・天照大神（内宮）が祭られている。元伊勢と称される所以。

籠神社には、昭和五十年にはじめて公開され、翌五十一年には国宝に指定された日本最古の系図『海部氏系図』と附（ついたり）『海部氏勘注系図』がある。

当系図は平安初期に書かれて以来、昭和五十年まで約千百年以上秘匿が守られてきた。しかも史的資料として第一級品と認められている。

第一級資料の認定については

- 一 十六世代の人名には丹後国庁公認の「丹後国印」が押印されている。
- 二 成立年代が八七一年から八七七年と特定できる。
- 三 豎系図の古態で、海部家を継ぐ一子のみ記す父子相続の形態。続柄として「孫」「児」「弟」を用。

四 人名に「命」「宿禰」「直」「祝」がついており、夫々の時代の身分などが判る。

五 附（ついたり）の『海部氏勘注系図』は江戸初期のものというが、内容は平安期にさかのぼるもので史料価値が高い。
など。

その内容については

一 丹後海部氏の始祖ヒコホアカリノミコトは祖神において天皇家とは兄弟(ニニギノミコト)。
二 ヒコホアカリは丹後に降臨した(一説によれば若狭湾の冠島＝大島)。
三 四代目のヤマトスクネノミコトは大和の建国に関与。
四 古代海人族は技術集団で水軍でもあり、拠点は丹後にあった。
更に「海部氏系図」と「海部氏勘注系図」を総合検討して判ることとして

① 始祖彦火明命は前二世紀末頃の人。

② 二代天香語山命、三代天村雲命、四代倭宿禰命は前一世紀頃の人。

③ 九世孫意富那比命の妹日女命はヒミコか？

④ 十一世孫小登與命の妹日女命はトヨか？

⑤ 十四世孫川上眞稚命(大縣主になる)は丹波道主命か？

⑥ 十五世孫丹波大矢田彦の妹川上日女命はヒバスヒメ(垂仁天皇のサホヒメの後の后)か？

⑦ 「二六六年倭の女王西晋に朝貢する」→「四一三年倭王讃、東晋に遣使」まで中国の歴史書から

倭の關係記事が絶えるが、この頃強大になってきた大和の天皇勢力は既存の丹波国勢力制圧を図る。軍事力としての四道將軍派遣(丹波道主命説話)。結婚政策(日葉酢媛伝承、天皇のもとに召された丹波国の神の娘たち)。懷柔策(天皇、海部の姓を賜う)。祭神政策(天照大神の丹波移し、丹波の「保食神(豊受大神)」の伊勢移し)。とどめは七一三年(和銅六)の丹後国分国。これらの事柄記録(系図)は中国の歴史書に空白の日本史(崇神天皇→応神天皇の一四七年間)を埋め重要。

弥生以降の由緒、古社の神々の変遷など……………
縄文の頃より、鳥海山(2237メートル)に宿る古代神(山霊)を蝦夷を攻める鉄剣軍団が逆に征夷の神に取り込んだ。内宮「みあれ」、外宮 物忌神(穀霊神・農耕神)
度津(朝鮮語の「海」ハタ)神の神社、古代大陸や朝鮮半島から渡来、漂着があったと舒明紀・聖武紀に。対馬・和多津(ワツ)神社、隠岐島・由良比女神社(和多須(ワス)潮流が分る
弥彦山(638メートル)は越中と越後の国境であったが、大宝2年(702)現在の如くに、中世には祭神は開拓神彌彦大明神のみであったが、江戸初期『大日本一宮記』に「伊夜日古社饒速日尊皇子天香山命」
太古、出雲～因幡の気多崎經由能登に渡ったので、気多社名に。分祀で但馬・越前・加賀・越中・越後(居多)・飛騨にも祀られる程神威があった。奥宮は素戔鳴尊を祀る。(本来の姿)
「白」は「しろ・はく」ではなく「しら」で御由緒など全て「しら・シラ」の振り仮名がつく。古代朝鮮の斯羅(新羅)、甌山(シラボン)と無縁でなく、斯羅渡来人の「故郷の神山」
謎多きこと籠神社に次ぐ。元越の国一宮とも。気比＝筥飯は食・饒・受・飯米・稲(生)・保食に係わる社名・祭神は意富加羅(オオカウ)国(任那)の王子都怒我阿羅斯等とも、泻湖神社の代表
敦賀をはじめ若狭・遠敷郡丹生郷・海神・白山など北陸道は中国・朝鮮の文化が色濃く伝わっている。若狭神＝彦神(山幸彦)と姫神(豊玉姫)夫婦で山神・海神の性を
名勝保津川は三穂津姫の名からで千年川と。当宮小引きによれば「崇神時に再興された」と『丹波風土記』和銅年中出雲国杵築に大国主命を遷す。出雲大社は是れ也」と。俗称元出雲
天火明命は若狭湾の凡海島(冠島・大島)に降臨し、丹波の真名井神社の豊受大神を(匏宮)。豊受大神は伊去奈子嶽(磯砂山)に降臨。五穀を植え、その稔りを「あなにえし田庭」と
天日槍命は新羅の王の子で垂仁天皇三年(320年頃)「八種の神宝」を持って渡来した。伝承は朝鮮伝来の刀剣等文化の人格化で、太陽神を祀り、矛・剣を神の依代の宗教・農耕鍛冶集団
宿禰(スクネ)～村主(スクリ)は古朝鮮語で村長、姓の一。渡来系氏が称。村(スキ)は古朝鮮語(注、白村江) (グ)スク(琉球語の城)。磯城(シキ)瑞籬宮跡、同系語
しどり(しとり・しずり)はシヅオリ(倭文織＝緯を青・赤などで染め乱れ模様に、あやぬの(古代の織物) 当地開拓が倭文部一族によって進められたことによる。下照姫が居住
古来、種々の称号で呼ばれたが、明治以後、正式社名を出雲大社とした。大神の別称。大己貴神・大穴持命・大物主命・葦原醜男神・八千矛神・所造天大神・大国魂神・櫛甕魂神
古代語「くまの」は韓語。出雲族の神祖奇御食主。日本火出初社とも。出雲大社宮司就任式の火継式は当社で行われ、鑽火祭に出雲大社祭祀に用いる神火は大社宮司参拝の上拝受。
「うまし」は褒め言葉。「まじ」はまじない、占い、「ツツミタマ・十種神宝」を奉齊し、御魂鎮めを。物部氏の始祖で、祭事・神前裁判を司り、後に武力も「もののふ、武士の意」

古代日本海沿岸の神々 と 国宝「海部氏系図」

	旧国名・所在地	神社名・祭神名	スサノオ・ニギハヤヒ関係	縄文時代の神
みち のく	出羽・山形県	大物忌神社	スサノオ・稲田姫の子	御神体山
	飽海郡遊佐町	大物忌神(倉稲魂神)	ニギハヤヒの妹	鳥海山(鳥見山)
北 陸 道	佐渡・新潟県	度津(ワツ)神社	ワツミ(海神)	本来の御神体「海」
	佐渡市羽茂	五十猛命・大屋津姫	ニギハヤヒの兄・姉	羽茂川・妹背山神域
	越後・新潟県	彌彦神社	ニギハヤヒ・天道日女命	神の山彌彦(伊夜比
	西蒲原郡弥彦村	天香山命(高倉下命)	の子(尾張・海部氏祖)	古神)山信仰
	能登・石川県	気多大社	スサノオの女、須世理姫	神奈備「いらずの森」
	羽咋市寺家町	大己貴命(大国主命)	(ニギハヤヒの妹)の婿	中央の巨石
	加賀・石川県	白山(シラヤマ)比咩神社	しら＝ス羅(新羅)	御神体山
	白山市三宮町	菊理媛	シラヤマヒメ(ククリヒメ)	白山(休火山2702m)
	越前・福井県	気比神宮(筥飯宮)	潟湖・角鹿津・ケヒ浦	御神山
	敦賀市曙町	伊奢沙別命(御食津大神)	新羅系渡来人・海神	天筒山
山 陰 道	若狭・福井県	若狭彦神社(遠敷明神)	ワカサ・オニユウ(朝鮮語)	遠敷川の清流
	小浜市龍前	若狭彦神(彦火火出見尊)	創始社・白石神社	鵜の瀬の巨巖
	丹波・京都府	出雲大神宮(イズモオオガミヤ 大八洲国 国祖神社)		神体山＝千年山・
	亀岡市千歳町	大国主命・三穗津姫命 元出雲(大社が移転)		御蔭山(御影山)
	丹後・京都府	(元伊勢)籠神社	天照国照彦火明	真奈井ヶ原・磐座
	宮津市大垣	彦火明命(ニギハヤヒ)	櫛甕玉饒速日命	子種石
	但馬・兵庫県	出石(イズシ)神社	秦氏の祖	「禁足地」
	豊岡市出石町	天日槍命・出石八前大神	伊奢沙別命	神苑・出石
	因幡・鳥取県	宇倍神社	(古)稲羽・稲葉 宇部	本殿上の岡の上
	鳥取市国府町	武内宿禰命	山の双履石・長寿神	石囲いの中・二つの石
	伯耆・鳥取県	倭文(シトリ)神社	建葉槌(思兼神)織神	御冠山
	東伯郡湯梨浜町	建葉槌命・下照姫命	下照姫(大国主の娘)	(安産岩)
	出雲・島根県	出雲大社(杵築大社)	素戔鳴と奇稻田の子	(杵築宮は国譲り条件で
	出雲市大社町	大国主大神	とも、6世の孫とも	出雲杵築に建てられた)
	出雲・島根県	熊野大社	神祖(カムロギ) 熊野	熊野山の山上岩座
	松江市八雲町	素戔鳴尊	大神 櫛御気野命	大社の元宮 御神山
	石見・島根県	物部神社	ニギハヤヒ・三炊屋姫	神体山八百山に神墓
	太田市川合町	宇摩志麻遲命	(長髓彦の妹)の子	が

以上「古代日本海の神々と海部氏系図」を俯瞰していると『魏志倭人伝』の「不弥国より水行二十日」は但馬の円山川河口であり、「投馬国より水行十日陸行一月」は丹後半島を廻り若狭湾に入り宮津港に上陸。由良川を遡って（地理上は南東）福知山、綾部、和地、丹波高地・丹波、園部、亀岡（出雲大神宮所在地）、保津川、京都、奈良、天理、桜井が浮かんできく。空想であろうか、『海部氏系図』の精査、謎解きが望まれる。

引用参考文献『古代丹後王国は、あった』秘宝『海部氏系図』より探る 伴とし子著 東京経済
「丹後王国」を証す——籠神社『海部氏系図』 伴とも子記 歴史読本

生涯を「義」に生きた勝海舟

幕末・明治の政治家、勝義邦（通称麟太郎、海舟は号）は文政六年（一八一三）正月三十日、江戸本所亀沢町（現両国四丁目）に生まれた。父は勝惟寅（男谷家より養子・小吉）母は勝信。男谷家・勝家の隆盛のもと、海舟の曾祖父男谷検校（本名米山銀二）であった。検校は元禄十四年（一七〇二）、越後国刈羽郡長島村（現柏崎市長島）の生まれで、少年時に盲目となり、江戸に出府、勤勉実直・質素な生活の末、財をなし、盲目最高官位の検校まで上りつめた人物。一方、父小吉は「本所の旗本勝小吉は貧しい極道者」と自認する江戸っ子。その小吉が「鶯谷庵独言」の中で、息子義邦は実銘（まじめ）で親孝行、とべた褒めしている。海舟にとって曾祖父もこの父も人生のよき教師だったのであろう。

海舟十六歳の時、父小吉は隠居（号は夢酔）し、家督を相続するが、海舟後年の語り『氷川清話』でその暮らしぶりを「非常に貧乏で、（中略）畳といへば破れたのが三枚ばかりしかないし、天井といへばみんな薪につかってしまつて、板一枚も残つて居なかつた」と記している。

そんな生活の中で海舟は住み込みで剣術修行をし、蘭学を学び、生来の賢知を磨いて、嘉永三年（一八五〇）二十八歳で、先年本所から転居した赤坂田町に私塾を開設、蘭学と西洋兵学を教えるまでの学識者になった。

その向学心に燃えていた赤貧の二十代、立ち読みを常としていた小さな書物屋を介して知りあった箱館の商人渋田利右衛門が、若き海舟の器を先見して後援者になった。この人物について海舟は『氷川

『清話』で詳しく談じている。「おれもこの男の知遇にはほとほと感激して、いつかはこれに報ゆるだけの事はせうと思つて居たのに、惜しいことには、渋田はおれが長崎に居る間（安政二年～安政六年）に死んでしまった。こんな残念な事は生まれてからまだなかったよ」と。更に渋田は海舟が長崎に行く前に、万一のとき頼りになる人をと、灘の酒屋嘉納治右衛門、伊勢の豪商竹川竹齊、紀州の豪商浜口梧陵の三氏を紹介する念の入れようであった。事実、この三人には折々に、世話になった。海舟はこの行き届いた恩義に対し「御維新前に箱館奉行にはなし談をして、渋田の遺書をいっさい奉行所で買い上げて、その子孫には帯刀を許すようにしてやった」と最高の礼で報いた。

貧乏旗本の出で、上下に頼るべき者のいない海舟は、この援軍を力にして勉学に励む。そしてこれが彼の開運に繋がる。

無役の小普請組ながら二十代で蘭学塾を開いていた海舟を見出し、蕃書翻訳勤務に登用したのは海防掛目付の大久保忠寛ただひろ（号は一翁）、海舟より六歳年長の開国論者であった。一翁（文化十四年～明治二十一年）は、ペリーが浦賀に来航した嘉永六年（一八五三）、ロシア使節プチャーチン来航事件に対応して設けられた攝海防禦体制調査団の一員に、出仕したばかりの海舟を加えてくれた。その折り、安政二年（一八五五）、大阪西町奉行の川村修就ながたか（寛政七年～明治十一年）に出会う。修就は海舟より二十八歳年長で海防の第一人者であった。

二週間にわたる現地視察と海防体制の協議の間、海舟は修就から、知識を現場に活かす術すべを教示され、その後も長崎海軍伝習所時代や攝海砲台築造時など多大な助力を受けた。修就は、出世の糸口を与えてくれた上、その後も助力を惜しまなかった一翁と共に、幕臣時代最も恩義を受けた人であった。し

かも、海外事情に接することで海舟はその視野をさらに拡げることとなる。二度のアヘン戦争（一八四〇～四二、一八五六～六〇）の結果、中国が西欧列強の半植民地と化し、一八五八年にはインドがイギリスの植民地になったこと、加えて海舟自身、万延元年（一八六〇）二月二十五日～閏三月十八日の間、サンフランシスコに滞在の機会を得、列強新鋭アメリカの近代文明に直に触れたことで、己がなすべき道を自覚する。

海舟三十八歳、蕃書調所頭取の時である。

国際問題も絡んで揺らぐ幕藩制下、幕府の指導者としてなすべき大義とは何か「日本国（領土・人民・主権）を守ることに」に尽きると海舟は確信、そしてそのためには「いかなることがあろうとも内乱を起こしてはならない。欧米列強に介入の口実を、植民地化の機会を、与えることになる」との強い信念をもつに至った。坂本龍馬（天保六年～慶応三年）が海舟と公議政体論者で同派閥の松平慶永（号は春岳）の紹介で海舟を訪ねて来たのは文久二年（一八六二）。海舟の大義に感服、その場で弟子になり、幕末最強の師弟が誕生する。龍馬は海舟の意を体して尖兵となり、大政奉還の奇策の原案を作成、成就（慶応三年十月十四日）させるが、十一月十五日京都で暗殺される。享年三十三歳。

しかし、將軍職辞退により政局の主導権をと目論んだ徳川慶喜のこの妙案に対し、薩摩を中心とする倒幕派は慶応三年十二月九日（太陽暦一八六八年一月三日）クーデターで反撃、王政復古の発令が発せられた。そして翌四年一月三日の鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争開戦）に発展、倒幕派が勝利する。新政府の慶喜追討令が発令され、政局は一挙に進展、政府軍は江戸攻略を目指して進発。三月十三・十四日、幕府側の軍事取扱勝安房（海舟）と政府軍参謀西郷隆盛との話し合いで「老獪なる西欧列強と新興

勢力アメリカの脅威から日本の国と民を何としても守らなければならない」との大義を共有して、勝と西郷は同行^{どうぎょう}の士となり、「江戸無血開城」を決め、四月十一日に引き渡しを終了する。

新政府、七月十七日、江戸を東京と改称、九月八日、慶応を明治と改元した。

海舟はその後も戊辰戦争の推移に意を払い九月二十二日会津落城で大勢が決したのを見届けて、明治元年（一八六八）十月十一日、東京を離れ駿府藩（藩主徳川家達）に出向する。しかし、翌二年幕臣・勝からの脱皮のため、安房守を安芳と改名、新政府任命の外務大丞・兵部大丞の官職はこれを辞退、十二月には徳川家に「退身願書」を提出してけじめをつけた。

海舟四十七歳であった。

海舟にとっても明治維新は古今未曾有の大事件であったが、彼の大義「日本国と人民のために、人としてなすべき道に身命を賭す」の信念は幕府時代も維新後の明治政府になっても不変であった。静岡滞在中の静岡藩政輔翼の時には、慶喜を警護してきて版籍奉還（明治二年）で家禄も失った旧幕臣約三百人と幕藩体制下の川越制度廃止で失職した人足約百人の自活の道のため、政府奨励の茶畑開墾事業推進に協力の労を惜しまなかった。

また静岡より明治五年（一八七二）に帰京してからの後半生、新政府が任命した官職、参議兼海軍卿（明治六年十月二十五日）・枢密顧問官（明治二十一年四月三十日）を受諾する一方、元老院議官任命（明治八年四月二十五日）・貴族院伯爵議員互選を辞退したのも、大義の実行に有用か否かの判断によるものと理解出来る。また大義遂行の同行の士西郷隆盛の名誉回復に奔走、遺児寅太郎の参内を果たした（明治十七年四月二十五日）。次いで、大義最優先のため犠牲を強いた徳川慶喜についても意を用

い、慶喜の十男を養子にむかえたり、明治三十一年には参内の上、天皇・皇后に拝謁、その名誉回復に尽力した。

また海舟には端折れない数々の逸話が…。

偶、私の手もとに、哲学館（現東洋大学）創立者井上圓了の献字付書がある。「巴里街頭夜色清 樹陰深处電灯明 満城人動春如湧 酌月吟花到五更 録巴里雜詠一以贈○○君」。

井上圓了（安政五年～大正八年）は越後長岡生まれ、寺育ちの哲学者。

明治二十三年（一八九〇）、圓了が哲学館の新校舎建設に着手したころ、宮内省から福沢諭吉の慶應義塾へ恩賜金が下されたのを知り、教育に関心をもっている枢密顧問官の海舟を頼って哲学館への支援助力を請った。海舟はこの時「私学経営者はあくまで独立自活すべき」と説き、打開策として自らが全国を講演巡回し、資金を作ることを教えた。圓了はこの資金調達方法を実行、延二十七年間、講演日数は三千六百日余に及んだという。海舟もまた終生、圓了を指導・激励、揮毫・支援を続けた。圓了は「海舟翁は実に精神上の師なり」と尊敬した。

同志社を創立した江戸っ子・新島襄（天保十四年～明治二十三年）にも圓了と同じ助言をしたという。そもそも海舟は人造りは国造りであるとの信念をもち、自らも若くして私塾を開き、訪米後は將軍家茂から直接許可を得て神戸海軍操練所を設立（元治元年・一八六四）したほどの教育熱心、而も門下生は広く身分や藩を越えて平等に扱った。また、明治八年、森有礼ありのりが開設した「商法講習所」（日本最初の商業学校、一橋大学の前身）の所長兼教師のアメリカ人、ウイリアム・コグスウェル・ホイットニ―家の有力な後援者となり、同校に多額の寄付をした他、一家の住居を勝家の所有地に建築し、その家

族の生計まで援助した。更に、幕府最後の会計総裁に任命（慶応四年一月二十三日）された盟友一翁とともに徳川家の資金運用を任され、旧幕臣の生活扶助のために使用したが、明治四年（一八七二）、この徳川家の私費で五人の若者を米国に留学させた。その中に一翁の息子三郎と修就の孫の清雄（維新の洋画家）も含まれていた。

海舟の旧幕時代の恩人、大久保一翁と川村修就への恩返し of 気持ちと共に、「大義とは何か」を己に悟得させたアメリカ留学の有意義さを次世代を支える若者達に知ってもらいたいとの思いもあったと思われる。

その清雄が帰国後失職し窮地に陥った時、ホイットニー家同様、赤坂氷川の自邸内に清雄のための画室を建てて支援し、衣食の世話までして我が子のようにかわいがった。かつての渋田利右衛門を偲ぶのでの報恩だったのであろう。

勝安芳いうところの「毀誉は他人の主張」（氷川清話では「批評は人の自由」）に従えば……。

海舟は生来の賢知を自己研鑽し「利害を捨てて、人として行うべき道、人道・国家のためにつくすこと、大・義」を己の不動・不変の信念として構築、公人としては忠義を、私人としては恩義を重んじた大人物、外国からは「世界が尊敬する日本人」と評される国際人として、明治三十二年（一八九九）一月十九日自宅にて死去。享年七十七歳。

幕末・維新期の主要人物と

初代陸軍医務局長 松本順

『新編日本史』（文部省検定済 昭和六十三年度用 高等学校用 原書房 松村剛他著）の「幕末・維新期の主要人物一覧表」は次の如くである。

「勝安芳（一八二三～九九）45（数字は大政奉還時の年齢）・岩倉具視（一八二五～八三）43・西郷隆盛（一八二七～七七）41・大久保利通（一八三〇～七八）38・吉田松陰（一八三〇～五九）⁽³⁸⁾・孝明天皇（一八三一～六六）⁽³⁷⁾・木戸孝允（一八三三～七七）35・井上馨（一八三五～一九一五）33・坂本龍馬（一八三五～六七）⁽³³⁾・松平容保（一八三五～九三）33・三条実美（一八三七～九一）31・徳川慶喜（一八三七～一九一三）31・後藤象二郎（一八三八～九七）30・高杉晋作（一八三九～六七）⁽²⁹⁾・伊藤博文（一八四一～一九〇九）27・明治天皇（一八五二～一九一二）16」の十六人をあげている。

欄外「吉田松陰と松下村塾」（抜粋）には「明治維新を推進した英傑を輩出した松下村塾は、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・山県有朋・品川弥二郎ら多数の志士が育った私塾で（中略）松陰は外圧のせまるわが国の国防策を模索した。そして、わが国の「皇国たるゆえん」を知り、西洋の技術を学びとることの必要性を感じ、その「至誠」を信条としたきびしい教育は、塾生的人格形成に決定的な影響をあたえた」とある。

また、『歴史探偵団がゆく 日本史が楽しい』（半藤一利編著 文藝春秋）の「明治維新の志士ベスト

10」(幕府側の人びとははずす)南條範夫・村松剛選は「吉田松陰・高杉晋作・西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允・坂本龍馬・岩倉具視・伊藤博文・板垣退助・山県有朋」。

(追記)尚、本文中に「役割を終わると次々に死んでいく(人)」として、吉田松陰・久坂玄瑞・高杉晋作・坂本龍馬。「維新の三傑」として、西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允。「西南戦争後の明治政府を作り上げた人たち」として、伊藤博文・山県有朋・黒田清隆をリストアップしている。この「明治維新政府成立に本質的な役割を果たした人たち」の基準の中には幕府側の人たちは含まれないことになる。

慶長八年(一六〇三)徳川家康が江戸幕府をひらいて以来慶応三年(一八六七)の大政奉還まで、十五代二百六十五年つづいた徳川幕府にも有能な人材が多数いたことは周知の如くであるが、あの兄弟や仲間同士が敵味方に別れての激動の幕末・維新时期に徳川幕府と明治新政府の両政府で要職についた人物となると稀有である。福沢諭吉の「瘦我慢の説」でいう新政府に仕え爵位を得たことで非難された勝海舟と榎本武揚、それにもう一人松本順がその代表的な人物といえる。

勝海舟は、幕府軍艦奉行・海軍奉行並・陸軍総裁、更には江戸城明け渡しの幕府代表を。明治政府では参議兼海軍卿・枢密顧問官(外務大丞・兵部大丞・元老院議員・貴族院の伯爵議員は辞退)を務めた伯爵。

また榎本武揚は、幕府軍艦頭・海軍副総裁を。明治政府では伊藤内閣で逓信大臣、黒田内閣では農商務大臣を兼任、更には文部大臣に、次の山県内閣にも留任。松方内閣では外務大臣と、長薩藩閥政府の中で唯一の幕臣として重用され、枢密顧問官となり、葬儀は海軍葬であった。子爵。

また、勝は西郷隆盛と共に「江戸城を無血開城、江戸を戦火から救った幕臣」として、榎本は箱館五

稜郭に拠って「最後まで戦い抜いた徳川遺臣」で、その国際知識・政治手腕を惜しんだ官軍参謀黒田清隆が剃髪して命乞いをした人物としても知られている。

勝、榎本に比して知名度は低いが、政治家以外で、幕末・維新时期両政府で要職を務めたのは、松本順（良順）である。松本は徳川幕府で、奥御医師・西洋医学所頭取・歩兵奉行並・海陸軍軍医総長。明治政府では山県有朋の依頼で兵部省軍医頭・初代陸軍軍医総監。男爵。

司馬遼太郎『胡蝶の夢』（新潮社）、篠田達明『空の石碑』（NHK出版）、子母沢寛『新選組始末記』（角川書店）、黒川鍾信^{あつのぶ}『東京牛乳物語』（新潮社）、茅原健『工手学校』（中央公論社）、石黒敬七『写された幕末』（明石書店）などに登場。『写された幕末』には「安政五年（上野）彦馬撮影成功の肖像写真、幕府医官松本良順。彼も写真の研究者」の説明つきで、良順の帯刀姿写真が載っている。

松本は幕末・維新时期を彩る偉材で、政治分野における勝・榎本の医学分野版ということが出来よう。改めて、松本順（良順）の年表・経歴を記すと次の如くである。

天保三年（一八三二）江戸麻布我善坊に生まれる。父佐藤泰然は本邦初の私立病院（佐倉順天堂創始の蘭学者でその次男、幼名順之助）。

嘉永二年（一八四九）十七歳 父の盟友、幕府奥医師松本良甫の養子となる。

安政四年（一八五七）二十五歳 幕命により長崎海軍伝習所へ。来日オランダ軍医ポンペに系統的な西洋医学を教わる（長崎大医学部のおこり）。

文久元年（一八六一）二十九歳 本邦初の洋式公立病院長崎養生所を設立、副院長。江戸に戻り、西洋医学所（種痘所）東大医学部と変遷）副頭取。

文久三年（一八六三）三十一歳 西洋医学所第三代頭取。本格的医学教育開始。

元治元年（一八六四）三十二歳 奥御医師兼医学所頭取・歩兵奉行並・海陸軍医総長。

慶応二年（一八六六）三十四歳 將軍家茂臨終に立会う。次いで將軍慶喜の侍医。

慶応三年（一八六七）三十五歳 検微病院設立。

明治元年（一八六八）三十六歳 戊辰の役では幕府軍と行動を共にす。仙台から横浜に戻り、潜伏中官軍に捕らえられ、幽閉。

明治三年（一八七〇）三十八歳 釈放後、早稲田に蘭^{らんちゅうしゃ}疇舎病院（本格的私立病院の始め）設立（後に仮軍事病院）。医学教育と診療を実践。

明治四年（一八七一）三十九歳 時の兵部少輔山県有朋の依頼で兵部省軍医頭。良順から順に改名。

明治六年（一八七三）四十一歳 初代陸軍軍医総監（十五年、第三代軍医総監再任）。軍医制度の確立、本邦初の医師試験実施。

明治十年（一八七七）四十五歳 西南の役で軍衛生全部門を統轄。

明治四十年（一九〇七）死去、享年七十五。貴族院議員、男爵、勲一等、従三位。

以上、年表・経歴にみる如く徳川幕府と明治政府の両政府で要職をつとめ「日本の医学の歴史を変えた」人物であることがわかる。

更に業績を付記すると、長崎海軍伝習所時代に、本邦の写真術創始に重要な役割を果たしたこと。また明治十八年（一八八五）陸軍軍医総監を退官後、予防医学として衛生思想を説き、飲用牛乳の普及に尽力（明治三年伯父坂川當晴に東京初の「石薬・牛乳」の「搾取業」を開業させている。更に手軽な健康

法としての海水浴啓蒙のため、大磯をはじめ各地に海水浴場を開設した。

松本順を語るとき、特筆すべきは彼が多彩な血縁関係と交友関係であろう。

まずその血縁関係を列举すると

父・佐藤泰然(初代順天堂堂主)をはじめとして、田中芳男(男爵)・山内作左衛門(資生堂創設)・林洞海(蘭方医、幕府奥医師、大阪医学校長)・緒方洪庵(蘭医、適塾設立、種痘施行、法眼、ほうげん奥医師兼西洋医学所頭取)・佐藤尚中(たかなか第二代順天堂堂主)・林董(伯爵、初代英国大使)・林紀(第二代陸軍軍医総監)・榎本武揚(子爵、海軍中将、通信大臣、農商務大臣、文部大臣、枢密顧問官、外務大臣)・赤松則良(男爵、海軍中将)・西周(思想家)・西紳六郎(海軍中将、思想家)・緒方維準(これよし陸軍軍医監、陸軍軍医学校長)・箕作麟洋(男爵、行政裁判所長官)・佐藤進(男爵、陸軍軍医総監)・福沢諭吉(思想家、教育家、慶応義塾創設、明六社組織、「時事新報」創刊)・福沢捨次郎(時事新報社長)・林雅之助(男爵)・赤松範一(男爵)・森鷗外(文豪、第八代陸軍軍医総監)・長岡半太郎(初代大阪大学学長、物理学文化勲章受章)と枚挙に遑なしである。

血縁関係に続き、その交友関係を記すと、安政二年(一八五五)、幕府は長崎に海軍伝習所を開設。松本良順は幕命により安政四年軍医として入所、勝海舟や榎本武揚らを知る。同時にオランダ軍医ポンペ(安政四年海軍伝習所医官として来日。長崎養生所などで西洋医学の教授は勿論、物理・化学・解剖・外科手術・内科・眼科・産科・病理・調剤学・法医・臨床まで教え、日本に五年間滞在)を師とし、その協力者をつとめた。松本の弟子となり通訳として力になった語学の天才司馬凌海(洋方医、本名島倉亥之助、東京の医学校教授、ドイツ語塾経営、オランダ語・英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・

ラテン語・中国語を解した)を知ったのはこの時である。また、この長崎滞在中に師ポンペの写真道楽にも協力、上野彦馬・前田玄造・古川俊平・内田九一らと日本写真術の夜明けにも関わった。

更にポンペの教え「医師は患者には常に侍・町人、貧・富の差にかかわらず平等でなければならぬ」に従い、その交友関係は将軍・貴人から新選組、歌舞伎役者、非人の親分までの広きにわたっている。

中でも新選組との関係は深かった。

元治元年(一八六四)下谷和泉橋の西洋医学所に松本を突然、近藤勇が訪ねてきた。斬り込みか?と思ったが結局は急性胃炎だったという。そして、良順の「西洋を知らねば武も国も亡びる」という大義に感動した近藤の「義兄弟に」との申し出を快諾して義兄となった。翌慶応元年、将軍家茂が京に上るのに伴い京住いになるや松本は西本願寺の新選組屯所にまで足を運び、近藤以下隊士の健康診療は勿論、その台所の衛生、食の栄養指導までこまかに面倒を見、これに応えて隊士も教えには従順であったという。

戊辰戦争で敗走北上する幕府軍と行動を共にし、会津攻防戦に負傷者治療医師団として活躍した松本は、仙台で土方歳三に会う。ここで土方は松本に「君は前途有用な人なり。宜しく断然ここより去つて江戸に帰らるべし」と助言。良順はこの土方の言葉に従うのであるが、土方を生命の恩人と思ったのではないだろうか。旧板橋宿入口の「新選組局長近藤勇昌宜・土方歳三義豊之墓と隊士供養塔」(明治九年、隊士永倉新八發起人、松本順協力造立)や高幡山金剛寺の勇、歳三「殉節両雄之碑」に松本の思いが感じられる。

また幕府軍戦況不利のなかでの会津行に良順は四人の門弟、名倉知文・渡邊洪基・小泉順英・三浦渙を連れていくが、門弟たちは「地獄へまでも」と良順に心酔していたという。この門弟の一人渡邊洪基の略歴を記すと、嘉永元年（一八四八）越前府中に福井藩士で医師渡邊静庵の長男として生まれ、戊辰戦争では松本良順とともに幕府側で参戦するが、その後許され新政府に出仕、岩倉使節団随員、元老院副議長、帝国大学（現東京大学）初代総長、工手学校（工学院大学前身）設立など。明治三十四年（一九〇一）死去。

扱、日本民族のパラダイム（二時代の支配的な物の見方……）例えば「コメ本位制」の転換（シフト）ともいえる江戸時代（近世）から明治時代（近代）への激動期、両政府に出仕し、その懸け橋の重責を担って活躍した三英傑、勝海舟・榎本武揚・松本順には幾つもの共通点がある。

まず三人とも江戸生れ。海舟は文政六年（一八二三）江戸本所亀沢町、順は天保三年（一八三二）江戸麻布我善坊、武揚は天保七年（一八三六）江戸下谷御徒町である。江戸生まれは地方に捕われることなく、日本国を総合的に視る大局観を体得出来た。

次いで幕府が海防の必要を痛感して設立した長崎海軍伝習所（旗本・御家人から選抜し、オランダ人が教授）で奇しくも同学の士となったこと。海舟は安政二年（一八五五）伝習を命じられ（三十三歳）、翌三年武揚入所（二十一歳）、翌四年良順入所（二十五歳）。ここで三人は全く同じ西洋の近代知識と思想を身につけたのであった。

しかし、当伝習所で習得した最大の成果は、西洋の知識、教養の修得と選抜入所の俊才達との西洋事情の研鑽とが相俟って「大義とは何か」を自覚したことである。彼らの大義とは「まず第一に西洋列強

の戦力の脅威と老獪さから日本国を守ること、次いで民に平等をもたらすこと」との確信を得るに至ったことであつたといえよう。

しかもその数年後、三人はともどもに、心ならずも賊軍（敗者）、弱者の立場を味わうこととなり、ここでも境遇を共有する。その生死にもかかわる逆境下、海舟は「江戸城無血開城会談」で官軍参謀西郷隆盛に助けられ、武揚は「箱館五稜郭の戦い」で官軍参謀黒田清隆に救われる。また順は、明治四年三月、早稲田に蘭疇舎病院を設立開院の半年後、明治新政府兵部少輔山県有朋の依頼で出仕することとなる。

生死の窮地で「敵中にも知己」を得る三人の知徳と人間性に敬服するばかりである。

ところで、この三英傑晩年の言動に、両政府懸け橋出仕の「志」の片鱗を伺い知ることが出来る。

海舟は明治を三十年も過ごした頃「ひよつとするとこの明治よりも徳川時代の方が民衆は幸福だったかも」と文明主義に疑問を投げかけ、例として「足尾鋇毒事件」を指摘している（『氷川清話』江藤淳・松浦玲編）。

偶、武揚は明治二十七年当鋇毒事件が社会問題化した多難な農商務大臣に就任。三十年三月三日、歴代大臣で初めて被害民代表と面会、直ちに現地視察、鋇毒調査委員会設置、電光石火議会で関連法案を成立させ、三月二十九日引責辞任をしている。

松本順については「日本の医学の歴史を変えた医学者」との認識をもったが……。

更に、順の師ポンペの至言「医師は患者には常に平等でなければならぬ」との医学の原点の具現化努力はやがて日本人に染み付いていた江戸身分制度を崩壊させる底力になったといわれている。司馬

遼太郎の『歴史を変えた医学』（週刊朝日・村井重俊・太田サトル）には松本順の目に見えない功績に対しての「称賛」が著されている。

三英傑の重要な共通点がもうひとつある。三人共健康で長寿だったこと。

享年、勝海舟七十七歳（明治三十二年）、榎本武揚七十三歳（明治四十一年）、松本順七十五歳（明治四十年）。

三者、波瀾万丈の生涯を立派に生き抜いての長寿は、まさに美德というべきであろう。

釈尊・玄奘の御真骨発見と異聞

仏教の歴史、その発生と伝播・教え等については、二千数百年の間における弟子・仏教者・仏教家により詳細が語られてきており、今更、言をさしはさむ余地もないことから、一般的に知られている財団法人仏教伝導教会の『仏教通史』要略を記す、と。

中インドに生まれたブツダ・ゴータマ（釈迦牟尼）は正しょうがく覚を成就。西暦前五世紀なかばころより、死に至るまで四十五年間、智慧と慈悲の教えの伝道説法の生涯であった。

その教え（仏教）はアショールカ（阿育、在位西暦前二六八～二三二王の時代、国外にまで伝播された。

そして紀元前後のころ、東方へ伝播して「大だいじょう乗」が生まれ、ナーガールジュナ（龍りゅうじゆ樹）の思想的活動が展開された。

中国・日本の仏教も、その大乘仏教で、それはブツタ・ゴータマの教法の系譜につながりながら、大衆の救済を第一に、の思想を強調するものであった。

中国が仏教を知ったのは、紀元前二世紀末ごろ、西域せいいきを通してで、シルクロードは貿易路であり、仏教の道でもあった。

中国の仏教受容は、教典の招来と翻訳を主とし、紀元一四八年から一七一年ごろ、安世高が、そして五世紀はじめ、亀滋きじ（新疆ウイグル自治区地方）から来た鳩摩羅什くまらじゆうで一つの頂点に。

入竺求法僧の先駆者は法顕ほっけん（三一九～四二〇？）、有名な玄奘（六〇〇～六六四）の入竺は六二七年、帰国は六四五年で、玄奘により中国の經典翻訳は更なる頂点に達した。因みに鳩摩羅什に代表される翻訳を「旧訳」、玄奘以降のものを「新訳」と呼んでいる。

彼らの思想的・宗教的活動は中国独自化を強め、天台宗で顕著に、更に禅宗に至って極まったといわれる。禅宗の初祖は菩提達磨ぼだいだるま（～五二八）で、それは「中国人の仏教」であった。

日本仏教は、五三八年、欽明天皇に百済の王が、仏像・経巻を献じたのが伝来の始まりで、長い歴史の中に三つの焦点があった。

第一期は七・八世紀、法隆寺の建立（六〇七）から東大寺の建立（七五二）の時代。寺院は国際的文化の中心、僧侶は新知識のリーダー、經典は優れた思想の乗物であった。

九世紀、最澄（七六七～八二三）・空海（七七四～八三五）が現われ、平安仏教とよばれる初めての日本仏教の宗派を創設、山中修行の根本道場を確立、以後三百年余、二人の流れ天台と真言が、朝廷中心に栄えた。

第二期は十二・三世紀。法然(一一三三～一二二二)・親鸞(一一七三～一二六二)・道元(一二〇〇～一二五三)・日蓮(一二二二～一二八二)などによる仏教の日本的受容であった。

以後の日本仏教はそれらの仏教者たちの基盤上に余栄を保って今日に至った。

だが、日本仏教の歴史にもう一つの焦点が。それは近代の仏教学における原始仏教の研究成果である。

なお、日本人の仏教受容に関しては、三つの要件「山岳信仰・他界・浄土観・遺骨信仰」という日本民族の信仰が、陰に陽に、相互に影響し合って発展し「国民的宗教」としての日本仏教が形成されたと宗教学者山折哲雄は指摘している。(『仏教とは何か』中公新書)

ところで、名古屋に仏教の国際的寺院「覚王山日泰寺」がある。案内書によると、

釈迦の死後二五〇〇年の間に、一度だけその遺骨が発掘された。一八九八年(明治三十一年)英領インドのピプラーワーでのこと。発掘したのは英国人ウイリアム・ペツペ(イギリスの駐在官)で、骨壺に刻まれたインド古代文字解読により仏骨と分った。インド政府はその仏骨を仏教国タイに贈りその一部がタイ国王チュラロンコン皇帝(在位一八六八～一九一〇)より日本に贈られた。この仏骨をお祀りするため、日本仏教全宗派が協力建立したのが日泰寺で明治三十七年(一九〇四年)のこと、覚王山と言うのは「^{さいと}覚りの王」釈迦のこと、日泰寺とは日本と泰国の意味。

タイ(泰)国の国名に変更されたのは昭和十四年十月三日。それまでの国名はシャム(暹羅)国。従って当初は山号は覚王山、寺号は日暹寺(日本・暹羅)として誕生。

また、御真骨を安置する「奉安塔」はガンダーラ様式の花崗岩で高さ十五メートル、大正七年(一九

一八年）に完成した。

この釈尊のご真骨発見は、当時十九世紀の西欧では、釈尊は実在の人物でなく太陽神話の一形式と
の見方が一般的であっただけに、「十九世紀東洋史上の一大発見」であつた。ただ銘文の解説について
は「ブツダ世尊の遺骨」と「親族である釈迦族の遺骨」とに学者の意見は分れた。「覺王山日泰寺略記」
は「これは仏陀世尊の舍利（骨）を納める器であり、栄光ある釈迦族の人々とその兄弟姉妹妻子たちの
ものである」と記している。

ところが…。

「一九七一年（昭和四十六年）からインド政府考古学局がピプラーワーの再発掘を行い、一九九六年
（平成八年）その最終報告書を公表。それによるとこの古墳には三度の増築が行われており、ペツペが
遺骨を発見した地層は第二期の舍利塔であつたことがわかつた。そしてさらに下の地層にはレンガ造
りの本来の舍利塔があり、その中から火葬した遺骨の入った壺が二つ発見された。（中略）ペツペの発
見した舍利容器は舍利塔増築時の複製品だったのか、あるいは親族の遺骨なのか」（吹田隆道著『ブツ
ダとは誰か』春秋社）と。

考古学の世界は常に新発見の研究成果の宿命を負っていて、それ故に興味深い分野といえよう。

仏教の重要人物の一人である玄奘三蔵法師（六〇〇年～六六四年、一説に六〇二年～六六四年）の御
真骨についてもまた異聞が。

三蔵法師の霊骨発見には次のようなエピソードがあつた。

『三蔵法師と慈恩寺』（大島見順著 平成二十一年七版）・『武州岩槻 玄奘塔ものがたり』（久保田士

朗著 二〇一〇年初版)によると

昭和十七年、第二次大戦さなか、南京を占領していた日本軍の高森部隊が、稲荷神社建立作業中、塔の貴部を発見、発掘の結果石郭(厚さ十五センチ、長さ百六十センチ)が出土。内部に北宋時代(一〇二七年)、明時代(一三八六年)記の葬誌と玄奘三蔵法師の頂骨が納められていた。「大唐三蔵大偏覺法師玄奘ノ頂骨ヲ、長干寺ノ演化大師が長安カラ伝ヘ得テ、此処ニ葬ル…」と彫られていることから三蔵法師の靈骨と判断された。そして発掘埋蔵品は全て直ちに南京政府に返還され、昭和十九年十月十日、政府は供養塔の落慶式典を執り行い、玄奘の頂骨の一部が日本仏教徒に贈与された。来日の靈骨は、大戦末期で米軍の空襲激しき折柄、安置場所を二転三転、疎開先を岩槻の慈恩寺に求めて十九年十二月十三日に奉安された。

昭和二十年八月十五日の敗戦では、靈骨占領品論議が起ったが、新中国蒋介石主席の「返還には及ばない。むしろ中日提携は文流にあり、日本における三蔵法師の遺徳の顕彰はまことによるこばしいこと云々」との友交的意向により、正式に慈恩寺の地に靈骨塔建設が決定、東武鉄道の根津嘉一郎社長の十三重塔寄贈もあって、二十五年三月二十日工事完了、二十八年五月玄奘塔建塔落慶式が行われた。その後三十年には逆に台湾省仏教界からの要請があり分骨、更に五十五年、奈良薬師寺へ分骨して現在に至っている。

ところが、近年の中国での研究で「旧日本軍の三蔵法師の骨、南京で発掘」説に異論が出されたと二〇〇七年(平成十九年)一月一〇日付朝日新聞は次のように報じている。

異論「記録なく、別人」を唱える中国陝西省社会科学学院哲学研究員を務めた陳景富氏によると、

「南京の頭骨」に関する主記録は三例、①旧日本軍が発掘した石棺の銘文(先述)②「九八八年に僧の可政が終南山に行き玄奘の頭骨を入手。(南京に)塔をつくった」(宋代の歴史書「健康志」)③「南京の可政和尚が、玄奘の頭骨を長安の終南山の紫閣寺で入手」(元代の歴史書「金陵新志」)。陳氏は「黄巢の乱(八七五～八八四年、唐末の農民の反乱)では「塔は破壊されなかった」と結論づけ、南京の頭骨は玄奘のものではないと主張している、と。

ところで、二十一世紀に入ってはや十五年余、パラダイム(人間が根本的にもっている思考や認識の枠組み≡世界観)は情報化・グローバル化などの社会変化も加わり、転換(シフト)を迫られているといわれている。

これは「西洋科学における世界観が近代において『機械論的』に行き過ぎ、それが今日われわれの社会全体が抱えている諸々の危機をもたらししており、人類が生きのびるためにはあらゆる分野において新しいパラダイムに転換されなければならない。そしてその現代科学が示す新しい世界観が『東洋の宗教的世界観に非常に似ている』との指摘が。(日本実業出版社『パラダイム・ブック』評 東北大学生新聞)

因みに東洋の宗教的世界観についていえば、まず日本の古神道・かむながらのみち(惟神の道)「神道は日本民族の形成以来、自然に対する独自の感受性をもとに、目に見えないカミの働きへの崇拜を育てたが、開祖や教理はもたなかった。むしろ、カミをまつり、みそぎ 禊はらえ 祓を行って心身を清浄にする、素朴な儀礼に基づく民族宗教であった」(山折哲雄『イミダス』⁹¹『宗教』)。「自然は神慮のまま」と感受していたといえよう。

仏教は紀元前五世紀、インドの王子ゴータマ・シッダールタ（釈尊・仏陀・釈迦牟尼）が興した。釈尊の生存時代については欧州ではスリランカの歴史書を重視し、その誕生を紀元前五六六年、入滅を紀元前四八六年としているが、日本の研究者は文献学上「北方伝承の仏滅からアショーク王の即位算定の紀元前二六八年までを百十六年とし」誕生を紀元前四六三年と考えている。

釈迦時代の仏教、原始（初期）仏教の教えは悟りに至るまでの四つの真理「四諦」、この世の苦をひらくための八つの方法「八正道」としてまとめられる（『図解日本の仏教と宗派』宝島社）。釈迦入滅後百年経ったころ、上座部系統はもっぱら修業と禁欲により自己のみの完成を目指す立場をとる仏教としてセイロン、ビルマ、タイなどの南方に伝播（南方仏教）。一方大衆部からは大衆の救いを第一に考える、在家信者を中心とする大乘仏教が成立。中国、韓国、日本、チベット、モンゴルなどに伝播（北方仏教）した。

原始仏教から上座仏教（一九五〇年、コロンボの世界仏教徒会議の決議で小乗とはいわないことに）をへて発展し最高形態に到達したといわれる大乘仏教には二大系統がある。

一つは中観派といわれ、竜樹^{りゅうじゆ}を祖とするもので空を教義の中心（根本真理）とし「一切の事物は縁起により成り立っており、永遠不変の固定的実体がない」と考える系統。

もう一つは唯識派といわれ、世親^{せじん}（天親^{てんじん}）（四、五世紀ころの北西インドの僧）が大成した説で、「唯識とは心のほかに法（存在するもの）がない、人間の心につれて初めて世界が生じる」という考えである。しかし、この大乘仏教もインドでは滅び、中国・朝鮮では形骸化し、日本でのみ仏陀の心から生まれた大乘仏教の理念「慈悲（思いやり）」すなわち本来「四苦八苦」の苦で出来ている人生から苦をなくす教

えとして生きているというのが実情であろう。

中国仏教はともかく、中国の宗教的世界観を代表するのは儒教と道教である。

もつとも儒教は「宗教としてよりは社会道徳や政治倫理として」受容されているが。儒教の祖は孔子（紀元前五五一～紀元前四七九）である。孔子は中国古来の思想家を尊崇してこれら大成、仁を理想の道徳とし、孝悌と忠恕とを以て理想を達成する根底とした。忠恕とは「まごころとおもいやり」で、仁を天道の発現とみなし、一切の諸徳を統べる主徳とした。

一方、道教は儒家と共に中国の二大学派をなし、その祖は老子（春秋戦国時代・紀元前七七〇～紀元前二二二）で、「宇宙の根本原理（本体）を道（タオ）とする教説が根本をなし、道は絶対的であるとし、清静・恬淡・無為・自然に帰すれば乱離なし」と説いた。後に老子の学は莊子（紀元前四世紀ごろ）が継ぎ「万物は斉同で生死などの差別を超越する」ことを説いた。

いずれにしても東洋の宗教的世界観は「自然を目に見えないカミの働き」と感受し、「誠者天之道也。誠之者、人之道也。」（中庸二十章）と知見する心の働きを根本としているといえよう。

私見としては、新科学哲学を代表する「パラダイム論」が指摘する「新しい世界観が『東洋の宗教的世界観』に相似している」との世界観は、仏教の「般若波羅密多」（正しい判断力による真実にとつたつするのための実践）のことであろうと思考しているのであるが。

「江戸本所」と勝海舟

激動の幕末・明治期の政治家勝海舟（文政六年～明治三十二年、七十七歳歿）は、その類まれな切れ者故に多くの敵もつくったにもかかわらず、その評価は今日に至るも絶大である。

海舟の主な事績としては、

遣米使節随行の咸臨丸艦長として渡米、日本人初の太平洋横断に成功、日本海軍の設立。坂本龍馬をはじめ多くの人材育成、江戸城の無血開城の実現。維新後は、明治新政府の厳しい監視役。記録の著作。西郷隆盛・徳川慶喜の名誉回復、旧幕臣の生活援助などがあげられている。

しかし、海舟の最大業績は「徳川幕府を売った腰抜け」との汚名を着せられながら「内戦は、イギリス・フランスにつけ入る隙、口実を与えるだけ」との強い信念のもとに幕府軍の抗戦に反対、一命を賭してこれを貫き通したことである。

この海舟の「国難突破力」については日本のみならず海外でも高く評価されている。

静岡県立大学名誉教授前坂俊之は「世界が尊敬した日本人―最初の国際人にして日本最大の英雄勝海舟」のなかで、文明評論家山本七平は「勝海舟こそ日本最大の英雄であり、全世界を通じて百年に一人も出ない天才」と激賞しているし、更に明治四年に来日し、海舟にも会って取材した米国人E・W・クラークはその著『カツ・アワー日本のビスマルク』で「キリスト教徒ではなかったが、彼以上にキリストの人格を備えた人を見たことがない」「海舟の忍耐、危機に臨んでの勇氣、覚悟、指導者の注意深さは神に近い」とまで絶賛していると紹介している。

これら内外の評価もさることながら「無法者の馬鹿」と自称する勝小吉は、自伝『夢酔独言』（天保十四年著、小吉四十二歳・海舟二十一歳）の緒言で、わが息子義邦（海舟の名。通称麟太郎。海舟は佐久間象山書斎の「海舟書屋」にちなんでつけた号。安房守だったので安房と称したが、改元後安芳と）を手放して褒めている。

「息子がじつまい（実明）故に（略）武芸に遊んでいて、おれには孝心にしてくれて、よく兄弟をも憐れみ、けんそにして物を遣^{つか}わず、麤^{そふく}服をもはじず、そ食^{じき}し、おれがこまらぬようにしてくれ、（略）今は誠に楽^{らく}いん居になった。おれのような子供ができたならば、なかなか此の楽^{らく}は出来まいとおもう。是れもふしぎだ。神仏には捨てられぬ身とおもう。孫や其の子はよくよく義邦の通りにして、子々孫々のさかえるようにところがけるがいいぜ」

海舟の少、青年期の姿が目に見えるようである。

その小吉と海舟父子の「暮し」を「独言」の住居跡からたどってみると

文政二年（一八一九）父勝小吉（旗本男谷平蔵忠恕の三男、男谷惟寅の勝家への養子後の名）十八歳の時、信子と世帯を持ち、本所亀沢町（現墨田区両国四―二五両国公園内）の長兄旗本男谷彦四郎思孝^{ひろたか}の庭の一角に普請して居住。六年正月晦日、当地で長男麟太郎誕生、時の屋敷主は男谷精一郎（長兄の養子）、

文政八年、小吉二十四歳・海舟三歳、本所（南）割^{わり}下^げ水^{すい}（現亀沢二―三）の天野左京の地面に移り、普請完成まで二階に借住居。

文政十年、左京が急死し、天野家のもめことから同町（現亀沢三―六）の山口鉄五郎地面内家作に転

居。

文政十三年、小吉二十九歳・海舟八歳、小吉の面倒見のこじれで地主から追い立てを食い本所入江町（現緑四―三五―六）旗本岡野孫一郎の地面に移る。

弘化二年（一八四五）小吉四十四歳・海舟二十三歳、麟太郎、岡野孫一郎の養女民子（砥目屋という商家の娘）と結婚。

弘化三年、麟太郎夫婦、赤坂田町に転居。

以上の如く海舟は江戸本所に生れ、その乳児期（〇歳―六歳）、少年期（七歳―十三歳）、青年期（十四歳―二十四歳）の人生で最も敏感・臨界期の全てを本所で過ごしたのであった。

参考までに「本所」は、墨田区の一地区。もと東京市三五区の一。墨田は東京都二十三区の一で、旧本所・向島の両区を統合した名称。「割下水」^{わりげすい}は掘り割った下水道のこと。特に江戸本所に南北二条あった。現北斎通りは南割下水を埋めて造られた道路で清澄通りの現亀沢一丁目から錦糸四丁目まで約二キロメートルに及んでいる。北割下水は現春日通り。

この海舟の本所生活を知る第一級資料は勿論海舟の『氷川清話』であるが、その学術文庫版刊行に当り、編者松浦玲は、流布本『氷川清話』は最初に編集した吉本襄が海舟の談話を勝手に書換え、歪曲された部分があり、増収録したと記している。

また「元来の海舟談話は圧倒的に時局談である」ので、海舟の本所時代のことは『清話』八項目二五五篇中わずか以下の数篇である。

まず「餅を投げる」の篇は「おれが子供の時には」で始まるものの編者注の如く結婚後の赤坂田町時

代の話とみた方が辻褄があい、本所ものとしてはとりあげにくい。尤も海舟特有の韜晦なユーモアとみることも出来るが。

「後援者渋田利右衛門」は「^{わか}壮い時代」としか年代は出て来ないが、文中「日本橋、江戸橋との間」の書物屋、しかも蘭書の話、更には「二、三日すると、渋田は自分でおれの内^{うち}へやってきた。この頃おれの貧乏といったら非常なもので、畳といへば破れたのが三枚ばかりしかないし、天井といへばみんな薪につかってしまつて、板一枚も残つて居なかつた」となると、海舟二十歳前後の本所入江町岡野孫一郎地面居住頃とみる事が出来そう。

「きせん院の戒め」は「昔本所に、きせん院といふ一個の行者があつて、富籤の祈祷がよく当たるといふので、非常な評判で」海舟は老父とたびたび行つたという。ところがその祈祷が当らなくなつておちぶれた。その理由は二つで、一つは富の祈祷を頼みに来た素敵な美人を口説き「恐ろしい眼で睨みつけ」られ、「不届千万な坊主めが」と叱られた。一つは両国で買つて来た大きなすっぽんを料理しようとしたとき「大きな眼玉をして睨んだ」。この二つの事が心に咎めるところとなつて「鬼神と共に動くところの至誠が乏しく」なつた。

「人間は平生踏むところの筋道が大切」と聞かされ、海舟は「豁然として悟るところがあり、爾来常にこの心を失わなかつた」「この一個の行者こそ、おれが一生の御師匠様だ」。

この篇あたり、意外に海舟の心底か。

「飢饉と貧乏」は天保の大飢饉の時の話故天保四年（一八三三）、海舟十一歳。毎日早朝に起きて剣術の稽古に行く前に、徳利の中に玄米を入れ、櫂の棒で搗いて精米する「徳利搗」をした、白米を買えな

かった貧乏暮らし時代のエピソード。当然本所入江町の岡野家地面に居住していた時の回想である。

「本当に修業したのは剣術」では中津藩士の剣術指南島田虎之助の塾（浅草新堀の道場）に住み込んで剣術修業に励み、毎日、稽古がすむと牛嶋神社（王子権現）で夜稽古や寒稽古を怠らなかつた思い出を語っている。天保九年（一八三八）海舟、家督を相続した十六歳頃のこと。「禅堂に座す」は師島田虎之助の「剣術の奥意を極めるには、まづ禅学を始めよ」との勧めで座禅を始めた十九、二十歳の頃（天保十二、三年）のことである。場所は牛島の弘福寺であつたという。多分同じ頃福岡藩士永井青崖入門、蘭学を学び始めたと思われる。

「勝小吉・勝海舟略年譜、川崎宏編」によれば天保十四年（一八四三）、「麟太郎、剣術の免許を受ける。師の代稽古で諸藩邸を巡回するが、洋学を始めたという評判から嫌悪される」とあることから推察できる。

実はこの頃は海舟にとって非常に重大な時期だつたはずである。鎖国下であるが島田虎之助や永井青崖には幕府から海外情報が当然入つていた。特にインドの大部分を支配下におさめていたイギリスが一八四〇年（天保十一）、清国広州に艦隊攻撃をしかけてアヘン戦争が始まり、清国は完敗して一八四二年の南京条約で半植民地化したことは正に一大事件であつた。侵略が隣国にまでのびて来たことは当時の知識人にとって大変な衝撃であり、剣術と共に洋学の習得は急務となつた。洋学は則「海防論」であつた。海舟の不屈の憂国の志はこの頃に醸成されたものに違いないであろう。

海舟についての第一級資料である『氷川清話』と父小吉著「夢酔独言」には意外に海舟の本所時代を語っているものは少ないとはいへ、『夢酔独言』に小吉・海舟父子の一大椿事が出てくる。有名な「息

子麟太郎、犬にかまれる」である。時は天保二年、小吉三十歳。「岡野へ引越して（略）二月めにか、息子（麟太郎）が九ツの年、御殿から下ったが、本のけいこに三ツ目向うの多羅尾七郎三郎が用人の所へやったが、或日、けいこにゆく道にて、病犬に出合つて、きん玉をくわれ（た）が（略）前をまくつて見たら、玉が下りていた故、（略）篠田という外科を地主が呼んで頼んだから、きず口を縫ったが、医者が振^{ふる}えているから、おれが刀を抜いて、枕元へ立て置いて、りきんだから、息子が少しもなかった故、漸^{ようよう}々縫^ぬつて仕舞ったから、容子を聞いたら、「命は今晚にも受^{うけあ}合はできぬ」といったから、内中のやつはないて斗^{ばか}りいる故、思うさま小言をいって、たたきちらして、其の晩から水をあびて、金比羅へ毎晩はだか参りをして祈った。

終始おれがだいて寝て、外の者には手を付けさせぬ。毎日々々あばれちらしたらば、近所の者が、「今度岡野様へ来た剣術遣いは、子を犬に喰われて、気が違^{ちが}った」といいおった位だが、とうとうきずも直り、七十日めに床をはなれた。夫れから今になんともないから、病人は、かんびようがかんじんだよ。」

長い引用になったがこの一篇に、小吉の人柄が色こく出ており、小吉の理解には最適の一文である。「夫れから今になんともないから」の中に小吉の気持が伝わってくるというもの。父小吉のこの心配を余^よ所に海舟はその七十七歳の生涯に公称、五腹で九人の子宝に恵まれている。

小吉が平癒を祈り、毎日裸参りをした金比羅様の御利益だったのであろう。因みに金比羅は薬師十二神将の一つで、薬師如来は病苦を救い、病を治す法薬を与えるという医薬の仏として広く信仰されているが、小吉の参った金比羅が何所にあつたのかは誌されていない。

偶作家子母沢寛（明治二十五年～昭和四十三年、七十五歳歿）がこの話をヒントに勝小吉・海舟父子を描いた名作『父子鷹』（昭和三十八年厳冬作）はその舞台を「能勢の妙見堂」に設しつらいてのこの運びになっており、その「裸詣」の文中で小吉の妙見様への「さあどうだ妙見様、わかったか」の生命乞いの喧嘩腰祈願啖呵が感動を呼び有名を馳せているが「父子鷹」はあくまでも文芸作品であり、史実ではないことに一線をおく必要があろう。もつとも「古老の聞書を生かした作品で新風をひらいた」寛のこと、あるいは聞きとり時すでに地元では金比羅が妙見様になっていた？ということもありか。ただ信心深かった小吉は、妙見様は「国土を擁護し、災害を滅除し、人の福寿を増す」菩薩で、金比羅様は薬師如来、と夫々の御利益を熟知し、峻別して参詣していたことであろう。

ところで、人間の成熟は、肉体的完成は二十一、二歳、精神的円熟は四十歳超、知的能力は積極的な頭脳の働かせ次第で一生発達可能というのが定説とされている。これについて東京音楽大学の大場善一教授は人間のもつ基本的な能力を、官能（五感）・運動能・情緒能（喜怒哀楽の情）・社会能（対人関係・自主能力）・性能・知識能の六つに分類して、その発達段階を説明している。それによれば、

人間の能力形成年齢「100%」は、感覚・九歳、運動・十一歳、情緒・十三歳、社会・十五歳、性・二十歳、知識・一生であるという。

翻って海舟の生い立ちを眺めると、その人間形成は全て本所でつちか培われたことは勿論のこと、八歳で入江町の岡野孫一郎屋敷に落ち着くまでに能力の殆んどが、八、九十パーセント形成されていたということになる。況んや九歳の珍事は生命にかかわることであっただけに海舟の人間形成に多大に影響を与えたことであろう。父小吉の情愛の強さをいやという程に知ったであろうことは勿論、あのよう

にして周囲に生かされた一つしかない生命を、人生を、誠をもって日本国とその人々のために捧げようと決意したのは案外この本所の九歳の時だったのでは、と思うのであるが。

(主な参考文献)

- 『氷川清話』勝海舟／江藤淳・松浦玲編（講談社）
『氷川清話 夢酔独言』勝海舟／勝小吉 編者川崎宏 （中央公論新社）
『それからの海舟』半藤一利 （筑摩書房）
『父子鷹』 子母澤寛 （中央公論社）
『勝海舟―両国生まれの幕臣―』 墨田区教育委員会
『両国歴史散歩 高札めぐり』 墨田区観光協会
『すみだ 見どころ・味どころ』 墨田区銘品名店会
『すみだ 観光ガイドマップ』 墨田区観光協会

人間の能力形成年齢

生物学辞典・才能発見研究会他

人間の能力形成には、年齢的に「刷り込み期」「敏感期」「臨界期」「レディネス(準備度)」などの時期があるといわれている。

人間の能力別年齢形成表					
敏感期・臨界期		80%	90%	100%	備 考
能 力	感覚能力.	1才	4才	9才	視 聴 味 嗅 触 (五感)
	運動能力	3才	6才	11才	18才以降、努力で現状維持可能
	情緒能力	5才	8才	13才	喜怒哀楽の情
	社会能力	7才	10才	15才	対人関係 (自主能力)
	SEX能力	12才	15才	20才	27才以降、生活で現状維持可能
	知識能力			∞	積極精神で一生発達可能
(参考)					
年 齢 期 区 分	乳児期	0才～1才			
	幼児期	1才～6才 前期 1才～3才 後期 4才～6才			
	少年期	7才から12～13才			
	(児童期)	3～4才から12～13才			
	青春期	14～15才から18～19才 (春機発動期)			
	(青年期)	14～15才から24～25才			

平成13年作成

―勝海舟の実務の師―

幕末遠国奉行 川村清兵衛修^{ながたか}就

一六〇三年（慶長八）、徳川家康が征夷大將軍となり開いた江戸幕府は、百年を経過した十八世紀初頭になると、年貢の徴収高は停滞し武士階級の生活は困窮、また経済発展は農民の離農を余儀なくするに至った。

この幕府の窮地打開を目ざして行われたのが、享保・寛政・天保の三大改革である。

八代將軍徳川吉宗が断行した「享保の改革（一七一六～四五年）」では財政は安定し、幕府の権威は回復した。

吉宗路線を継いだ老中兼側用人の田沼意次（在職一七六七～八六年）は財政改革には成功するが、天明飢饉・農民一揆、更には譜代門閥派との軋轢などにより失脚する。

代って老中松平定信の「寛政の改革（一七八七～九三年）」は時代の流れをつかめず、改革の効果はあらなかった。

定信に代って実権を握った十一代將軍徳川家^{いえなり}斉は一七八七年（天明七）から五十年間その座にあり、更に一八四一年（天保十二）六十九歳で死去するまで大御所として強い影響力をもっていた。しかもこの間、五十五人（成人二十八人）の子女をもうけ、奢侈な生活を送り、幕政を混乱させ、幕勢降下に拍車を掛けた。その最たるものが「三方領地替」であった。一八四〇年（天保十二）十一月一日、幕府は突如、

武蔵川越藩主松平齊典なりつね(家齊の五十三番目の子、齊省を養子に貰った)十五万石を出羽荘内に、荘内藩主酒井忠器ただかた十四万石を越後長岡に、長岡藩主牧野忠雅(京都所司代職)七万四千石を川越に移す、大名の転封を発令した。この移封令の発端は齊典の荘内への所替え願いを家齊がわが子かわいさから認めたことにあった。しかしこの譜代三藩領地替えは荘内領民の激しく大規模な反対運動に発展した。(藤沢周平『義民が駆ける』参照)

一八四一年一月三十日、当「三方領地替事件」の発端である家齊が没した。(実は一月七日没)

偶、同一月七日、老中水野忠邦は、佐渡奉行川路聖謨かわじとしあきらにアヘン戦争について「イギリス軍艦が清国の一部を奪取したとのこと、日本の戒めと成るべき事で湾防備策」急務、と報せている。阿片戦争(一八四〇～四二年)について幕府は、前年一八四〇年の七月、オランダ商館長から長崎奉行に提出された「風説書」ですでに承知しており、一八四二年(天保十三)七月二十四日、さきに発令した一八二五年(文政八)の異国船打払令を改め、外国船薪水給与令を布告している。

実権者徳川家齊の死により、以後幕政は將軍徳川家慶の厚い信任のもと、老中首座水野忠邦による威権が行われることとなり、一八四一年五月二十二日「天保の改革(一八四一～四三年)」が始まる。

一八四一年七月十二日、家齊時代に発令された「三方領地替」は改革遂行を優先し中止となる。(三方領地替反対一揆)

翌四二年十月十四日、近江の幕領で新開地を検地しようとしたところ、大一揆がおこり、検地の実施を中止する。(三上山検地反対一揆)

一八四三年(天保十四)六月十一日、越後長岡藩(藩主京都所司代牧野忠雅、十一月三日老中となる)

に新潟浜村六〇八名の上地を命じ、十七日新潟奉行所を設置、勘定吟味役川村修就が初代奉行となる。

(新潟上知)

更に九月十八日、江戸・大坂の十里四方の私領を没収して幕府の直轄領とする「上知令」を発令したが、御三家・幕閣はじめ広汎な反対運動で、閏九月七日撤回に追いこまれた。そして閏九月十三日、老中水野忠邦は「国政の事不正の趣あるによつて」罷免となる。(翌一八四四年六月二十日再び老中上座に)

結局水野忠邦が断行した天保の改革はその専制化を反発されて失敗、反って幕府の最も基本的な権力である領地権・転封権の衰退を天下に露呈する結果となった。

一方、その老中水野忠邦から「北海防禦・新潟町防禦」という折からの重大な特命を受けて初代新潟奉行に任命された川村修就は、九月十六日付文書で忠邦に職務遂行上の諸願いを提出し、閏九月二十八日江戸を出立、十月九日新潟仮御役所に到着する。そして忠邦失脚後指示一つもない幕閣・重職の海防に対する認識の欠如・無知さに愛想を尽かしながらも修就は、着任の翌日から御庭番時代に体得した管理手法を活かして行動を開始する。その日新潟町は相憎の大風雪であつたが、早朝に責め馬(馬を乗り慣らすこと)と称して、海岸配置の異国船見張番所を抜き打ち視察したという。その後の職務精励ぶりを窺わせるエピソードである。

川村修就は「御庭番家筋」の旗本の出自であつた。この役職のはじまりは、紀州藩第五代藩主徳川吉宗が第八代將軍(在職一七六〇一七四五)を継承の折、紀州藩時代と同役を果たさせるべく十七名を幕臣団に編入したことにある。当一統は代々御庭番任用と決っており「御庭番筋の者」と呼ばれてい

た。役目は將軍直屬監察機関で、修就は別家川村分家の二代目であった。

序でに付記すると、新設「新潟奉行」は、「遠国奉行」^{おんごく}といわれる重要直轄地へ派遣され、將軍に代つて支配権（行政権はじめ、治安維持・裁判・徴税・処刑など）を一手に掌握している高級官僚の役職。

その川村修就初代新潟奉行が新潟へ着任した一八四三年（天保十四）十月九日、転任命令で新潟を出立する一八五二年（嘉永五）七月十八日までの九年間「一八四四年（天保十四）十二月二日弘化と改元、更に一八四八年（弘化五）二月二十八日嘉永と改元」の事績を列挙すると

將軍（幕府）水野越前守忠邦に命じられた任務は「北海防禦の御主意（將軍の意向）」の至上命令であり、それはまた「新潟町防禦」ということであつた。その使命遂行のためには「民生の安定なしには異国の侵攻防禦もできない」というのが修就の基本的な考えであつた

一 北海防禦（海防）の対応準備

○新潟奉行所の開設

組織Ⅱ奉行・組頭（二人）・配下（七十八人）・水主（四十人）

○奉行以下全員の役宅建設

○砲術訓練

着任早々に始め、翌年八月には大筒発射が出来るまでに上達。

○大筒の地元鑄造

○御備場築立

御台場・敵見・御番所・常灯・武器蔵・火薬蔵・供待。

○異国船襲来想定訓練

小舟偵察と連絡方法・近隣諸藩への連絡網の構築・配下、町人の役割配置。

最終的には三貫目玉大砲まで拵え、信濃川河口の洲崎番所付近までずらりと据え付け、行き通う船人を驚かせ、頼もしがらせたという。

二 民生安定のための諸施策

○砂防植林

一八四四年（天保十四）春着手。砂防林松を「御松」と呼称方指示、黒松苗三千本植林を手始めに、一八四九年（嘉永二）には計三万六千十四本にまでした。

○開墾

砂防の結果、七十町歩の畑を創出。

○消防

何よりも恐いものが「火事」であるとの認識のもと、着任するや十三ヶ条の「火の元掟」を布告「火の用心」精神の徹底を図り、火事場には馬で駆けつけ自ら指示を。

○儉約の奨励

一八四四年二月、華美衣服の着用・高価菓子の売買を禁止し、在任中厳しい監視を続けた。

○物価対策

着任の一八四三年十二月、まず物価を引き上げないように触れを出し、四五年（弘化二）九月、米相場引上げ禁止を、更に四九年（嘉永二）十一月には米の買い占め禁止を命じた。一方で翌五十年八月、米高

恤のため、窮民に救助米を支給、五十一年九月には、再度の米相場引上げ禁止するなど、常に町民の暮らしの向上に尽力。

○風紀肅正

港町特有な風紀肅正のため、着任の一八四三年十二月、男女混浴・町人肩かたぎぬ衣着用を禁止。四四年（天保十五）九月以降、遊女屋を「朱引きしゅひ」し、「泊茶屋・茶汲女」・「船宿・洗濯女」の呼称に。また一八四七年（弘化四）三月には諸寺院へ風俗取締り触れ書を。

以上の如く御庭番で内々遠国御用七度も勤めてさまざまな民情を知り尽した修就ならではの木目細かい施策で新潟町民の心を捉えた。新潟では現在でも修就を「大砲奉行」の異名で、その名に思いを籠めて徳を偲んでいる。

所で、修就は新潟奉行九年の間、一度も江戸に帰郷することなく職務に精励したが、目的の異国船はついに近海には現われ仕舞いであつた。

一八五二年（嘉永五）修就は新潟奉行の任を終え帰府。七月、続いて堺奉行に任じられ赴任。五十八歳の時である。

一八五三年（嘉永六）六月三日、アメリカ東インド艦隊司令官ペリー、浦賀に来航。対応に苦慮した老中阿部正弘が広く意見を求めた時、勝海舟は意見書「軍制改革と人材育成、人物本位の登用、江戸湾の台場設置、沿岸防備体制の強化、軍艦の調達など」を提出。

翌五四年、ペリー再来航し、幕府は三月三日、日米和親条約十二条を締結する。

五月二十日、修就、大坂西奉行に任じられ、堺から直行。

一八五五年（安政二）一月十九日、海防掛目付大久保忠寛（一翁）の推挙で、勝海舟、蕃書翻訳御用出役を命じられる。

二月、一翁は蕃書調書に出仕したばかりの海舟を折からの「攝海巡見（大坂湾防備体制検討現地調査団）」に大御番格海防掛勝麟太郎として一員に加えて連れていき、二週間ほど実地検分、近傍海岸巡視、御台場築造論議を体験させた。この時に同行したのが、大坂西奉行川村修就であった。以後、修就と海舟の絆の縁が続くこととなる。海舟の長崎海軍伝習所（一八五五年七月二十九日～一八五九年一月十五日）時代、修就は長崎奉行（一八五五年五月一日～翌年帰府）であり、海舟が一八六三年（文久三）に攝海砲台築造命を受けた時の大坂東町奉行は修就であった。この間、海舟の「海防意見書」の学問知識は、修就の新潟奉行九年の実務知識を吸収して、鬼に金棒の知識力に変質していった。而も幕閣・重職の海防について無知に失望してしまっていた折に得た憂国の同志に修就は出来る限りの協力を惜しまなかったと思われる。

因みに川村修就は一七九五年（寛政七）生れ、大久保一翁は一八一七年（文化十四）生れ、勝海舟は一八二三年（文政六）生れで、海舟は修就と二十八歳、一翁とは六歳の年令差があり、海舟にとって修就は名実ともに師であったし、一翁は兄弟子であった。そしてこの幕末における「開明的知識」三人の知識力は、気鋭の海舟に集約されて維新動乱期を乗り切る力になるのである。

その頃の自分について海舟は『氷川清話』で「当時私は未だ台場の事はよく知らざりしが、洋学者という廉（かど）をもって、安政二年に大坂以西の海岸に台場を築造するため、見分（けんぶん）として出張を命ぜられ、（中略）台場は西洋の弾丸を受けるために築くものであるから、（中略）段々書物の上で研究して、漸く攻城

砲、野戦砲、海岸砲の区別を解するやうになって、云々」と記している。

また同『清話』の中で、師、川村修就について海舟は「幕府には、三河武士の美風を受け正直な善い士さむらいがあつた」として小栗上野ら四人の名をあげ、「川村対馬などはよい人物だつた」と海舟流の精一杯の称賛をしている。

ままた兎に角、幕末における開明的知識人の最先端にいて、「海防」という「西洋列強の侵攻から日本を守ることが急務」を、その信条とした三人の同志の知力の具現化を担つた海舟は以後、“的”を海軍創設に絞り推進するが、その最大の所産が世界の革命史上類を見ない「江戸城の無血開城（一八六八年四月十一日）」であつたといえる。そして海舟はこの特筆に値する成果の力の源が何処にあつたかをよく承知していたのである。

義に厚い海舟は、己にその道を開いてくれた兄弟子であり、戦友であつた大久保一翁については、その長男大久保三郎を川村修就の孫、川村清雄ら五人と一八七一年（明治四）徳川家派遣留学生として留学させた。三郎は期待通り帰国後、東京帝国大学、東京高等師範学校教授を歴任する一廉の人物に成長した。

そして、幕末・維新の立役者に自分を育ててくれた川村修就に対しては、川村家の家督を継いだ一八二四年（文政七）閏八月二十八日生れ（海舟の一歳下）の次男川村帰元（修正）の長男清雄（修寛すなわち大恩人の孫に義を返すのである）。

川村清雄について広辞苑は「洋画家。江戸生れ。川上冬崖に師事、仏・伊両国に赴く。（一八五二～一九三四）」と記している。

清雄は一八六八年（明治元〓慶応四）十七歳で、父帰元隠居により家督を継ぎ、一八七一年、徳川家派遣留学生五名の一人として留学、まずアメリカに、その後フランスとイタリアにと都合十年余留学生活を送り、一八八一年（明治十四）大蔵省印刷局よりの帰国命令で帰国。この間の一八七八年（明治十二）に敬愛していた祖父修就は八十四歳で死去。帰国翌年の一月、大蔵省印刷局彫刻技手に任じられるが十一月に辞職、失職する。

翌八三年（明治十六）清雄三十二歳。一月早々、勝海舟の周旋で、徳川家歴代將軍像の制作を依頼されたのをはじまりに勝家にわが子並の庇護を受けることとなる。

海舟はその一月には早くも赤坂氷川の自邸内に清雄のための画室を建てて画業を支援するのである。その作製に協力し、我が子のように可愛がり、衣食の面倒まで見てやる関係は清雄が一八九四年（明治二十七）に勝邸を出るまで、十年以上も続いた。「我が子のように」を語る清雄の談話、「勝さんが眞^{ひいき}にして呉れた事は、逢ひますと突然^{いきなり}小言で、居ないてえと非常に褒めるのです。床の間にも居間にも他の物は懸けないで私の物だけを懸けて下さるんで、其の御恩は言葉に尽くされなです、（中略）其れで先生は何処までも外面から助けて下さって内部は奥さんが先生の着物の古いのを直したり或は新しい物を私に着せて下さったんです、奥さんが戯れに「此れは妾^{わたし}の隠し子で斯様^{こんな}に大きくなりましたから引き取りました」ッて言われる位で実に信切^{しんせつ}にして下さったのは今日も有難い事と思ッて居ります」〔『維新の洋画家 川村清雄』〕

この清雄に対する勝夫妻のつくし方から、海舟が修就から受けたものがいかに深大であつたかを窺い知ることが出来るのである。

そんな維新の洋画家・川村清雄が、めざしたのは「日本人としての日本の洋画、和魂洋才」の絵画であった。その作品には「勝海舟肖像画（左手に大刀を持つ上半身図、紙・鉛筆）」、有名な「江戸城明渡の帰途（勝海舟江戸開城図）（カンバス・油絵）」、「徳川吉宗像（板・油彩）」、「天璋院像（板・油彩）」、「形見の直垂（カンバス、油彩）」などがある。

へ主なる参考文献

『氷川清話』勝海舟 江藤淳・松浦玲編、講談社学術文庫

『維新の洋画家川村清雄』編集・発行東京都江戸東京博物館・静岡県立美術館、読売新聞社

『義民が駆ける』藤沢周平、講談社

『シリーズ藩物語、長岡藩』稲川明雄、現代書館

『大砲奉行』小松重男作・演出、「大砲奉行」上演実行委員会

『幕末遠国奉行の日記』小松重男、中央公論社

『藤沢周平の世界、義民が駆ける』編集人／向井香、朝日新聞社

—元官幣大社・正一位勲一等—

越前国一の宮 氣比神宮の謎

越前国一宮 氣比神宮は福井県敦賀市曙町にある。主祭神は伊奢沙別命。いささわけのみこと

「氣比」(筥飯)の初見は、日本書紀卷六(垂仁天皇)に、「崇神天皇の世に、「額ぬかに角つぬ有る人、一ひとつの船に乗りて、越こ国のくにの筥飯浦けひのうらに泊れり」で、「何いづれの国の人ぞ」の質問に「対へて曰はく、意富加羅国王おほからくにのこきしの子、名は都怒我阿羅斯等、亦名は宇斯岐阿利叱智干岐うしきありしちかんきと曰ふ」とある。「つぬが」から「敦賀」がこのことから、崇神天皇の時代すでに筥飯(氣比)と呼ばれ、食物に深くかわりがあり、良港で異国人が渡来し、その文化が伝来していたことが窺える。

朝鮮半島と日本海沿岸の国々はかなり早い時代から日本海を内海として交流があつたことが知られている。

朝鮮半島南部と本州の中国地方西端・北九州地方は朝鮮海峡を挟んで指呼の間である。ただこの海峡の日本海沿岸には対馬海流が、朝鮮半島南東沿岸には東鮮暖流が北上している。

古代、海流の影響は多大であつた。東シナ海を南から北上して来る黒潮は南西諸島の北で列島の太平洋側を東北に流れる黒潮と日本海側に入る潮流とに分れる。日本海に入った対馬海流には三つの流れがある。山陰から北陸沿岸を洗うもの、隠岐西で分れ佐渡で合流するもの、朝鮮半島南部沿岸から日本海中央部を東へ、男鹿半島で合流するものである。この海流に対応して航海の安全祈願の神社が。

対馬国一宮は「海神神社」、隠岐国一宮「由良比女神社」の元の名は「和多須神」、佐渡国一宮が「度津神社」と古代海上交通の要所に海神がまつられている。

更に弥生時代を象徴する稲作の神についての説話にも海流が深くかかわっている。

石見国の佐比売神話は、佐比売(ちび姫・乙子狭姫・種姫Ⅱ水の神・農耕の神)の家に旅の神が泊り、母親の大宜都比売(穀物の神)が、身体からいろいろな食べ物を出してもてなしたところ、旅の神は失礼だと怒り、大宜都比売を斬ってしまった。死に際し母神は狭姫に「形見の品を持って東の国へ行きなさい」といって亡くなった。ちび姫は母の身体から出てきた「馬や蚕、大豆、稲、麦、小豆など」を持って、かわいがっていた赤い羽根の雁の背に乗り「青い海の上を東の國を目ざして飛んで」大島(益田市)や狭姫山(益田市比礼振山)など石見西部を経て、東部大田の三瓶山(一二六メートル)に降り立った。こうして石見一帯に豊かな実りをもたらしたといわれている。

続いての丹波国の神話は有名である。

『丹波国風土記』(残欠)によれば「丹波というわけは、昔、豊受大神が伊去奈子嶽(磯砂山・六六一メートル)に天降られた時に、天道日女命(饒速日命の妃)等が大神に五穀および桑蚕等の種を求められた。そこで、豊受大神はこの嶽に真奈井を掘り、その水をそそぎ田畑を作り種を植えられた。秋には八握りもある穂がたれて実に快かった。豊受大神はこれを見て大変歓喜され、あなにえし田庭(立派に実った田庭である)とおっしゃり、再び高天原に登られた。ゆえに田庭というのである」と。

序でながら、古代、丹後はもともと古代丹波の大国であったが、元明天皇の和銅六年(七一二)に旧丹波国から五郡(加佐郡、與謝郡、竹野郡、丹波郡(現中部)、熊野郡)を割いて丹後国(たにはのみちのし

り」と命名されたものである。

氣比神宮の地理的な条件を見ると、朝鮮南部から青い海を対馬海流にのって山陰から沿岸を東に進むと奥丹後半島をめぐる若狭湾に入る。湾の西の奥には丹後国一宮籠神社が、湾中央部には若狭国一宮若狭彦神社が、そして東奥の行きどまりに、越前国一宮氣比神宮が鎮座している。「日本海海岸線が敦賀で東西性が南北性になるところに位置している」のである。かかる地勢にあることから、西の朝鮮からの渡来人もその文化もこの地に定着することになったのが敦賀ということである。

氣比神宮の「土公」(周囲に卵形の石を八角形にめぐらした盛地)は笥飯大神が背後の神体山天筒山(てづつやま)からここに降臨した聖地であるという。謎といわれているが、籠神社の豊受大神の神話と類似の水田稲作伝来説話につながるものであろう。

なお、海神の「ワタ」、若狭の「ワカサ」は朝鮮語であるという。

扱て、改めてなぞ多き氣比神宮について考察すると。

まず、その社名「氣比神宮」。氣比は笥飯(けひ)で、笥(け)は食物を盛るうつわ、飯(ひ)は「めし」。食を食(け)というのは笥が転じて食物・食事になったもの。従って氣比大明神、笥飯大神、御食津大神(みけつ)は同じ神のこと。更には宇迦之御魂神(うかのみたまのかみ)、豊受大神(とようけ)、大宜津比売神(おおげつ)、保食神(うけもちのかみ)など、その性格上、同一神と考えられている。五穀をつかさどる食物神のことである。氣比(笥飯)大神の神名は「名は体(実体)を表す」の言事(ことわざ)(言葉と出来事)通り、水田稲作の伝来、定着を物語っているのである。

次いで主祭神「伊奢沙別命(いささわけのみこと)」。氣比神宮はかつては笥飯宮とよんで新羅の王子天日槍を伊奢沙別命としてまつていたという。

言語学者の金沢庄三郎教授（一八七二～一九六七）によれば、「宇佐神宮の宇佐のサ（佐）も新羅の原号であつたソ、すなわちその「民族名ソ」から出たとあるように、この伊奢沙別のサ（奢・沙）もまた、天日槍がそこから渡来したとされている新羅のそれからきたものだつたからである。」（金達寿『日本の朝鮮文化5』）。というわけで伊奢沙別（別は古代の姓）は新羅渡来の氏族のことを指すとみるべきであろう。

当然に胆狭浅の大太刀をもって渡来した天日槍（但馬国一宮出石神社祭神）のことでもある。またそれは崇神朝に筥飯浦に上陸した、額に角有る人意富加羅国王の子、都怒我阿羅斯等と同定していいようである。角鹿は胄のことと思われ、イササの大刀とともに武具や鉄製品の伝来を物語るエピソードであろう。

祭神については主祭神伊奢沙別の他に、神功皇后はじめ六柱が合祀されている。氣比神宮に縁の深い神々といわれ、日本武尊―仲哀天皇―応神天皇は親子、仲哀天皇と神功皇后は夫婦であり、神功皇后と玉妃命は姉妹の関係にある。武内宿禰命は仲哀天皇夫婦に仕えた重要人物。

伝承によれば氣比神宮と仲哀天皇・神功皇后とのかかわりは、仲哀二年正月、氣長足姫尊を皇后とした仲哀天皇は二月、角鹿に行幸し行宮（筥飯宮）を建てて住居とした。三月の熊襲征伐には神功皇后は仲哀天皇の命で、敦賀から出発して豊浦津へ。

所で神功皇后の神話については、「三七二年、百済の肖古王、倭に使者を送り、七支刀などを贈る」（新訂『日本の歴史』総括年表（1）、朝日新聞社編）と「三六九年、倭、朝鮮に出兵、半島南部を勢力下に置く」（『日本の歴史事典』山田美佐子編・大創出版）とを軸とした私見・神功皇后年譜は次の如くであ

る。(謎の四世紀後葉)

三六一年 仲哀天皇元年。

三六二年 氣長足姫尊、皇后になる。

三六九年 二月、仲哀天皇急死。

九月、神功皇后三韓遠征を行う。

帰還後の十二月、後の応神天皇を筑紫で出産。摂政を行う。

応神天皇の異母兄、かこさかのみこ麿坂王と忍熊王を討たせる。おしくまのみこ

三七二年 百済が七支刀(三六九年紀年銘)を献上する(実際には三七一年とも)

三八九年 崩御。(参考『知っておきたい日本の神様』武光誠)

一方、氣比神宮の神社界における社格を検証すると「官幣大社」は社格筆頭、「正一位勲一等」の神階(神位)は畿外最高位、更に、明治二八年、「神社から神宮に昇格(二四神宮号)」と古代から歴代の皇室の尊崇なしにはなり得ない全国八万社の頂点に位置するといっても過言ではない。

既述の如くかつては地方神よりも国家神としてその神威があり、しかも古代、大陸と朝鮮半島からの高度の文化の受皿となってこれを琵琶湖経由で逸速く畿内にもたらした功は甚大だったことがみえてくるのである。しかしこれらの功績とは別に、皇室にとって特別の事情があったことも窺える。

三世紀末から四世紀に成立した初期ヤマト政権の支配者の性格は、多分に呪術的なものであったと古墳の副葬品から考えられている。

仲哀天皇は、神功皇后に託かかっての「新羅征伐の神託」を疑い「神の言みこと」を用いなかった崇り(神が

人をとがめるために下すわざわい)で急死する。

また、その直後、神功皇后の命を受けた武内宿禰は皇后の御子応神天皇の異母兄である麿坂王と忍熊王おしくまのみことを討つ。麿坂王は「赤い猪」に食い殺され、忍熊王は欺かれて逃げ場を失い「自分は(偽りの言葉を信じて)だまされた。」と「水に潜って」瀬田の渡りに憤死。

日本民族はその形成以来、自然の理法・目に見えないカミのはたらきかむながら(惟神の道)を尊崇する精神文化を中心として生活してきていたが仲哀天皇はそのカミの託宣を疑い、無視した咎めを受けたということであろうし、神功皇后の、応神天皇の異母兄殺害は、人倫の道に反することとして咎められるべきことであつた。この非業の最期を遂げた人々の怨霊は、まず丁寧に祀り、神として崇めうやまうしか、その崇りを鎮める法がないことから、以後の王権がその慰撫に腐心した結果が今にみる「氣比神宮」の社格名に残っているわけで、古来の日本民族の心の奥を垣間見せてくれているということであろう。

なお、この社格制度は昭和二十年(一九四五)十二月に、占領軍(GHQ)から出された「神道指令」によって廃止された。が、社格名だけは旧称として今でも使用されている。

(『神社の基礎知識』高見寛孝)

〔参考文献〕(本文中に明記した一部を除く)

『日本書紀』巻第五、巻第十(神社新報社)

『日本書紀(上)全現代語訳』宇治谷孟(講談社)

- 『日本の歴史』総括年表(1) 朝日新聞社編
- 『新編日本史』朝比奈正幸他(原書房)
- 『一宮巡拝の旅』入江孝一郎(みくに書房)
- 『日本廻国記一宮巡歴』川村二郎(講談社)
- 『諸国一宮と謎の神々』新人物往来社
- 『日本の中の朝鮮文化3・5』金達寿(講談社)
- 『週刊神社紀行40』(学習研究社)
- 『古代の日本海文化』藤田富士夫(中央公論社)
- 『ここまでわかった「古代」謎の4世紀』『歴史読本』編集部編(KADOKAWA)
- 『神社の古代史』『歴史読本』編集部編(KADOKAWA)
- 『知っておきたい日本の神様』武光誠(角川学芸出版)
- 『神社の起源と古代朝鮮』岡谷公二(平凡社)
- 『日本の神様のすべて』橋詰久史編(宝島社)

あとがき

今年（平成二八年）一月、「史遊サロン世話人」新井宏様より、手持ちの文章と「史遊会通信掲載文」を纏めて小冊子にしてはどうかと、既掲載文を抜き出してのおすすみを頂いた。

私事であるが、私が当「史遊会」に入会したのは平成二六年一月で、それまでの十数年間は「友の会会員」であった。「友の会」に紹介して下さった故正木清幸大先輩が「史遊会」創立当初からの「友の会会員」で終始されたこともあり、である。

また、入会二年のこととして、既掲載分では

弥生時代・古代日本海の神々のこと

宗教・釈迦牟尼の「智慧と慈悲」の教え

幕末維新・勝海舟とその周辺のこと

などに文、中途の思いもあつてか、あつという間に一年が経過という始末。

というわけで新井様に一方ならぬお世話をおかけしての小冊子となりました。

この場を借り、厚くお礼申し上げます。

著者略歴

諸橋 奏（もろはし すすむ）

昭和七年一月 新潟県長岡市生まれ

長岡高校卒

東北大学法学部卒

昭和二十九年 明治乳業（株）（現（株）明治）入社

同社 常務取締役・顧問

史遊会会員

東京都板橋区在住